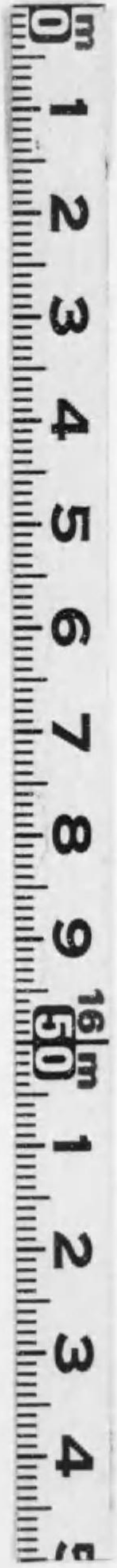


501  
97



始



2.8.3

501-97

河原辰三著



報  
ひ  
求  
ぬ  
愛

東京

株式會社  
目黒分店刊行



---

偶入菩提境 禪心步步如  
百年誰在世 三界本無家  
猿提水中月 蝶追風裏花  
問僧僧不答 垣外夕陽斜

---

此の著を

戸田、岡本、新井の、三兄に捧げ、余の、半生に取りて、最も意味深い時期を、特別の友情を持つて、余を育ぐまされし、御厚意に對して、忘れがたき、記念とす。

向島の假寓にて

著 者

大正十年五月六日の夜  
祖父急篤の電報を受取りし夜

無苦可捨  
陰入皆如

奥深い湖水の底にでも沈んでゐるような静寂な僧房の一草庵より、思ひ出深い華やかな都に居ます。わが友野村君！ その後は思ひ乍ら随分意外な御無沙汰をして失禮しました。この間の君の便りに於れば、君達御夫婦は別に變りもなく、お暮らしの由、何よりのことです。實は早速御返事を差上る可きでしたが、今度私が長い間の僧房生活を切り上げて上京するにつけ、多忙の爲つい失禮しました。

奥深い湖水の底にでも沈んでゐるような静寂な僧房の一草庵より、思ひ出深い華やかな都に居ます。わが友野村君！ その後は思ひ乍ら随分意外な御無沙汰をして失禮しました。この間の君の便りに於れば、君達御夫婦は別に變りもなく、お暮らしの由、何よりのことです。實は早速御返事を差上る可きでしたが、今度私が長い間の僧房生活を切り上げて上京するにつけ、多忙の爲つい失禮しました。

思へば野村君！ 再び見まいとした都へ！ 二年後に僧房生活を捨て、行こうとするには、そこに何か心の變轉が無ければならないはずである。

何が得るものがあつて爲さねばならぬと叫ぶ内心の要求があらねばならぬはずである。思へば長い間 私はこの心の叫びの來る日を、怎麼に待ち遠しく思つたことであらう。今こそその時が來た。生れ變つた悠一郎が再び懐かしい君の前に出逢ふことは、私自身に取つて、怎麼に喜び深いかを察してくれ給へ。

野村君！ 今更こと新らしく此塵ことを云ふのは何んだけれど、人間は、ほんとうに苦しむ事だ、泣くことだ、寂しさに凝つと堪へることだ、深い貴い生の感謝は、かならずや、そうした境地から生れ出るよ、ほんとに怒力と信仰ひとつで人間はかならず救われることを、心から君につける！ 運命はいつまでも残酷ではない。

私は今、深い生の歡喜を抱いて、再び見まいとした都へ立とうとしてゐる。喜んでくれ給へ。

長い間傷き易い、弱い私を育て、くれた懐かしい僧院よ！ 今は夜の九時、若い私の道友の、僧侶達は、明朝早くの參禪に起きる爲に、もう寢床についてしまつた。

あたりは森閑として、あだかも湖水の底に獨り沈んでゐるかのような、靜寂な空氣に、私は今晚限り、別れをつけねばならないのかと思つたら、見るもの總べてが、懐かしく今更に眺められた。

別れた、妻を憶い出して、限りない哀愁に襲われた時に、孤獨の寂寞に堪へかねて酒と女とを亂に欲した時に、思想の疑惑と、信念の薄らいだ時に遠い故郷に私の身を案じて下さる両親を憶ふ時に、未來を思ふて、生に對する光明を失つた時に、老師の訓示された「只座れ」を眞の道に

入る只一つの手段として、又、そうした迷夢と悩みとを慰やす、只一つの方法として、私はいつも自分の爲に、定められたこの僧房の一室に、幾度か、そうした悩みを抱き乍ら、凝つと座つてゐたことであらう。

お、そうした私の、悩みと、寂しさと、悲しみとを育て、くれた、忘れがたい、この枯淡と靜寂に満ちた、僧房よ！

私は今再び、人生の戰場に立とうとしてゐる。

けれども、いつかは又再び、僧院へ歸へり修養することもあるであらうと、思ふもの、今更乍ら離れがたい情にせまつて、今晚一夜は私には怎うしても眠むられない。

もう仕度も出来たし、明晩は鎌倉の町の、伯母さんの家で一宿し、明後日は早く、東京驛の、ブラットホームで、久し振りに君達夫婦に接することを思ふと心が踊つて仕方がない。

野村君！ その時流れ出づる涙は、もう昔の涙ではないことを信じてくれ、悠一郎は生れ變つた。魂の底の底から、深かい悩みの洗禮を受けて來た。

大觀喜地とはこうした心境を云ふのだらうか？ 心がはじき切れるように、喜びと感謝に満ちてゐる、もう大丈夫だ、自分の行く可き路と、自己の本分とを見出したからには、今後は只燃ゆ

るがよ々な信仰だ。

早く君に逢いたい。そうして、この喜びを分ちて其に味つてもらいたい。その日を待ちつゝ、筆を擱く、末筆乍妻君によろしく。

僧房にて河野悠一郎

野村君！

こうした手紙が、突然日曜の朝着いて、私達夫婦を驚かした。

いつも自分は、悠さんのことを思ひ出す度びごとに、長い手紙を出すけれど、その返事はいつも物たりない程簡単な端書に、

清風明月和相共

無字教卷不知盡

と云つたようなことが書いてあるのみである。

一ヶ月ばかり前に、秋も段々深くなつたので、その後の無沙汰を謝する爲妻と二人で寄せ書きのようなものを書いて、寂しい僧院の一室に、孤獨な生活を送つてゐる悠さんを慰める爲に送つ

たけれども、どうしたことがその返事が無いので實は心配をしてゐた處。今意外にも、久し振りに長い手紙が來たので、私達はことによつたら何にか悠さんの身に起つたのではなからうかと驚きもし又、物めづらしくも思つた。

二

自分達は悠さんの手紙を読み終つて、ほつと安心した。

「あら、東京へ出てゐらつしやるのね。」

妻はそう云つて、心から喜んだ。自分もたまらなく嬉しかつた。自分はこの夏、わざわざ鎌倉まで悠さんに逢いに行つたけれど、三浦半島へ雲水に出かけて留守であつたので逢へなかつたことを思ひ出し一刻も早く、變り果てた悠さんの姿を眺めたかつた。

「明朝六時だね。お前も東京驛まで行くか。」

「え、つれて行つて頂きますは。」

「随分變つたらうな。」

「そうね、私早く逢いたいわ。」



妻は、親身の兄さんにも逢ふように喜んだ。自分も、又良い意外の話相手が出来たのを、この頃の無味單調な生活に倦み果て、ゐる自分には、無上に期待された。

「それでも、この手紙では、もう悟られたような事が書いてあるけれど、弱い人だからな。」

自分はふと悠さんが奥さんと別れてから雲水の途上より送られたあの長い手紙を憶い出した。

「それにしても、お寺へ行かれてからもう二年になりますかね。」

「そうだな、この間のような気がしたけれど、もう其塵に長くなるかな」

「よくまあ、それでも一人で寂しかなかつたか知ら。」

「ほんとうだね、僕なんかは十日だつて駄目だ、それに人間なんて、どこまで行つたつて悟れるものじゃないとあきらめてゐるけれど、悠さんはほんとうに悟つたのか知ら。」

自分は第一、それが疑問であつた。

「そりや、貴男のような人は、とても駄目よ、」

「馬鹿にするな、そりや僕だつて、悟ろうと思へば悟れん事はないさ人間の力で悟る事が出来ないと云ふことはない、けれども、悟つて終へば、石ころ同然で人間味から遠ざかるような気がしてならない、しかし、そうかと云つてこのまゝでも、耐へられないんだ俺も早くどうにかしな

くては駄目だ。」

「少しは人間味を遠ざかるのも、いゝじやないの、あんまり、貴男のように人間味があり過ぎても、こまるのね。」

妻はそう云つて微笑した。

その時、自分も自分をかへり見て苦笑した。

人間として、あくまでも如實に人生を見詰めようとして、長い間苦しんだけれど、自分は果たして、人生のどこまで眞の姿に喰入つて行つたかと思ふ時に何ものをも得ることなく、空しく歸つて来た、倦怠した淺ましい自分の姿を眺めたら、無上に遺瀨なかつた。

淺ましい、面を覆ふようなこの現實が、果たして人生の眞相であらうか、まるで、我鬼道と畜生道との中から一步も出でずに、又出でようともせず、もがき苦しみ乍ら、老ひて死んでゆくのが眞の人生であらうか？ 自分はふとある人の云つた。

「人間が地球の上に住むと云ふことは腐つた團子に黴の生へたようなもので、元來くだらないものだ」

と云つた言葉を憶ひ出したけれど、其塵ように、世の中を茶化して了ふことも、自分には怎う

しても出来なかつた。

感激！

自分は今切に、感激を欲してゐる。何にものでもい、から、倦怠し切つてゐるこの胸に火のよ  
うに燃ゆる感激が欲しい、感激のある處に人は始めて、眞に生き甲斐を見出すことが出来るのに  
目下の自分は、感激す可き何ものをも持たない。

「たとへ、苦しく、淺ましくとも、これが人生であるならば、面と向かつて味ひ盡そう。味ふ  
ことのみが、自分に取つて眞理だ、悲痛な生の眞味はそこから生れるであらう。」

そうしたモットーの下に、自分は長い間あらゆる人生の裏面に喰入つては見たが、自分はそ  
うした處からかへつて、内心の要求を裏切つたあまりに淺ましい、多くの虚偽と空しい徒勞とを見  
せつけられて失望して了つた。

「兎に角くまあ悠さんに逢つて見よう、随分變つたらうな。」

自分は、そう云つて針仕事をしてゐる妻の世帯じみた顔をかへり見た。

「それにしても悠さんの奥さんにこの事をお知らせした方がい、か知ら。」

妻はもう女心に悠さん夫婦の複雑した離別の事情を忘れて、單純に逢へるものと思つてゐた。

「さあ…… どうしたもののかね。」

「知らせてお上げなさいよ、きつとお喜びになるわ。」

妻はもうある悲劇の主人公にでもなつた心持で涙ぐんでゐた。

「知らせて上げようか、それにしても奥さんは逢ふまい。」

「其處ことないわ、いくら怎麼事情で別れても私達の思ふ以上に思つてゐらつしやると私思ふ  
わ、人間ですものお知らせして逢われないなら逢われないでい、じやないの。」

妻はそう云つて、頻りに自分をすゝめた。

自分もそれでは奥さんに悠さんが今度上京されることだけと知らせて上げようと思つた。逢ふ  
逢ふないは奥さんの勝手だ。自分はそう思つて午後奥さんの家をたづねることにした。

三

自分は電車の中で今後の悠さんと、奥さんとの仲を様々に、想像して見た。奥さんには去年の  
暮、西の市の晩に淺草で逢つたきり、その後の消息は少しも知らない。別れた當時は一二度自分  
達の住んで居る築地の佗住ひをたづねてくれたけれど、いつも自分は奥さんを苦しめるような事

ばかり云ふので、奥さんも其後はつたり来なくなつて了つた。

あの酉の市の晩に、弟さんをつれて俯向き勝ちに歩んでゐた、あの病み上りのやつれ果てた奥さんの寂しい姿が幻の如く浮かんで来た。

「なぜ奥さんは悠さんと別れたんだらう」自分は奥さんを思ふごとに、いつもそうした疑問にぶつつかつた。そうして今だにその謎が解けづにゐる。

その後、随分長くなつたんだから、奥さんは、それとも他へお嫁めに行かれたらうか、自分は様々なことを想像しながら今後の悠さん達二人の生活を一種の好奇心を持つて想像した。

何んの因縁で自分は此處に悠さんに心を引かれてゐるのか、自分でも自分の心がよく解されなかつた。

悠さん達夫婦をテーマとして描いた創作は思想家としての悠さんを描いたに過ぎなかつた。謎の如き奥さんの心と共に未完成に終つたあの創作を思ふごとに、自分はその後の悠さんの心境がたまらなくいろいろの意味に於て期待された。

實行家としてあまりに涙もろく、弱かつた悠さんは、怎麼に自己の思想と矛盾した己の生活に

對して心から苦惱と憎惡に惱まされたことであらう。

自分は今でもあの最後に、雲水の途上から送られた沈痛な懺悔に満ちた手紙を憶い出して果てしない人間の苦惱を切實に思ひ出した。

「私は自分の愛する妻が、他に戀人が出来て駆落しても、あゝそうかと云つて平氣で居られるような心になりたい。」

と言つた言葉を自分は今でも思ひ出す。

そうした心持に、人間は果たして成れるものだろうか？

自分は其處ことを想像しながらいつか谷中の奥さんの家の前に立つてゐた。

相憎く奥さんは留守であつた、いつも出て来る奥さんのお母さんがいぶかしげに自分の姿を眺めてゐたが變がて、

「あゝ、貴男が野村さんでしたかつい見忘れて了つて失禮しました。時々まち子も貴男のおうわさをして居りましたけれどまあその後は別にお變りも御座いませんでしたか。」

と愛相よくむかへてくれた。

「有難うございます。奥さんもその後お變りもございませんですか、御病氣は如何で御さいま

す。」

「有難うございます。お蔭様でこの頃はもうすっかり丈夫な身體になりました。毎日遊んでゐるのも意屈だからなどと申しまして、此頃は日本橋のある会社の事務員に出て居りますの。」

お母さんは、そう云ひ乍ら遊茶をすゝめてくれた。

「それにしても、河野さんはその後何してゐらつしやるんでしようか、私の方へは、もうあれつきりお便りもございませんので、蔭では怎麼にかお案じして居たか知れませんか。田舎へお歸へりになつたんでしようか、それともづつとお寺にゐらつしやるのでしようか？　もうかれこれ二年になりますからね。」

お母さんはそう云つて心から悠さんの身を案じてゐるらしかつた。かつては自分の娘の夫として種々世話になつた昔を憶ひ出し乍ら、老の瞳に涙を溜めてゐた。

「實は私もいろいろお世話になつたので人知れず悠さんのことを心配して居りましたのです。私の方へは時々簡単なお便りが参ります。しかし悠さんも變つてゐますよづつとあれから寺に居られたようです。」

自分はそう云つてぐつと遊茶を呑みほした。

「ほんとにねあの方こそ田舎へお歸へりになれば、立派な若旦那として暮せる御身分でありながらね何も其處にお寺になぞ二年も居る必要がないじゃありませんか。ことに働き盛りのお若い身でありながら。」

お母さんはそう云つて嘆息した。

自分は、もうこう云ふ人達といくら話した處で悠さんの心持や苦しみを解されるものではないと断念したので、早く話を切り上げて了ひたかつた。

## 四

「まあ世間では様々に云ふようですけれど僕は悠さんは、人として非常に偉らい人だと思つてゐます。少なくとも偉い人にならうとしてゐる人だと思ひます。それは金を儲ける事は出来ないでしようけれど。」

自分はそう云つて暗に皮肉のやうな冷笑に近い眸をお母さんに向けた。

「そうでしょうかね。しかし何んにも偽さらないじゃありませんか。私だつて世間から河野さんが意氣地がないなぞと云われますとほんとうに人事でないように腹が立ちますよ。」

「まあ其處ことはようござんすよ、奥さんはしかし其の後どこへでもお嫁にゐらつしやる様なお話はございませぬのですか」

自分は凝つとお母さんの顔色をうかがつた。

「え、實はまち子の病氣もほゞ丈夫な身體になりましたものですから、四五軒娶らいに來て下さつた處もございませぬの、けれども當人が一生もう獨身で暮らすなぞと申しまして一向聞入れませんので、私もほんとうに困つてゐるのです、まだ二十四や五の若かい身空で、一生獨身なぞと云つても、世間が承知しませんので私も親としてほんとうに心配でなりません。そうかと申して河野さんとはあの様な譯で離別したものですから、又元々通りになると云ふこともこちらの意地としても出來ませぬし、それに河野さんだつてその後一度のお便りのない處を見ればもうあの子の事はお忘れになつてゐらつしやるでしよう。」

お母さんはそう云つて心配そうな顔を無理に技巧を勞したような微笑をもつて打ち消した。

「一生獨身ですつて、奥さんもしかし怎う云ふ心でゐらつしやるのでしよう。少なくとも僕に位ひほんとうの心を話して下さつてもいいと思ふですが。」

自分はつけつけ心から不平あるらしく云つてお母さんの顔色をうかがつた。

「しかし其處莫迦なことをおつしやつたつて歳老ひて怎うなさるおつもりなんでしょう、」

「何んでございませぬかこの間もよく意見したのでございませぬけれど怎うしても聞がないのでござんすよ。ねへ貴男、いくら丈夫になつたからと申しましても根が病身なものですからおよしと云ふのですけれどござんす。朝早くから夕方まで會社で務め夜分は夜學へ通つて家へ歸へるのはいつとも十時頃でござんすの。ほんとうに一時間の休みもないんですから、今に身體を悪くするよと申しましても聞入れず意地でもタイピストとして一生立つと云ふのでござんす。」

お母さんはそう云つて涙ぐんだ。

自分は意外な奥さんの志を聞いて知らず知らずの内に頭が下がつた。そうしてもうこれ以上何にも云へなかつた。

奥さんにして、もしも悠さんを思ふ心があるとしたならばたとへ世間的な意氣地や義理人情や嘲笑を葬り去つても再び夫婦にして上げなくてはならないと自分は思つた。

たとへ奥さんが、もしもそうした世間的な事に囚われて、自己内心の要求を偽つてまでも世間の爲に生きようとなさるならば自分は自分の力の出來得る限り奥さんやお母さんの迷言を破り去らうと決心した。

「實は、お母さん、今日伺いましたのは別でもございませぬけれど長い間お寺にゐらつしやつた、悠さんが何にか志を抱いて再び東京へ明朝出てゐらしゃいます……」

私達夫婦は朝六時まで東京驛へ参りまして久し振りにお迎へするのです。それにつきましてたとへ離別なさつたとしてもかつては奥さんの旦那さんでございませぬから、御一緒に東京驛までお迎へに、お誘ひしたのです。」

自分はそう云つてお母さんの返答を待つた。

お母さんはことの意外に驚いた。

「あゝ、そうでございますか、私の方へは別に何んの御知らせもありませんけれど、まち子に話したならば、怎麼にか嬉こぶ事でしょう實は私もお別れしてからそれはそれは蔭になつて、怎麼にお案じしたか知れませぬのでしたもので。」

「兎に角奥さんにそれだけの事をおつしやつて下さい、ゐらつしやるゐらつしやらぬは奥さんのご勝手ですけれど自分としては一樣お話ししたいような氣がしましたので、更の他人の自分ですらもたまらなく逢いたいのですもの」

自分はそう云つて冷然としていとまをつけた。冷然とした事に依つて、少なくとも奥さんやお母

さんをして、くだらぬ世間態から人間性に忠實ならしめようと考へたから。

### 五

奥さんの家を出た自分は、かつて悠さん夫婦の住んでゐた門の破れた古寺の前を通り乍ら様な追憶に耽けつた。

悠さんは二年間の僧房生活に依つて、孤獨と打ち勝つことに依つて、果たして何物を得て来たことであらう、別れた妻を思い出して限りない憂愁に囚われた時悠さんはあの閉寂と枯淡に満ちた僧房の一室に、じつと座つてゐたと云ふけれど、果たして酒と女とに一時たりとも、脱がれようとした事は無かつたらうか。其塵ことを思つてゐると自分はあの超然とした中にどことなく、深かい苦惱に満ちた惱ましげな悠さんの姿が幻の如く浮んで来た。

奥さんも又そうである。

悠さんに別れてから二年間、生涯獨身生活をおし通そうとして、雄々しくも人生の戦場に立つと決心するまで、幾多の誘惑と心の疑惑と不安に悩まされはしなかつたらうか！

自分は様々なことを考へながら今後の悠さん夫婦？ 其塵ことまでを想像して來ると、自分は

再び筆を取つて悠さん夫婦を骨子として書いた自分の最初の創作の續篇を書いて見たくなつた。かつて悠さんは自分に、

「私のような人間を書いた處で現文壇には受けが悪いよ、よし給へ。」

と云われた事を思い出した。けれども幸ひにして多くの人達から意外に、期待された言葉を送られたので、自分は少くもそうした人達の爲に筆を取ろうと思つた。文壇と云ふせま苦しい不愉快な世界から、受がよからうと、悪るからうと、其處ことはもう自分にはどうでもよかつた。自分は自分の信んずる路に忠實に生きたいと思ふ。

本地の風光に接んとして悩む人、眞理と共に生きようと悶ゆる人、少なくとも自分の知れる悠さんは眞面目に、そうした最も貴い人間苦を續けてゐる雄々しい勇者である。そうした眞の叫びが藝術でないとするならば、藝術とはあまりに目下の自分とは没交渉であるそれ故に自分は、その人を描くに、何んのはばかり處があろうか。

正直自分は作家として世に立とうとした。藝術が此の世の中で、最も貴い永遠なものだと信じてゐた。今自分はその愚を笑わずにはゐられない。少なくとも今まで人生と藝術に對してゐた態度を笑はずにはゐられない。

自分はまづ藝術家となる前に人として生きなくてはならないと切に思ふようになった。人として生くることは、少なくも眞の人として生くるにはまづ眞理を體得して、しかる後に眞理と共に生きてこそ、始めて自分は眞に偉大なる藝術を生む事が出来るのだと悠さんの云つたことがしきりに思われる。眞の叫びを閑却した藝術はいか程巧みに描こうとも、それは眞の藝術とは思われなくなつた。それは寫眞だ讀心術だ藝術は少なくも眞理の叫びでありたい、魂の故郷への消息でありたい、この頃自分は切實に信んずるようになった。

それ故に相手とするものは藝術よりも先づ眞理だ、文壇よりも惱める民衆だ。

日常生活に疲かれて役所から歸つて来て、妻君や子供達と楽しい食卓に一日の勞を忘れようとする貧しい、しかも安價な生に酔へる多くの人達や愛さんとして愛し得ざる夫婦間の葛藤に絶えず悩まされてゐる不幸な人達の爲に、あるいは、限らない現實生活の不安と絶望とに、身向きも出來ずに悩んでゐる人達の爲に、(自分もそうだが自分もその一人だ) 少なくとも人生に對して、眞面目に悩んでゐる悠さんを創作することが、自分には益々無意味な從勞と思われなくなつて來た。

自分はそれにしても、悠さんが早く本地の風光に接し本來の面目を悟了し、自分達の悩みを快刀亂麻を絶つように解決してくれる日を待とうと思つた。

自分は、今非常に疲れてゐる。

このまゝ、現實にふれたり傍観することには、今倦いてゐる。

どうにかしなくてはならないと、絶へず思つてゐるものの泥路へ迷ひ込んだように脱れよう、脱れようとあせれば、あせる程現實の汚毒に染まつてゆく。

自分は其塵ことを考へ乍ら、いつの間にか自分の家の前へ來てゐた。

「貴男それにしては悠さんがお出でになつて、どこへお宿りになるの。」

妻はそう云つて、みそぼらしい自分達の室を見まわした。

「そうだなあ、此塵せまい處じや何んだしそつかと云つて別に行かれる處もないだろう、まあ悠さんさへ御承知らな此塵處でも當分居てもらをう。」

「だつて、蒲團も無いじやないの。」

「借りてくるよ、まあ其塵心配せずともいいそれよりか何にかと金も入るだろうから、少し用意して置こう僕はもう少しも無いがお前は少しは持つてゐるか。」

自分はそう云つて三十錢しか這入つてゐない紙入をほおり出した。

「私だつて無いわ。」

妻は泣き出しそくな不安な顔をして帯の間から出した紙入にも二圓五拾錢ばかりしか這入つてゐなかつた。

「こればかりで今月は、どうするつもりなんだ。」

自分は自棄に近い捨ゼリフを世帯じみてうつむいてゐる妻にあびせかけた。

「すみません、いくら儉約しても怎うしても、たりないんですものね貴男後生ですから來月から内職させて頂戴いつも此塵に貴男ばかり、苦しめてすみませんもの。」

いくらかヒステリカルに惱まされてゐる妻はすぐ此塵ことを云つて涙ぐんだ。

六

「自分は又例のヒステリーが起つたなと思つたけれど貧しい爲に妻のヒステリーを起こさせたのだと云ふ何んとも名狀しがたい心持が自分自身でおかたし罪のやうに心苦しかつた。」

「悪るかつた、悪るかつた皆僕が意氣地が無いために、お前にも此塵に苦勞をかけてすまなかつた。」

自分はそう云つて妻をなぐさめたさうして、涙ぐんでゐる姿を眺めてゐると貧が生むところの



一種名狀しがたい悲しさが胸に、こみ上げて来てきつと抱きしめた。

妻の熱い涙がかわき切つた自分の冷たい頬に落ちた。

貴い涙だ！

自分は我知らずかく叫んだ。

「すまない、辛棒してくれ今に怎うにかするから。」

「だつて私なんか怎うでもい、けれど、貴男がお氣の毒でありませんわ。」

自分達は貧しい乍ら、鬼に角そう云つて慰め合つた。暗黙の内にお互いに感謝し合ふ貴い幸福を、貧の中にのみ見出した。

先月一杯、神経衰弱に苦しめられて會社を休んでゐた自分は、月給は一文も這入らずその上藥代を拂つたりしたので、只さへ不足な處一層金にこまつた。淺草の實家から毎月送つてもらふ宿料は二月分先き借してある爲に、もらいには行き憎くかつた。それ故に妻と自分の夏物、全て質屋の倉へ這入つてゐる。

「ね貴男お召の羽織を入れましょうか。」

妻はその時突然そう云つて寂しい微笑をもらした。

「入れてもい、けれど、明朝着てゆくにこまるじやないか歸つて來てから入れなさい。」

「そうねえ。」

「自分は鬼に角書店へ行つて、いくらか借りてこよう自分の本でいくらか儲つてゐるだろうか。」

「自分はそう云つて、妻をなだめ乍ら外套を引つかけて家を出たが、何んだか金を借りにゆくと云ふことが、自分には地獄の底へ落ちてゆくように切なかつた。築地に世帯を持つまでは、金の有難味を知つたことのない境遇に生れた自分であるが故に、そうした感じを一層切にした。

聞き入れてくれるか知ら？　そう思ふと金の話になると嫌やな顔をする書店の主人の顔が幻の如く貧にふるへてゐる胸の中に浮かんで來た。

あ、金が欲しい。

「金は不必要だが生活の安定を得るだけは欲しい。」と云つた悠さんの言葉が、身にしみじみ思ひ出された。あの時は只笑つて聞いてゐた事が今は笑へなくなつた。此塵時にもしも路傍に金が落ちてゐたとしたなら、自分は果たして警察へとけるだろうか？

自分で自分の心に問ふて見た時に、自分は急に恥づかしくなつて苦笑ひした。

悠さんは東京にゐる間、今自分達のなめてゐるような苦がい驗經を味わ、れたのだと思つた。それにしても悠さん夫婦は病身な奥さんをつれてよく五拾圓で暮らせたものだと思つた。

自分達にはとても喰へない、淺草の實家から毎月助けてもらつてやつとだつた。

悠さんを骨子とした自分の最初の本は無名の作家であると云ふこと、内容がどうも現文壇に受けが悪るそうだと云ふ事に依つて、ほんの纒かな原稿料で賣拂つて了つたのである。書店としてもそれは冒險な出版ではあつたらうけれど、幸ひにして版を重ねるようになったことは何より書店の爲によかつた。

それ故にせめては版を重ねること位ひに儲けの十分の一なりとも、自分から云ひ出さなくとも心あつたならくれはしまひか……そうした自分勝手な考へは、要するに金の世の中へは通じない問題であつた。

自分は非常に心苦しかつたけれど書店の門を思ひ切つて這入つた。

いつも出てくる人のよさそうな顔をした心切な、支配人のK氏が心よく自分の要求を承諾してくれた時はほつと安心した。

「それはおこまりでしょう兎に角主人にも話して見ますから少しお待ち下さい。」

「ですから今申し上たような事情なんですもの私としましては、無理にとはお願いしませんけれど何分よろしく願ひします。」

「ほんとうにね昔男に云われるまでもなく、いくらか差上げなくてはならないんですけれど、広告費にも意外にか、つて居りますしどうぞまゝ、悪しからず思つて下さい、私も仲に立つてこまりますから。」

「いや、それはお察しいたします。」

自分はもうそれ以上云へなくなつた。善良なK氏をそれ以上苦しめたくなかつた。

「少しお待ち下さい。」

「どうぞ宜敷願ひします。」

自分はK氏の去つた跡で、處在なく應接室のテーブルの上にある煙草を取つて吸つてゐた。

「何んと云ふだらうあれ位ゐるなはした金、ああ、ああ貧乏文士でつらいものだなあ。」

自分はひとり言をつぶやきながら主人の出てくるのを待つた。

聽て主人の足音がした。

その音がづきん／＼と自分の心臓に響く。何んだ自分は悪い事をしたのじやないぞそれだのに自分のこの心臓の誇動は、どうした事あのか。あだかもあの罪人が白晝の光線にあびへるかのやうに、金を無心に來ると云ふ事は、此處にづらいものか知ら、その時

「野村君！」

と云つて主人は這入つて來た。

「K氏から話があつたのをそれでは差上げませう。」

そう云つて主人は片手に持つてゐた金を自分の前へ置いた。

自分はその時主人の顔色の中にあきらかに侮蔑に近かい不愉快さを見出した。

自分は何にか良心に恥づ可きことをした時のやうに、恥づ可きことをして公衆の前で曝露された時のように冷たい汗がしきりに湧いた。そうして妙に頭が上氣して多くの人達が一切に自分を侮蔑して、どこからとなく冷笑をあびせかけてゐるやうに妙に後暗い、不愉快な氣分がした。此處ことを云ひにくるのぢやなかつた。こればかりの金の爲に此處に不愉快な思ひをするなら來なければよかつた。

「どうもすみません。有難うございました。」

自分はそう云ふや否や、逃げるやうにして應接室を飛び出した。

神樂坂の雑踏の中に立つた時に自分は、ほつとして我にかへつた。そうして今一度袖に手を入れてもらつた金を握つて見た。

半年以上も、貧と戦ひ乍ら苦心して作つた自分の處女作の報酬が今自分の手の中にある僅かな金に過ぎないのかと思つたら、急に我知らず涙が冷たく光つてゐる自分の眸に、にじんで來た。その上向あの乞食が物もらひに行く時のやうに、おどろ／＼してゐた淺ましい今の時分の姿がたまたまなく遺瀨なかつた。

苦心して書いても、相當な収入を得られない藝術家の貧しい生活が自分を非常に不安にした。

自分はつとめて不愉快な感情を打ち消して、灯ともし頃築の家へ歸つた。

「おい金をやらう、此だけあつたら今月は淺草の家へ無心を云はなくなつて喰つて行けるだらうな。」

自分はさう云つて妻に金を渡した。さうしてつとめて快活に裝ふて、妻を慰めた。

思へば長い間、貧の爲めに苦しめた故が、自分と同棲してから二年にもならない内に、彼の女

の姿からはあの生々しい女學生時代の純真な感じが、いつの間にか無くなってしまった。さうしてめつきり世帯染みた妻の寂しい微笑を、自分は無心に眺めて居られなかつた。

「貴男よかつたわね、これだけあつたら悠さんがるらつしやつてもいいわね。」  
妻はさう云つて心から金に頭を下けた。

「そればかりの金其塵に嬉れしいのか。」

「だつてこればかりでも無かつたら喰べて行かれないじゃないの。」

その時洩らした妻の微笑は底氣味の悪い冷さがあつた。

「それもさうだな實際悲惨だ。」

自分はもう妻の顔を見てゐるのが苦しくなつて來た。

「喰べて行かれないじゃないの。」妻のその言葉が妙に自分の胸に、こびりついて自分の生活に對する不安を一層深くした。それのみならずこの頃の妻の胸の中に、只さうした問題のみが喰入つてゐるのかと考へたらたまらなく不憫に思はれた。

相常な家庭に生れて、何不自由なく娘時代を過した妻は、只自分と結婚したが爲に、家や兩親を捨て、自分のやうな男を信じて縋つたが爲に、貧しい現在の苦しみと不安とを誰とて、打ち明

けて頼る人のない心をつつたら自分は益々居ても立つてもたまらなくなつて凝つとしてゐられなかつた。

「おい其塵に、くよくよ思ふないつまでもお前に貧乏させやしないから。」

「私くよくよなんかしない事よ、只貴男にお氣の毒でねその變りいつまでも愛して置戴ね、私もう誰も頼りになる人無いんですもの。」

妻はさう云つて涙ぐんだ。

「もう其塵ことはい、よ、お前さへ辛棒してくれ、ば僕は此塵幸福なことはないよ。」

さう云つて自分はやつれた妻を抱きしめてその涙をふいてやつた。

「さあもう其塵こと考へるのよして明朝は早いんだから早く寢やう。」

「さうねえ、床を取りまじやうか。」

妻はさう云つてやがて機嫌を取りなほして立ち上がった。自分はその後姿を寂しい思ひをして眺めてゐた。

十一月の末とは云へ屋根瓦が薄化粧したやうに降つた霜が朝の日光に冷たく光つてゐるよく晴れた、朝であつた。

自分は妻と二人で東京驛のプラットホームの片隅に寄り添ふて六時三十分着の横須賀線の列車を待つた。

「もう十分ですね奥さんはこないのか知ら。」

妻はいまいますさうに云つて自分をかへり見た。

「もう來られない處を見ると矢張り來られないのだらね。」

「薄情な方ねよくまあ人は其處こと平氣でゐられるのね、いくら離別したつて嫌いで別れたんじやなければ誰が止めたつて逢ひにくるわ、矢張り貴男奥さんは悠さんを捨てたのよ。」

「そうかな。」

此座會話をしてゐる時に汽車は靜かに構内へ這入つて來た。自分達は悠さんを見逃がすまいとして、始まりからよく、瞳をくばつた。けれども一度に、多くの乗客がはき出すうに、プラットホームに流れ出たので何處に悠さんが居られるのやら一寸見出せなかつた。

「貴男悠さんがあそこにゐらつしやるわ。」

妻は突然頓狂な聲を出して探がしてゐる自分をうながした。

「どいこ。」

「あそこに後から二番目の車の窓から顔を出してをられる方がさうじやないの。」

「あ……さうださうだ。」

自分達は急いで人波をわけて悠さんに近づいて行つた。悠さんはもう遠くから自分達の姿を見て滿面の微笑を洩らしてゐた。

「寒いのによく來てくれましたね。」

悠さんはさう云つてしみじみ懐かしげに自分達夫婦に挨拶した。別れた時より悠さんは見違へる程どつしり肥つて、色も赤銅色になつた。以前も落ち着いてゐられたがどことなく苦惱に滿ちた暗い影が今瞳の前にあらはれた悠さんの健康さうな姿には少しも見えなかつた。

「ほんとうに、しばらくでしたね。」

「さうですね奥さんもわざわざ來て下さつてすみません。」

「どうもしばらくでございました、お變りもなくて結構でございます。」

「え有難う貴女もお變りもありませんでしたか。」

「有難うございますお蔭様で。」

「何にか荷物があるんですか。」

「えほんの少しばかり赤帽を頼むまでも無いのですから。」

悠さんはさう云ひ乍ら柵の上からトランクを二個とバスケット一個を出して、互ひに一個づつ、持つことにした。

いつの間にやら乗客は大概は改札口の方へおりて了つて三人は廣い構内にとり残された人のやうにまぶしい朝日に影を長く引いた。

「かうして君達夫婦にかならず逢へるものとは思つてゐたもの、實際いつ逢はれるものかと私も思つた。」

悠さんは、突然其塵ことを云つて自分達をかへり見た。

「さうですねこの間わざ／＼鎌倉まで行つても逢へなかつたんですから。」

自分にさう云つてつくづく變り果てた悠さんの後ろ姿を眺めた時何んとなく寂しさが感が安自分の胸に押しよせて來た。

あの恐ろしき程沈痛に満ちた暗い影が、今は悠さんの顔から消えうせたとは云ふもの、さうし

てどことなく長閑さうな悠長の後姿になつたとは思ふもの、いたましい悠さんの半生を知つてゐる自分達には、その長閑な、悠長な姿の中にも云ひ知れぬ、苦惱と寂寥と悲哀とに打ち勝つた雄々しい、しかし寂しい孤獨のつらい影が慄つてゐるのをどうすることも出来なかつた。

妻も亦先きに立つて超然と歩んでゆく悠さんの姿を凝つと見詰めてゐた。あれ程自慢にしてゐた美しい長髪を、をしけもなく切つて三分がりの頭に皮のトルコ帽をかぶつて、羽織は、太織りで出來た濃茶の無地を着てゐる後姿は誰が見ても、世捨人が僧侶の成り上り位にしか思はれなかつた。

## 九

「野村君、何んだか私は夢のやうな氣がしてならない。」

悠さんは何にを思つたのか急に其塵ことを云つて寂しい微笑を洩らした。

「怎うしてですか。」

「二年前に都落ちをすを時は誰一人見送るものもなく、こつそりと逃げ出た追懐深かい東京驛に二年後の今日、かうした歡喜を抱いて君達に逢ふとは私には怎うしても夢のやうな氣がしてた

らない。」

「ほんたうでもぬ、しかしこうして出むかへに出たもの、悠さんは寂しい人だと僕は思ひました。」

「なぜですか。」

悠さんはその時いぶかしげに問ひ返した。

「だつてかうして、久し振りに上京なさつても出むかへに出るのが僕達夫婦きりかと思つたら僕は急に寂しくなつて来た。」

「ほんたうですよ、たとへお別れになつても奥さんがゐらしてもい、と思つたわ。」

妻は突然側からさう云つた。

「妻が、妻が。」

悠さんは妻の言葉に驚ろいて、妻の顔を見詰め乍ら。

「妻が怎うして来るんです、私は今度上京することに就いては一言も知らせなかつたのです、又知らせる必要もみとめませんから。」

静かな池の面に小石が落ちて今までの落着きを破つたかのやうに悠さんの長閑な顔にも、暗い

影が少し、かすめた。

自分達夫婦は暗黙のうちに、今度悠さんが上京することについて悠さんの奥さんに知らせに行つたことを語るまいと思つた。なぜならば知らせて置きながら、出むかへに出ない奥さんの事を一時たりとも悠さんに不愉快な思ひをさせることは、忍び得なかつたから。

「それもさうですね。」

自分はさう云つて勉めて、話の糸口を切らうとした。妻も自分の顔色をうかゞい乍ら黙まつて跡をついて来た。

改札口を出た時に悠さんは突然、

「私はまだ食事前だよ、どこかで一緒に食はないか。」

「さうですね、僕の家へ来ませんか。何んにも致しませんけれど下の婆さんが待つてゐますから。」

「え、どうぞさうなすつて下さいまし。何んにも致しませんけれど。」

「さうですかそれはすまないね、かうして上京した處で家も無ければ妻もない漂浪兒のことだからその邊はよろしくたのむよ。」

悠さんは始めて快活に笑つた。しかし自分にはその笑ひ方が腹の底から出て来た笑ひには怎うしてもとれなかつた。悠さんは泣く變りに笑つたのだ、自分は勝手な妄想に耽けり乍ら日比谷行きの電車停留所まで歩いた。

「あら奥さんが來られたわ、あら奥さん。」

妻は突然、だしぬけに叫んだ。

悠さんと自分は驚いてふり返へるとそこへ悠さんの奥さんはかけて來た。

自分はその刹那、たとへ一時たりとも奥さんを恨んだことを心ですまなく思つた。

「おくれてすみませんでした。須田町で三十分も停電したんですもの、何んとも相すみません今停車場へ行つて見ましたけれど、見へませんので出ると貴男がたの姿が見えたのでかけて來ました。」

奥さんはハンカチを出して、汗を拭き乍らさう云つて頭を下けた。

「あ、お前わざ／＼來てくれたのかい、それは有難う。」

その時悠さんは、さう云つて奥さんに近づいた。

「しばらくでございました。お變りもなくて結構でございます。」

奥さんは今かけて來た爲に胸の動氣がしてそのは聲ふるへてゐる。

「有難うそれにしてもお前の病氣はその後別に變りもなかつたかな。」

「え、有難うございます。お蔭様で。」

奥さんはもう胸一杯になつたと見えて瞳に涙を一杯ためて俯向いて了つた。

「それはよかつた。私は別れてゐてもその事ばかりがいつまでも氣になつた。けれどもそれはよかつた。お父さんお母さんも別にお變りもないかな。」

「え……」

奥さんはもう何んにも云はずにたゞうなづいた。

「それにしてもよくわかつたね私が今朝上京することが」

「え、野村さんに昨日知らせいたゞきましたわ。」

「あ……さうか……」

悠さんはその時始めて謎が解つたやうに云つて、自分達夫婦をかへり見た。その時日比谷行の電車が來た。

「さあ、是れに乗りませう。」



自分は先きに立つて、電車に乗つた、電車は朝の内の爲に幸ひ空いてゐた。たゞ労働者のやうな人達が五六人と田舎染みた客が三四人乗つてゐるばかりだつた。自分と悠さんはならんで右側に腰をかけた。妻と奥さんは自分達の反対な側へ腰をおろした。

「昨日は、お急がしい所をわざわざ野村さん來ていたゞきましてすみませんでした。生憎く留守にいたしました何んにもおかまひもせず。」

奥さんはさう云つて妻に話しかけた。

「い、え毎日遊んでゐるんですから。」

妻はさう云つたらと自分の顔を見た。

聽がて四人の間に沈黙が來た。自分の視線はたへず奥さんの眼にそゞがれた。妻の視線は自分の眼にそゞいでゐた。奥さんの視線は時々自分を通じて悠さんの方へ反射した。只悠さんばかりが眼をつぶつて下腹に力を入れて手をくんでゐた。ほんたうに静かである。あやしい古池のやうに静かである。氣味の悪い程静かである。けれどもお互ひの心の中には云ひやうのない嵐が渦巻いてゐるのを怎うしても否定することが出來かかつた。

いくら人と人とはどこまで行つた處で交ることの出來ない平行線だと悠さんは云つたけれど、

人と人とはどこまで行つたつて離れがたない、又忘れられる可きものではないと切に思つた。自分には様々な妄想をめぐらした。

どこまで掘つて行つても心と心とは離れてゐるやうに怎麼に別れて了つても心と心とは、忘れ果てることの出來ないやるせない矛盾した中に、人間は勝手な理屈をつけて泣いたり笑つたりしてゐるんだと自分の妄想はついにそこへ歸着した。

十

日比谷へ來た時乗り變へる爲に四人は降りた。

「貴男お荷物を持ちませうか。」

奥さんはさう云つて悠さんに近づいた。

「いや、い、よ軽いから。」

「さうですか。」

築地行の電車に乗つた時妻は空席を悠さんにすゝめた。

「やあそれはどうも有難う。」

悠さんはさう云つて纏てに對して無關心のやうに腰をおろして又眼をつぶつた。

「随分、お肥りにつたのね。」

妻はさう云つて奥さんに話かけた。

「さうですな何んだかお坊さんのやうにおなりになつたのね。」

奥さんの聲は涙ぐんでゐた。

世の中を捨てたやうな顔をして、若かいのに老人の着るやうな羽織を着て髪を短かくしてゐる悠さんの偉大なしかし寂しさうな孤獨な姿を奥さんは無關心に眺めてゐる事が出来なかつた。華やかな觀樂の巷に、大店の若旦那として幾多の美奴を抱いて、美酒にしたつてゐた時の夫。自分が病氣になつて總ての人達に捨てられた時に、世の中の人誰一人お前の側へ來なくても俺はお前を捨てやしないぞ、と云つて寂しい病床に心から看病しつゝ、周圍と戦つた夫。多年の志を貫徹する爲に、自分と共に東京で貧苦と戦つた夫、夫を生かさんが爲に心にもない愛想づかしをして別れた夫、様々な追憶が今眼の前に超然としてゐる悠さんの姿を眺めてゐる奥さんの胸には一種の喜びがあふれてゐた。

自分は今後の悠さんと奥さんの成行きを一種の好氣心をもつて離して見たり一緒にしたりして

様々に想像してゐると突然悠さんは眼を開らいた。

「まだ當分間があるかね。」

「もう少しです。」

「さうですか。」

又悠さんは眼をつぶつた。

樂地の終點へおりた時。

「久し振りに隅田川の河風に早くふかれて見たい。」

悠さんはさう云ひ乍ら先きに立つて歩み出した。

「ほんとうに久し振りですね、かうして四人で歩くことは。」

「さうだね、もう二年になるね。」

「ほんとうにねこの間のやうな氣がするけれど。」

「この間のやうな氣がするけれど、自分には、何んだか遠い昔のやうな氣がするある可からざる。ところがあつた時のやうな氣がする。」

悠さんは又例の通り謎のやうな事を云ひ出した。自分はそれに答へず黙まつて歩んだ。一二間

おくれて妻と奥さんは歩んで来た。

「しかしほんとうに夢のやうな気がするかうして四人で歩むとは豫期しなかつた。けれども野村君昔四人で歩んだ時とは形においては同じだが實質は雲泥の差だ、アハハ……」

悠さんは苦笑に近い微笑をもらした。自分はその微笑を通じて、おだやかでない、悠さんの感情を直感した。奥さんは自分達の背後へ近づてたへず二人の話題を聞き逃がすまいとするが如く歩んで来た。

「あ、い、なあ……」

大河端に出た時悠さんは何にもかも忘れた人のやうにしばし立ち止まつて、河風になぶられ乍ら荷船や一錢蒸汽の通ふのを眺めてゐた。

江戸情緒を愛する一面を持つてゐる悠さんは、長い間の無味單調な僧房生活から再びかうした然自に接した時、その喜びと悲しみとは怎麼に深かいことであらう。

「一度戀した女が永久は忘れられないやうに、私はもう東京を離れて生きられなくなつた。君どう考へても自分は無關心だよ私はあの自然のやうに黙々として生きたかつたけれど。怎うしても私には出来ない耐へられない。人間は矢張り人間の世界に生きることだ。」

悠さんのさうした言葉を聞いて時自分は期待にはづれた物たりなさ、それが事實なんだと思ふ背定とが一緒になつて。

「矢張りお寺へ這入つて了へば、人間は耐へられないものでせうか。」

「修養するにはい、處だがね、いつまでも長く居る事は苦痛だ。高僧などはいざ知らず、少くも自分のやうな男には苦痛です。」

「さうですかね。」

「さうだよ、人間と別れたり世の中を捨てたりして、ひとり山寺へ這入つて、益々人間を慕つたり世の中が戀ひしくなつてくるばかりだ。それよりも世の中にしたつて居ながらつくづく世の中に愛想を盡かしてゐる人の方がまだ心からの世捨人だ。」

悠さんはそろ／＼僧房生活から得て来た、自心の偽らざる感想をぼつりぼつり警句のやうに語り出した。自分は一言一句も聞き脱がすまいと注意してゐた。それにしても、自分は悠さんから、俺はもう悟つたなぞと云はれたりするより、どの位人間的の懐かしさを感じたか知れなかつた。矢張り悠さんはどこまで行つても血もあれば涙もある人間なんだ、自分は勝手にさう定めてゐた。

「さうですかね、僕なんかこの現實に耐へきれなくつてせめては十日でもいい、から悠さんのゐらつしやつた寺へでも行つて、倦怠しきつた頭をしばらく休息させたいと思ひます。つくづく世の中の淺ましさに耐へられません。」

「それがほんとうなんですよ、自分に歸へれば自分の無關心に耐へられなくない。世の中にしたれば、世の汚毒に耐へられなくなる。結極人間はどこへ行つたとて心以外に満足出来ないのだね。」

「それじゃどうしたらいいのでせうか。」

「怎うしなくてもいいよ、その儘でいいのだ。脚下是黄金淨土だ。私はこの頃しみじみ和尚悟つて俗人になると云つた言葉が、いろいろの意味に於いて考へさせられる。」

## 十一

悠さんに逢つたらまづ第一に聞いて見たいと思つてゐた悟りのことを、今悠さん自の身口から語られたので、自分はこの時だと思つた。さうして悠さん自身が悟りし道に對してどんな感想持をつゐられるのか、さうして、どこまで悠さんは悟つてゐるかをためして見たかつたので自分は

ぐんぐんと悠さんに向かつて追求して行つた。

「悠さん貴男に此處ことをお聞き、するのは少し變なすけれど人間はいつたい悟られるものでせうか。」

自分はさう云つて悠さんの返答を待つた。

その時悠さんは即座に、しかも強い信念のこもつた口調で答へた。

「悟れます。きつと悟れます。誠實と信仰さへあつたなら人間はかならず悟れます。」

自分はさうした斷定的なことを。あの謙遜な悠さん自身から今力強く語られたので、自分は妙な心持がした。それでは悠さんは悟つてゐられるんですかと云うとしたけれど、何んだか久し振りに逢つて早々から悠さんに其處ことを云ふのが、何んとなく氣がとがめて云はれなかつた。

「さうでせうかね。」

自分はさう云つて黙まつて悠さんの横顔を眺めてゐた。

「しばし二人の間に沈黙が續いた。河面を渡つてくる風にももう冬の冷たさが凍るやうに肌にしみた。」

「君、悟りと云ふ事を吾々はあまりにむづかしい事か、それとも高い處にあるやうに想像した

のが、あやまりだつた。悟りは目前の日常茶飲事にころがつてゐると私は思ふよ、つまり云ひかへれば全てをありの儘に見ることだと思ふありの儘に知ることだと思ふ。」

自分には何んのことだかその意味が少しも解されなかつた。  
「しかし、悠さん悟れる悟れぬは兎に角として、人間は悟つてしまつたら、それこそ木石同様人間味から遠ざかつて、しまひやしないでせうか。」

その時、悠さんは何にを感じたのか急に立ち止まつて熱心に語り出した。

「私は時々友人知人から、今君の云つたやうな問題を時々聞かれたり、自分でもかつては多くの先輩にさうした問題に就いて問ふた事があつたがこの頃は、おぼろけながら悟りと云ふやうなことが今まで君や私達が考へてゐたやうなものではなくづつと暖かな人間的な懐かしいものである事に気がついたよ。悟らうとする人の心は血や涙を枯らすことでなく、ありあまつて、溢れ出づる涙のやりどころもなく這入つてゆく世界だと私は思ふよ。君の云ふように。悟りと云ふことは何か人間生活から特種な世界へ這入るやうに思つたり、又悟つて了へば人間離れのした古木寒水の境地を想像するのが既にまちがつてゐるのです。一知半解の怪僧達が、無闇に人間離れをしたことを云つて私達を驚かす爲に、私達は只禪とか悟りか云はれると、何んだか小むづかしい

血も涙もない人間を想像するがあれはうそだと思ふ虚偽だと思ふ。

禪とか悟りとか云ふものが、もしもさうしたこと、したなら、私は少なくとも人間として致達す可き最高の境地とは信じません。出来得ることなら私は禪だとか悟りだとか云ふ、其塵臭味から離脱したいのです。悟りの爲の悟りであつたなら、私達はついに悟りそのものに囚はれて了つてかへつて本来の面目を知らないで、終りはしないでせうか、私はこの頃、益々そのやうに信じてゐます。人間が眞に悟つたからとて人間がかはるものじゃないと思ひます。矢張り寒い時は寒いし、悲しい時には悲しい、腹が空つたら御飯が喰ひたい、美人を見たら矢張り美しいと感じたりする人間だと思ひます。それが眞當なんですもの、只さうした心持が起つた時に、さうした事の眞當の姿に喰入つて眞當の姿を知して、只囚はれないけだだと私は思ふ。それだから悟りと迷ひと云ふものは紙の表裏のやうなもので同一なものだと私は思ふ。迷の中に悟道が開かれるのであつて、決して人間離れなことを云つたり世間を遁がれるのが悟りじゃないと思ふ。私達がかうして泣いたり笑つたりしてゐる世の中に、悟りはこちらがつてゐると思ふ。要は只囚はれると囚はれないにあるのみだ。」

悠さんはさう云つて、袖から煙草を出して燐寸をすつた。河風がしきりに吹いて火を消した。

四人が一處に集まつて風をよけた。

「有難う。」

悠さんは續けざまに一本を吸ひ盡くした。

自分は始めてその時、悠さんから今まで自分が想像してゐた悟りの道より全然異つた親しみのある説を聞かされてたまらなく懐かしく感じた。さうした説はあるひは悠さん自身の説であるかは知らないけれど、さうしてあの既成宗教を罵倒しつつした、異端者のような懐けがしないでも無いけれど、自分にはさうした説なら肯定も出来るし共鳴もした。

「さうでせうね、僕もそう思ひます。」

さうでないなら僕等のやうな人間には到底悟れないと思ひます。さうして悟ると云ふ事が血や涙を枯らすことであつら實に無意味なものですね。」

悠さんはそれに答へず黙つてうなづいた。

その時妻が側から

「皆さん一足お先へゐらして下さいまし。私一寸魚屋さんへ寄つて参りますから。」

「あさうだねぢや早く行つておいで。」

自分はさう云つて妻をうながした。

「いや、其塵心配しなくてもよろしいよ、私は寺で粗食生活に慣れて来たから、茶漬で結構。」と悠さんは云つた。

「まあ貴男は、それでいゝでせうけれど、僕が喰ひますから」

「ほんとうにおかまひ下さいますな、誠に濟みませんわねいつも野村さんに御心配をかけて」奥さんは、側から氣の毒さうな顔をしてゐた。

十二

自分は又強めて悠さんに話しかけた。

「貴男のやうな情熱家は、中々さうした悟りの境地に致達するには並大抵の努力じゃないでせうね。」

自分は、さう云つて悠さんの顔色をうかつた。その時悠さんは苦しさうな顔をして語り出した。

「眞實困難です。私のやうな下根な人間は一生悟れないやうな氣がします。しかし努力と誠實

一つで、人間である以上は悟れない事はないと云ふ確信を持つてゐます。悟り切つて了ふことが、私自身の一生のうちに出来ても出来なくとも、私自身にとつてはそんなことはどうでもいゝのです。少くもさうした努力をしてゐる姿に、私は最も深い生き甲斐と喜びを感じます。一生努力と精進をもつて終りたいのです。

それから今君が云つた情熱家と云ふ言葉で思ひ出したのだが、宗教に這入る路には思想上の疑惑から、一時もじつとしてゐられないやうな心的な苦惱から這入る人と、愛さんとして愛し得ざる心の苦惱から這入る人があります。私は後者の方がより一層切實のやうな氣がします。最も私は兩者の苦惱に随分長い間悩まされたけれど……

君にも慥か話した事があつたね。昔支那のある坊さんが、「貴僧はいかなる動機で僧になられたか、さうして佛の心とは如何なるもんでせうか。」と質問した處、その坊さんは即座に「多情是佛心」と答へたさうである。私はその言葉が非常に味ひ深い言葉だと思ふ。多情の人でなければ佛心は起きないと思ふ。中途半分で、ものごとをあきらめたりすることの出来ない。あくまでも知り盡さなければ堪へられないとか、愛人だら愛人の心の底まで自分のものになんては満足出来ないと思ふ。風樂な情熱家であつて、始めて佛心が起きると、少くも私はさう思ふ。

なぜならば、一個の物であるとか人であるとかは、人間の力では完全に所有し得ないから、どんな親しい人と人もその心の底をたづねれば、皆別々に離れてゐるんだね。又物なら物を所有しようとする慾望は、限りが無いのだね、それだから絶へず不満なのだ。それを満足させたい心も人も一切自分のものにしようとする不可能を可能ならしむる處に、宗教心が起きる。云ひかへれば人より以上の血や涙をもみち過ぎてそのやりどころなくなつた處に、宗教の芽は生へる。かうした心境は、惱みと佛心の別れ路である。並大抵な情熱家では駄目だと思ふ。」

自分は黙つて、徐々に悠さんの言葉に引き着けられて來て、深く考へさせられた。さうして、今まで宗教に對して、自分の持つてゐた感想の全然誤まつてゐる事に氣がついた。

「君の家はこゝを西へ廻つた處だつたね。」

「さうです。」

「下のお神さんは達者ですか。」

「え、有難う。」

自分達は、わざわざ遠廻りをして、待合のならんだ粹な露路をぬけて、自分の家の方へ近づいた。

「この邊はい、處たね。」

「夜分でなければ、ほんとうの情緒は味へません。」

三人はいつの間にか又気分や情緒の話になつた。

藝妓家の細格子戸の中に、つるされてある御神燈のなまめかしい女文字も、夜見る程の美しさも魅力もなく、あれ果てた年増女のだるけな疲れと云つたやうな、佗びしい気分が流れてゐた。兎もすれば、あきらめ的な江戸情緒に落入り安い自分は、かうして日中色街の細い露路を觀樂の残骸を眺める時のやうな頼りない心地を以つて歩むのが好きであつた。

ものごとに対して、執着の薄いあきらめ早いなやりの生きてゐるから生きてゐると云つたやうな生粹の江戸兒の血を分けてゐる自分は、自分の心の一隅に時にさうした心持が浮かんでくるのを、時に否定したり、肯定したりした。今も自分は禪味を持つた悠さんと世をあきらめた江戸情緒の慄つてゐるこの露路とを併せて味ふことが、妙に自分の興味をそゝつたので、わざわざ遠路をして悠さんをつれて歩んだ。

自分は悠さんと語つてゐる時はいつも現實を忘れてゐた。又かうして露路をあてもなく歩んだり、遠くでだけだるけに引く爪引の音や流し新内のさへた音に聞惚れる時、自分はいつも現實を忘

れてゐた。中年の人妻の俯向き勝ちに歩いてゆく底澄び後姿や、お稽古へ通ふ町姿のいじらしい姿に見惚れる時、自分はいつも現實を忘れてゐた。

さうした物思ひに耽つてゐると、煙草屋の二階に貧しい間借をしてゐる自分達の生活と貧の爲にこの頃めつきり世帯じみた妻の佗しい顔が浮かんで来て、さうした空想をおしけもなく破り去つて、何んともなく恐ろしい冷たい現實がどつと背後をおびやかすやうに思はれた。

紙屋の横ちよを曲がつた時、宿り込みらしい藝妓が二人寒さうな姿をして、待合の裏木戸の方から出て来た。さうした社會の女が持つ一種の魅力と、なやましい情緒とが晝の色街の空氣を背景にして全てがだるけな美の誘惑に満ちてゐた。

三人の眼は期せずして、二人の女のしどけない姿にそゝがれた。自分は誰が一等先きにかうした女に對つて語り出すことかと思つてゐたら、案の通り悠さんは女が通り過ぎてから突然、

「君あそこへ行く美しい女達は、皆私の所有だ。」

あまりに突飛な悠さんの言葉が自分には、何んの意味やら更に解らなかつた。

「そんなら悠さんはあそこへ行つた女達を御存じなんでしょうか。」

その時悠さんは始めて、快活に微笑し乍ら話つた。



「知るも知らないもないじゃないか、皆私の所有だよ。のみならずかうした小粋な住家や隅田川も、悟つて見れば河は河にして河にあらずでね、あアハ。」  
と悠さんは傍に人無いが如く興奮に近い狂的な大笑をもらした。

## 十三

「あらお歸へりなさいまし。」

三人が家の前に立つた時、お神さんは奥から手を拭き乍ら出て来た。

「今歸へりました。お客さんをおつれ申しましたよ。」

自分はさう云つて先きに立つて二階へ上がった。

「さあどうぞお上り下さいまし。」

「お邪魔いたします。」

奥さんはさう云つて會釋した。悠さんは只黙禮して上がつて来た。お神さんは茶道具を持つたり、炭を持つて上がつて来て二階を片づけてくれた。さうして妙な姿な悠さんや、片隅にじつと座つてゐる奥さんを、いぶかしげに眺めてゐた。

總がてそこへ妻が歸つて来た。

「およしさん何んにもおかまい下さいますな。」

奥さんはさう云つて妻に話しかけやうとした。

「い、え、何んにもおかまひも出来なくて済みませんが少しお待ち下さいまし。」

「何んならお手傳ひいたしませうか。」

「奥さんよござんすよ。」

「まあ私にも御迷惑でせうが、やらせて頂戴。」

「それではお願ひしませうか。」

二人は微笑しながら下の勝手場へ下りて行つた。

自分と悠さんはさうした二人の會話を黙つて聞いてゐるが、二人の心は決して二人の行動から漫交渉ではなかつた。悠さんはひとりもの思ひに耽つてゐた。自分は今面のあたり別れた奥さんと悠さんとが今かうして一室に再會してゐる様を眺めてゐると、そこに離別と云ふ悲劇が二年前に行れたことが、何にか自分には大偽らごとのやうな氣がしてならなかつた。奥さん今果して怎麼心持でゐるんだらうか。さうして上京しても別れた奥さんが出むかへに出られたことについて

豫明してゐなかつた悠さんも果して怎麼心持で奥さんに對してゐるんだらうか。

さうした想像をめぐらしてゐる時突然悠さんは、

「野村君！ 先程から何度も云つた通り私は何んだか夢を見てゐるやうな気がしてならない。妻が、妻が、別れた妻が、自分をむかへに出てくれて、さうして今こゝに昔のまゝの彼女と語ると云ふことは、自分には怎うしても夢のやうな気がしてならない。」

悠さんはさう云つて深い冥想に耽つた。

「矢張り奥さんだつて忘れられなかつたんですよ。悠さん自身が思はれた程其塵薄情な方ではないと思ひます。でなければこそかうして來られたんじやありませんか。」

自分は勉めて、悠さん達をして元々通り夫婦にして上げたいと云ふ希望から、奥さんの立場になつて辯解した。さうして奥さんのお母さんから通じて聞いた奥さんの快心と覺悟とを正直に悠さんに語つた。悠さんは黙まつて聞いてゐた。最後に自分は、

「悠さん、及ばず乍ら、私が貴男方お二人の中に立つて最善と信ずる路に向つて御盡力したいと思ふんですが、此處ことを云つては失禮かは知れないけれど。」

さう云つて自分は悠さんの顔色を窺つた。

「最善とは。」

「悠さんも奥人も二人とも幸福になるやうに。」

さう云つた時悠さんは、

「私は今幸福だと思つてゐます。」

「それはさうでせうけれど、出來得ることなら、奥さんもお二人とも元々通りに御夫婦になつていたゞきたいのです。奥さんの心持も考へると、お氣の毒でなりません。奥さんは昔の女のやうに意氣と張りどで自分自身の愛情をも裏切られた人なんです。」

その時悠さんは驚いて、自分の言葉を否定した。

「元々通りに夫婦になれと君は云ふのですか、それは二人を不幸にすることだ。」

「それは怎うしてですか。」

その時、悠さんは又例の惱ましい表情が出て來た。」

「野村君！」

「何んですか。」

「その話は又後日ゆつくり話さう。しかし君私が今度上京したについては、さうした意味は毛頭

もないのだから、さうして別れた妻に対する愛着をたち切りたいが爲に、私は二年間も僧房生活に耐へて来たのだから、その話はもうよさう。」

「さうですね。それでは又後日伺ひませう。」

妙に二人は行き話まつたやうに黙まつてしまつた。

その時、妻が食事の用意が出来たからと云つて、膳を出してそこへ奥さんと二人で食事の道具を運んで来た。

「これはすまないね。」

「ほんとうにおそくなりましてすみません、さぞ御腹がお空きになつたでせう。」

妻はさう云ひ乍ら御飯を盛つた。

「かうして皆と一緒に御飯をたべてみると、何んだか人間になつたやうな気がする。」

悠さんは、其塵ことを云つて愉快に微笑した。

奥さんは只俯向き勝ちにして食べてゐた。

「お寺の生活は如何でした。」

「寺はほんたうにまづいものを食せるよ。かうして家庭的な食事をしてゐると、味噌汁も山海

の珍味だ。」

悠さんは一寸お世辭を仕つた。

妻は一種の好氣心から種々と寺の生活に對して質問した。悠さんは一々それに答へた。

「それでもまよ、よくお寂しなかつたのね。」

「三月目位から厭になりましたが慣れると又あゝした生活もいゝものですよ。」

「さうでせうかね。私達なんか、とても十日も駄目ですわ。」

「其塵ことはありませんよ。枯木のやうな坊さんや私達のやうな變人ばかりの集まりですから、皆んな突飛なことばかり云つて暮らしてゐるので、かうした世間と全然かはつた。人間離れのした處も、少しは面白いものです。」飯を喰へど一粒も是喰ふに非ず。「何んて云ひ乍ら喰べたり、風の吹く晩などは、「竹林に小石のあたる音を聞いて俄然として大悟す。」とか昔の偉らい坊さんの云つたことを丸呑みにして、偉らさうなことを云つてゐる野狐禪者もゐて其塵に寂しくはありませんよ。」

「さうでせうかね、何んだが禪宗のお坊さんはむづかしい事をおつしやるのね。」

「むづかしいのはいいですが、出鱈目や胡麻化しが多くてね。」

悠さんはさう云つて苦笑した。

十四

食事をすましてから、番茶を呑み乍らいろ／＼な世間話や僧房生活の話を自分選はしたけれどなぜか奥さんは、いつも黙つてさうした話を聞いてゐた。

午後になつたら、悠さんは今戸の禪寺へ行くと云つた。

「まゝ今晚は、僕の家へお宿りなさいよ、其處くる匆々から、お出にならなくともいゝじやありませんか。」

「有難う。實は私も今度上京するについて、淺草の前に借りてゐた寺の座敷を借りやうと思つただけけれど生憎人に貸して了つたので、残念だが知り合ひの寺へお世話をすると思つた。この間の手紙でいゝ寺が空いてゐると云つて知らせてくれた。」

悠さんはさう云つて袖から寺の名も番地の書いてある紙切を見せた。

「さうですか、それじやもう借りることに定まつたのですね。」

「さうです。ですから早く行つて何にかと用事もあること、思ふし自分の住家と思へば一時も

早く行つて見たいから。」

「それもさうですね。それじや、僕もお供ませう。それにしても段々遠く離れてしまふんですね。」

「今戸と云ふと儘か南千住の方へ方々遠く處でしたね。」

「さうです。大河端に而した處は仲々粹な處ですが、多くは貧民窟の多い處ですよ。」

「さうですか。私も貧しい人間だから丁度いゝね。」

悠さんはさう云つて苦笑した。

妻も奥さんも一緒に行くと云つた。

「けれどもお前行つてくれるのはいゝけれど、お母さんが心配してやしないかね、あんまりおそくなるかね。」

悠さんはさう云つて、奥さんをかへり見た。

「いゝえ、よござんすの。」

「さうか、悪るいね。」

「それじや出掛けませうか。」

四人は又揃つて家を出た。淺草行の電車に乗つた。雷門で乗り變へて南千住行に乗うとした。自分は悠さんに其處に遠くなからうと云つたら、

「それじゃ、歩いて行かう。」と云つた。

四人は、又ぶらぶらと大河端に面した道を歩んだ。

人家のならんだ間や。倉庫の影から冷たい隅田川や向島が眺められた。處々はちよん髷が出て來さうな昔風な作りの商家がならんでゐた。

「い、處だね、築地よりもいよよ。」

「さうですね、この邊はいくらかまだ昔の面影が残つてゐますから。」

「野村君、私はかうした、堅氣らしい商家の前を通るとしみじみ田舎の實家がしのばれるよ。」悠さんが、始めてしんみりした口調でさう云つた時、奥さんが傍から、

「ほんたうですね、その後皆さんお變り御座いませんかしら、貴男の處へはお便りがあるんでせう。」

奥さんはさう云つて悠さんの顔色を伺つた。

「別に便りとしてないけれど、今度はいろいろの用事もあるので、一先つ田舎へ歸つてこやうか

とも思つてゐるよ。」

悠さんの顔は急に曇つて來た。

「ほんたうに歸つてお上げなさいよ、怎麼にお喜びになるか知れないことよ。」

奥さんはさう云つて俯向いた。

「何だかね、私のような親不孝な人間が歸つた處で一層親を苦しめるばかりだ。尤も私は自分では親不孝とは思つてゐないけれど、田舎の人達から見たらさう思ふだらうよ、それが一番私には切ない。」

自分はさうした悠さんの言葉で、ふと雲水の途上からお送られた手紙を思ひ出した。手紙を思ひ出すと悠さん自身の實家との不和がいたましい程自分の胸に浮かんで來た。

自分は只黙まつて、さうした會話を聞いてゐた。

變がて四人は黙まつて、しかし靜かに歩んだ。十一月末の弱い午後薄れ日が、四人の影を淡く路上に落して、全てが自分には敗殘の人々の面影を眺めるような、頼りない思ひが胸にせまつた。皆ある意味に於いての敗殘者だ自分は勝手にさう思つて見た。二の鳥もいつか過ぎて商家の店頭にも年末を迎かへるあわたしさが、大河端に面した靜かな街にも窺はれた。

「段々これから寒くなりますね。」

悠さんはさう云つて、深かい冥想から醒めた人のやうに始めて我に歸つたように語り出した。悠さんの佗住ふ爲の禪寺は、今戸橋を渡るとすぐ手前に見えた。比較的古寂びれた土塀が周囲と調和をかく程悠さんを満足させさうな古淡に満ちてゐた。

「い、ね。」

悠さんは思はずさう云つて、古寺の門を仰ぎ乍ら激賞した。石に刻んである「酒肉山門入不許」と云ふ禪寺によくある石塔も半ばくづれて讀みにくかつた。長い引石を廻はつて竹林の側に、鐘樓が此の寺を偉大に見せた。

自分達は芝生の飛石を渡つて、庫裡の方から戸間に足を入れた。

「お願いします。」

悠さんはさう云つて、二三度呼んだけれど、中からは何んの返事もなからた。只森として一種の寒さを人に迫まるように、古寺の持つ一種獨得な空氣が蔽ふように自分達にせまつた。

十五

「お留守なのですかお願いします。」

悠さんは續けさまに叫んだけれど一向返事がなかつた。

「留守なんでしょうか、これなら泥棒が這入つたつてわかりませんね。」  
妻はさう云つて微笑した。

「怎うしたんでしようね。」

奥さんもさう云つて妻と顔を見合せた。

「あ、悠さんあそこに寺男が庭を掃いてゐますから聞いて見ましょう。」

自分は、その寺男の側へかけて行つた。さうして留守なのかたしかめようと思つたが、生憎いまくしい程耳が遠いと來てゐる、殆んど聾に近い程であつたので手付手眞似で來客であることを知らせるとその男は無愛想な顔をして、

「今日は朝から和尚さんはお留守のようだんべいお小僧さんが居るだらすがなア、呼んでも出ねーだか、どれそんならもう少し待つてもらふかな俺が呼んで上げる。」

と云ひ乍らその男は一生懸命に庭を掃いてゐて一向よんでくれさうにもなかつた。氣短かな自分 無茶苦茶に腹が立つてならなかつた。

「どうしたんですかよんでるたゞけないんですか。」

寺男には自分の言葉が聞えなかつたが、自分の顔にあらわれた腹立たしい表情に気がついたらと見えて、「今よんであけるでな。」

さう云ひ乍ら、掃木を捨て、ゆつくりとこちらが急ぐのも平氣で本堂の横から庫裡の裏口へ姿を消した。

「英迦にしてやがる。」

自分はさう云つて苦笑した。

「禪寺らしい趣があるじゃないか。」

悠さんはかへつてさうした事に興味を持つてゐるらしかつた。

「禪寺らしいか何んだか知らないけれど、随分香氣なものには癪にさわりますよ。」

「叫べど答へず頼めど動ぜずか。」

悠さんは又さうしたことを云つて獨り悦に入つてゐるらしかつた。

その時スーと、古めかしい障子があいて十四五の小僧が眼をこすり乍らあらわれた。こいつ住職の留守を幸ひ晝寝でもしてゐたんだなと思つたから、皆は期せずして微笑し出した。小僧は氣

まりが悪るさうな顔をして頭を下けた。

「私は河野と云ふ者ですが、兼ねて淺草の貞水寺さんから御照介を得て今度こちらへ伺つたものですが、住職は御不在ですか。」

悠さんの聲は流石修養して來ただけあつて羨やましい程落ち着き拂つてゐた。

「あゝ、左様でございますか、只今はお留守でございますが承知いたして居りますので、どうぞお上り下さい。」

自分達はその小僧のあとをついて廣い本堂の前を通つた。小僧は佛壇前を過ぎる時一寸頭を下けた。自分達も小僧の眞似をして一寸と頭を下けたが、悠さんだけは向き直をつて靜かに合掌禮拜した。

自分は好氣心に、かられてさうした悠さんの姿を見詰めてゐたが若かい青年がこうして合掌してゐる姿は實に肅嚴な感じを起こさせた。

廳が薄暗い廊下を廻はると本堂の裏へ出た。其處は一面に墓場であつた。墓場の盡る處が、土塀をめぐらした、竹林が根を張つてゐた。

「此處處で澄みませんが、御用の節はおよび下さい、すぐ隣に居りますから。」

さう云つて小僧の案内してくれた室は、經典を入れて置いた倉らしい十疊の東向きに障子が立て、ある室であつた。其處からは墓場は見えなかつた。只竹林が無味な寺の裏庭に一杯繁けつてゐた。土塀の向こうには暗い隅田川が人家の相間から眺められた。

天井が高くて、縁側が広く一間四方の戸障子それに全て古めかしいさびがか、つてゐた。隣座敷は小僧の寢室らしい。奥さんと妻は掃木やはたきを持って来て掃き出した。自分と悠さんは縁先に出て荷物を開らき乍ら、寺から借りた天神机をどこに置こうかなどと考へてゐた。

「おすみになりましたらこちらへゐらして、お茶を召上がつて下さい。」  
 鯉がて先き程出て来た小僧が顔を出してさう云つた。

四人は室をかたつけてから、御馳走になることにした。

その室は、矢張り悠さんの室と同じ室で真中に圍爐が取つてあつた。鐵瓶の湯氣に鳴る音が閑寂な寺の空氣を一層濃くした。やがて寺にあるらしい茶器で、小僧は番茶を出してくれた。

「住職はいくつ位ひな方ですか。」  
 悠さんはさう云つて小僧に愛想よく話かけた。

「さうですね三十五六の方です。」

「其處お若かい方なんですか」

「さあよく私にはわかりません。」

小僧は一寸曖昧なことを云つた。その時良海良海とよぶ女の聲がした。

「はい。」

「お客様は。」

「こちらでございます。」

「あそう。」

そこへ丸髻に結つた二十七八位ひな美しい夫人がしとやかに這入つて来た。

「ゐらつしやいませ。」

その夫人はしとやかに會釋した。自分達四人の驚異に満ちた瞳はその夫人の姿にそゝがれた。  
 「奥さんです。」

鯉がて小僧はさう云つて悠さんに紹介した。

「あさうですか、これは失禮いたしました。私は河野です何分よろしく願ひいたします。」  
 「い、え何んもおかまひ出来ませんけれど。」



夫人はさう云ひ乍ら菓子箱を開らいて茶をすゝめてくれた。

「静かで結構ですね。」

「何んでございますか、あまりお寂しくてどうですかと思ひましたし、それに庫裡の方の座敷は、老人夫婦が先月から参りましたもので、此處でお氣の毒ですけど少し御辛棒を願ひます來春にでもなりましたら又國へ歸ると思ひますので。」

夫人はさう云つて、悠さんの姿に見入つた。

自分達三人は黙つて茶をすゝつてゐた。

「住職はおるすなですか。」

「え、まう直き歸らだらうと存じます。」

「ほんたうに突然うかゞひましてすみませんでした。」

「いゝえ、私こそ此處ですみませんなんです。貞水寺さんからのお手紙では怎麼處でもいゝから寺でさへあつたらとのことですけど、ほんたうに相すみません。」

「いゝえ私は満足です。」

六人は急に話の糸口が切れたやうに黙つた。只鐵瓶の湯氣になる音がさうした沈黙と静寂を

破つて靜に鳴つてゐた。

「何んだか又雨模様になりましたやうでございますね。」

夫人はさう云つて廣い障子を五六寸開けて庭を見た。

## 十六

電燈が點いた頃四人は中食とも晩食とも云へない簡単な食事をそばですまして、寺を出た。橋を渡つて右へ一寸曲ると電車通へ出た四人は揃つて雷門行きの電車に乗つた。

「野村君、電車も空いてゐるといゝものだね、僕は自働車や俵よりも何よりも好きだ。さうして乗つてゐる人達の顔や姿を眺めてゐると。皆んなその人の生活を背影にしてその人自身の心持がよくあらはれてゐるね。」

悠さんは突然妙なことを言ひ出した。

「さうですね。」

自分は悠さんを骨子とした創作を完成しやうとするには、悠さん自身の如何なる方面も又徹々たる事も見逃すまいと鋭いメスをもつと勉めて悠さんを知らうとした。

「人間も、かうして傍から眺めてみると懐かしいものだがね、深く知れば知る程厭になる。」

「さう云ふものでしやうかね。」

自分は仕方がなくさう云つてゐたら悠さんは、  
「ほんたうだよ君、君はさうした経験がないかね、私はいつもさうしたことを切實に考へさせられる。」

「然し、悠さん「流行性感冒と石」とか云ふ小説にあつたことですが人間は深く知ればその人を憎めないのだ皆關係が不充分の爲に憎くむのだ、と云つたやうな事が書いてありました。」

「それは、さうだよ、私の云つたのはさうした意味を云ふのじやないよ、個人と個人との關係即ち夫婦だとか、親子だとか、友人關係だとかなら、深く知ればまったく君の云ふやうに憎めなくなる、私の云ふのはさうじやないのだ。かりに世間ではあの人は偉いとかあれは眞摯な藝術家であるとか、あの人は現代に得がたい宗教家であるとか、世間の話や一度や二度逢つた位ひなことで人を評價してゐることはいいが、深く知れば知る程人間的とでも云ふのだらうか淺ましい方面が出て來てね。厭になると云ふのさ。」

悠さんはさう云つて苦笑した。さう云はれて見ると自分にも経験が無いでもなかつた。口では

立派なことを云つたり論説で堂々たる議論を述べたり、深刻な作品を世にしめして置いて、淺へば案外期待に、はづれた物たりなさと、淺ましい生活の半面を見せつけられて失望する事があ

る。

「そりやさうですね、さうすると歴史上の人物はあてになりませんね。」

「あてにならない事はないけれど、歴史に出てゐること總てがその人の全部じやないんだね。矢張り私達のやうな弱い處もあれば、淺ましい處もあつたんだねけれども、さうした方面は世に残らずよい方面ばかりが残つてゐるのさ、それだから私達はそのよい方面は方面として尊敬はしてもいいが、そのよい方面だけをもつてその人の全部と信じて、自分の一切をその形の中へ入れやうとする事は、既に空しい徒勞だと思ふ。淺ましい方面は淺ましい方面として人間は肯定するんだね。私はことに昔の偉らい坊さんなどの話を聞く度に、その逸話をもつてその人の全部と思はない如くに、現代のある人達でも多少淺ましい方面を持つてゐるやうとも、その人の長所であり眞摯である處が一面にあつたならば、私はその人を尊敬する。」

それだから人間はあまり、深くその人自身の内生活に立入らない方がその人の長所がよく見える。なぜならばその人のよい方面は、その人自身の人格から發した社會の人心に對する反對だか

ら逢へば逢ふほど淺ましい方面ばかり眼について、長所が兎角見えなくなる。社會への反響と云つた處で君單なる空利空名と誤解しちやこまる、我々と同時代にだつて偉らい人間はゐるのだけれども、あまりに淺ましい方面を同時代であるが故に知り盡くす爲に長所までがわからなくなるのだ昔の人ばかりがかならずしも偉らいといふわけがないよ。」

悠さんはさう云つて、又その鋭い瞳を多くの人達の姿へそ、いだ。

「さうすると、釋迦やキリストのやうな人達だつて矢張りさうした半面があつたんでしやうかね。」

自分の問ひはありまに突比であつた。

「さあ……さう言はれると、私もこまるがね釋尊だつてキリストだつて人間であつた以上は、さうした煩悶もあつたと思ふ。大悟底最後の釋迦や眞に神を恐れた後のキリストはいざ知らず。それ以前はきつと、さうした煩悶に悩まされた事と私は思ふ、いや少なくとも普通な人の感ずる何十倍も切實に感じた人ではないだらうか、私は怎うもさう思ふ。もしも生れ乍らにして、さうした悩みを持たないとしたらキリストや釋迦は少なくとも偉らい人間とは思はない。ことにキリストが神の子であつたとしたなら少しも偉らかないあたりまいだと思ふ、少なくともさうした煩悶を抱

き乍らそれを解決し去つて大佛陀たり、大聖者たる處に人として最高の理想に達し得た釋迦やキリストの偉大な處がある。私はさう思ふ時に心の底から彼等の生命に對し言ふ可からざる感激と信仰が燃ゆるのだ。なぜならば、その人自身の努力と信仰ひとつで、釋迦やキリストと同一な人間になれるから。なれない思想や信仰には私達には共鳴や尊敬出来ないから。ね、君禪家の言葉に「釋迦何人ぞ、我何人ぞ、師を殺し、祖を殺し佛を切り神を捨てよ」と言つたのはこの理を道破した言葉です。」

さうした問題に立ち入つた話になると悠さんは恐ろしい程嚴肅な態度になつた。

その時雷門へ着いた。四人は又揃つておりた。

「もうそろ／＼師走の景氣が近づいて來たわ。」

悠さんはさう云ひ乍ら先に立つて仲店をぬけて公園の方へ歩んだ。

「ほんたうに、私は二年振りで公園を散歩するよ、随分變つたね、おや吾妻座はどこへ行つたの。」

「吾妻座は焼けましたよ。」

「焼けた、いつです。」

「たしか四月頃焼きましたと思ひます。」

「さうですか、それに此の道路が石畳になつたね。」

悠さんは今昔の感に堪へないやうにあたりを眺めて感激に耽つてゐた。

「私はよくこゝを十一時過ぎて、活動の客が歸つた跡をひとりで歩むのが好きであつた。それに朝早くの淺草は何んとも言はれない感じがするよ。」

「さうですかね、朝なぞ何んだかきたなありませんか。」

「そこが私には、たまらなく嬉しかつた。」

「随分變つてゐますね。」

自分達は其處ことを言ひ乍らいつか合羽橋近くまで歩んで來た。

## 十七

「おや、随分話に夢中になつて此處まで來てしまつた。又引返しませう。」

「さうだねそれにしてももうお前はお歸り。あんまりおそくなると皆さんが心配するといけな  
いから。今日は朝から一日だからね、又お前も出直すとしてね。」

悠さんはさう言つて優しく奥さんをかへり見た。

「さうですか、それじや私こゝで御免こうむりますわ。」

奥さんは、さう言つてしとやかに頭を下けた、自分は横から奥さんのやつれた襟首を眺めてゐたら、不憫に近い寂しさが感じ安い自分の胸に押し寄せて來た。

「さうかい、それじや歸つたらお母さんや皆さんによろしく言つておくれ、その中に又私も何ふと言つておくれ。」

「さよなら、野村さんどうも有難うございました。」

「い、え、私こそ失禮しました。」

「さよなら。」

「さよなら。」

自分達は三人合羽橋の上に立つて、入谷の方へ廻る角へ、奥さんの姿が消えるまで立つてゐた皆黙つて立つてゐた。鐘がて廻角へ行かれた時、奥さんは今一度自分達をふり返つて一寸黙禮した。さうして角へ廻つて了つたその後姿が消入るやうに寂しかつた。

「さあ、又公園を出て歸らう、私も早く寺へ歸りたくなつたおやもう七時だね。」

悠さんは、角の藥屋の店をのぞいて時計を見た。

「まだ宵の口です。」

「しかしこの頃寺で夜早く寝る習慣をつけたから。」

三人は又あてもなく来た路を後もどりした。

雷門へ来た時自分達は又再會を期して逢ふことにして別れた。悠さんは南千住行へ、自分と妻

はまだ宵の口なので一先づ清島町の實家へ立寄ることにして、上野行へお互ひに電車に乗った。

自分は始めてゆつくり妻と語る時が来た。

「しかし悠さんも變つてゐますね、それからあんな寂しい寺の座敷へ歸つて寝るんですか。」

妻は今日行つた晝でもあやしい寂しさを持つたあの僧房の薄暗い東向きの室を想像した。

「ほんたうだね。」

自分達は徐々さうした話からいつしか悠さんと奥さんとの今後の問題にまで立ち入つてゐた。

自分はふと悠さんが「元々通りに夫婦になる其儘ことは二人を不幸にすることだ」と言はれたあの沈痛な表情は果たして何を物語つてゐるんだらうか、悠さんはまだ奥さんを疑つてゐるんだらうか、それとも奥さんは果たして怎麼考へを悠さんに對して持つてゐるんだらうか、自分はさう

思つて今朝からの奥さんの態度をいろ／＼に想像し乍ら、なにか其處に自分の胸にピツタリと來る何ものかないだらうかと思ふもの、暗中に物を探がすかのやうに更に手答へがなく朦朧とした中に只奥さんの俯向き勝ちな姿が謎の如く又幻の如く浮んで來た。

「おい、お前は奥さんを何んと思ふ。」

あまりに出しぬけな自分の聲に妻は驚いた。

「さあ……私にはよくわかりませんわ、人の心なんかけれどもあゝして涙ぐんでられる姿を

見ると、可愛相な方ですね。」

「さうだね、僕は怎うにかして今一度元々通りに一緒になつてもらいたいだ。」

「ほんたうですね、それにしても悠さんは怎麼考へを持つてゐられるんでしやうか。」

「さあ、それも僕にもよくわからないのだが、後日又、ゆつくり聞いて見るつもりだ、悠さんはしかし正直に思ふ事を語つてくれるけれど、どうも奥さんには實に平向してしまふ。どこまでが眞當の心なのか、更にわからなくなつて了ふのだ、女と言ふ奴はどうも謎だね。」

自分はさう言つて妻の顔を見た。

「其儘ことはないでせう、奥さんにしても貴男には話しにくいのでせう。」

「そんならお前が聞いてくれないか、僕は悠さんの心をたしかめるから。」

「さうですぬ私になら奥さんはほんたうのことをおつしやるでせう、矢張り女は女同志でないと駄目よ。」

「それぢや男は男同志か。」

「まあさうね。」

妻は寂しい微笑を洩らした。

自分はふとどこまで行つても男は男同志であり女は女同志であると云ふことが、永久に男と女とが交ることの出来ぬ平行線であることをしみじみ感じさせたと同時に、現在自分の傍らに一生を自分と共に歩いて来る妻が、矢張りどこまで行つても、自分の傍らにゐると言ふだけで、更の他人と同じやうに自分自身とピッタリと合一することの不可能であると言ふことを考へたらたまらなく寂しく思はれた。と共に、それが當然であると言ふ肯定の裏に孤獨の貴さがにじみ出るやうに湧いて来た。

「それぢや、いつか折りを見てつとめて奥さんの心を探ぐつておくれ。」

「よござんす、私にはきつとほんたうの事をおつしやると思ふは、先程も奥さんがせし近い内

に遊びにゐらつしやいつて、何度もおつしやつたんですものきつと私の方で云ひ出さなくとも寂しいお心持を誰れかにうつたへたいのよ。」

妻はさう云つてあだかも卓越した人心の観破者のやうな態度を取つて、自分をかへり見た。自分は一寸不愉快な心持がしたが、しかし今の場合妻にまかせることにした。

清島町で電車をおりて自分の實家の前を通つた時店はもう暮の用意で何にかと忙がしかつた。自分達は裏木戸から奥の茶の間へ上がった。両親は久し振りに横濱の伯父の處へ従弟の一年忌にあたるので今朝行つて留守であつた。両親が居ないと何んとなく自分の家は寂しかつた。いつも自分達の興味の中心となつて笑はせた、快活な兄ももう子供の父であり、どこことなくおさまりがへつた態度が、自分には妙に滑稽に取れてならなかつた。遊びと言ふものをあまり知らなかつた自分は兄の長い間の放蕩生活を羨やみはしたものの、憎む心が毛頭も起きなかつた。比較的早く現在の妻と關係した自分は、さうした兄の生活をいろいろ小説や話で聞いたり、讀んだりするだけで自分にはもつと切實な實感味に富んだ貴い祕密がひそんでゐるやうに思はれてならない「春雄、遊びなんて言ふものは其處にお面白いものじゃないぞ、兄さんなんか一種の習慣で遊んでゐるが、この頃はもう苦痛だあんなことは覺えない方がいゝぞ」とよく遊んでゐる盛りに兄は、其

麼ことを言つて自分にさうした世界に近づかせまいとした。それを自分には兄自心の懺悔とは怎うしても取れなかつた。さうして實に厚かましい自分勝手だといつても思つてゐた。

さうした兄もいつか現在の嫂と結婚してから、遊びもびつたり廢めてしまつた。それから自分分は兄からよく小使ひをもらつて妻に内證で時々さうした巷へ足を入れたものゝ、自分には當抵兄の十分の一もさうした世界の興味に觸れずに終つたさうした事が現在の自分には不幸であつたとか幸福であつたとかと考へる餘地が無い程、自分は現在の貧しい生活に追はれてゐた。

## 十八

「嫂さん今晚は。」

妻はさう言つて先きに立つて、茶の間の長火鉢の前で赤坊をあやしてゐる嫂に挨拶した。

「おやおめすらしうお一人。」

「いゝえ。」

「それじや春雄さんと御一緒。」

「いゝえ。」

「何んだね、この人それじや誰れと御一緒なの。」

妻と嫂とが其麼ことを云つてゐる時自分は便所から出で座敷の様子を覗ひ乍ら妻がしめて了つた障子を再び自分はあけた。

「今晚は。」

あまりにだしぬけなので嫂は驚ろいてふり返つた。赤坊は何にか恐ろしきもの浸入者のやうに自分の顔を見て火の着くやうに泣き出した。

「おゝ、あゝ、恐ろしい、恐ろしい、伯父さんね。」

妻は其麼ことを言つて赤坊をあやしてゐた。

「どうしたのさ、其麼處にかくれてゐて二人共揃ひも揃つて茶目ね。」

「嫂さん茶目をするつもりじやなかつたんですよ忙がしい店へ、夫婦揃つて遊びに来るなんていかにも呑氣さうでね。氣が咎がめたから這入り憎くかつたんです。」

「何んですつて来るさうく遠廻しに、お惚氣なぞ聞かせてどうも御馳走様ね。」

嫂は小供を呵かる時のやうな眠つきを自分にして一寸妻の顔を、かへり見て微笑した。  
「貴男の眼はこわいのね。そんな大きな眼をするから赤ちやんが泣くんじやないの。」

妻はさう言つて赤坊を嫂の手へ渡した。

「おいおい其塵にこわいか此塵優しいお伯父さんを。」

自分はつとめて笑顔を作つて赤坊をあやしたけれど、赤坊はこわがつて嫂の懐の中へ顔をかくした。

「赤坊なんて仕末にならないもんだな嫂さん其塵に子供は可愛いものかな。」

「あれ、あんな事を言つてゐるわ、ねよし子さん持つてこらんないよ、そりや可愛いものよ。」

「ねよし子さんと言つたつて妻だつて其塵経験はないんですよ。」

「そりやそうですけれどもね、よし子さん春雄さんのやうなこと言ふ人はないわね、其塵ことを言つてもねへ、今に出来て御覽なさい可愛くて可愛くてこまるわ。」

「ほんたうにね。」

妻はその時何に思つたのかチラと自分の顔を見て水のやうな寂しい微笑を洩らした。嫂よりも先きに結婚して、いまだに子供の出来ない自分達夫婦の寂しい生活が、面のあたり賑やかな兄弟夫婦の生活を眺めてゐると、しみじみ頼りなく思はれた。

「子供の嫌ひな人には、子供が澤山出来ると言ふのですがね、怎うして貴男方は出来ないの。嫂の笑は急に野卑に見へた。」

「製造方が下手なんでしやう。」

「まさか。」

三人は思はず、ふき出した。そこへ兄がのつそり耳に筆をはさんだ儘、這入つて来た。

「春雄今日何にかあつたか。」

「別になんの用事もありません、友人と久し振で淺草まで来ましたから。」

「そりやめづらしいな、たまには遊びに来てもいいぞ、無心に來る時ばかり來る家じゃないかな。」

さうした兄の言葉も兄の性格を知つてゐる自分にはそれが皮肉に取れなかつた。

「度々來てもいいですが、僕はお邪魔に나ると思つて。」

「誰れが、邪魔にして、ね、貴男春雄さんはどうして、其塵皮肉のやうな憎まれ口をきくの、憎らしいのね、さつきもね茶目をして私を驚かしたのよ、およしさんもおよしさんよ一緒になつてからかつてゐるのさ。」



嫂は、其處ことを言つて微笑した。

「どうも文學者は我々のやうな俗人とは話が合はないんだらう。」

兄は其處ことをいつて、豪傑笑ひとでもいひさうな、快活な笑ひを洩らした。自分はいつも自分の生れた家へ来る度びに淋しい築地の佗び住ひから出た自分には春に出逢つたやうな暗い影の毛頭もない長閑な賑やかな周圍にいつも引き込まれて自分はいつも陽氣になつた。

「春雄、少しは神経衰弱もいゝのかい。」

「は、何んですかねいゝ、んだか悪るいんだかさつぱり解かりません。」

「随分呑氣な病氣ね。」

嫂は側からさう言つた。神経衰弱の神の字も味はつたことのない兄は、かつて醫者から此の病氣が重くなると發狂すると言はれてから、兄は神経衰弱と聞けば何よりも恐ろしい病氣を想像した。

「まあ、少しはいゝのでしよう、是で生活の不安さへ感じなかつたら、晴天のやうにすつきりと頭の中が晴れるんですが、時々曇天になつてこまります。」

「やつかない奴だな。」

「やつかない病人を弟に持つたが因果何分宜敷願ひます。」

兄は自分の言葉に、おかしくなつたと見へて思はず吹き出した。その口泡が向ひ合つた嫂の顔へかゝつた。

「きたないのね。」

「あハ……」

兄は腹をかゝへて笑つた。

「おい春雄それにしても、その頭の毛は何んだ、掃木のやうにつゝ立てゝ、文學者はさうしなくてはいけないのか、それに藪醫者のやうに白足袋などはき込んで、此の間も親父が笑つてゐたぞ。」

「ほんとうに、おかしいのね、よし子さん。」

「え、いくらおよしなさいと言つてもきかないんですもの。」

妻はさう言つてしみじみ自分の姿を眺めた。

「兄さんそれも皆經濟上得なのですよ、白足袋は洗ひがきくし、頭の毛は三月もからすにすむし。」

自分はさう言つて脱がれた。

「お前にも、經濟思想があるのか感心だな……」

「おい、久し振りで夫婦御入來だから何にか御馳走しろよ。」

「あ、そうく話につり込まれてうっかり忘れてゐたわ、春雄さん何に御馳走しませうもう九時ですから御飯はお済みになつたんでせうね。」

嫂はさう言つて立ちかけた。

「姉さん何んにもかまはずにして下さい、私今何んにもたべたくないので。」  
妻は遠慮してさう言つた。

「まあ……そんなこと言はずにね、春雄さん。」

「春雄は、甘黨だから、しるこでもどうだ。」

「さうねへ春雄さんおしるこたべて。」

自分は日暮頃悠さんと寺で簡単な夕食とも晝食ともつかない食事をしたので、實は空腹がして先程から妻と二人でどこかで晩食を取らうと思つてゐた。けれども、幸ひ淺草の家の近くなので自腹を切らずに思ふ様喰へる處が出来たと思つてやつて來たのである。

「嫂さんおしるこも結構ですが、そのすむべき處の夕餐がまだすまない次第で。」

「あら、ほんたうなぜそんなら早く言はないの水臭ひ方ね。」

嫂はおかしくなつたと見えて袖をか、へ笑ひ出した。

「厭な方ね私澤山よ嫂さん。」

妻は一寸恥にかんだ。

「それじゃ鰻でも取らう俺も何んだか腹が空つた。」

「それじゃさうしませう。」

嫂は電話をかけて注文した。

### 十九

嫂の分まで平けてしまつた自分は、苦しい程満腹した。十時過ぎて二人は兄夫婦に別れて家を出た。

「おい苦しいから雷門まで歩かう。」

「貴男にも随分あきれたわね。」

「なにがあきれた、たまに來たんだもの少しは我儘言つた方が喜こんでゐるよ。」

「それでも、いゝのね、貴男には我儘の言へる家があつて、私今晚こそしみじみ貴男が羨やましくなつてよ。」

妻は急に何を思ひだしたのか、そんな事を言つてほろりとした。

「おい、又其儘愚痴なような事言はんでくれ。」

自分は、さうは言つたものゝ、妻と妻の實家とがいまだによく和解出來てゐない不愉快な事が浮かんで來て、妻を不憫に思つた。宛のない収入に生くる自分達の生活時々親に無心を言つては助けてもらふ、生活他目から見たら毎日ぶら／＼遊んでゐるやうな生活、小説とは男女の色事を書く事をもつて得々としてゐる道樂息子の成りの果て位ひに思つてゐる妻の實家に、自分達の苦しい淋しいしかし貴い生活は、怎うしても理解されるはづがなかつた。その上一冊や二冊の本をだした處で、一向現文壇から歸り見られない。自分が怎うして妻の兩親に自分の仕事かわかるはづがあらうぞ。さう思ふと妻をたまらなく不憫に思はれた。けれどもそれに比して自分はしみじみよい兩親や兄をもつたことを心から感謝した。「春雄、生活のことなぞあんまり心配するな今は親父の前もあるからさう助けてはやれないけれどまあ……俺の代になつたらお前に、其儘會社へ

なぞださないで専心創作をさせるぞ。その變りいもゝの書いて兄弟のほりになるやうな事をしてくれ。お前の事業は精神的なんだから物質に困るのは無理がない。その點は俺が心配する。」かつて兄がいつになくしんみりと自分をほめてくれた、言葉を思ひだして。涙がでる程の思ひがした。自分は兄の前としても、長い一生の間には立派な藝術家になつて見せやうと思つた。今までのやうに藝術に對してもつてゐた浮薄な心を捨て、あの求道者が祈り讃へるやうな心をもつて接しやうと思つた、眞當のものさへ書けばいつか世の中に見とめられる時がくる、又見とめられなくて、一生闇から闇へ葬られてもかまはない。さうした意味の藝術ならば、創作することによつて、自分が救はれることだから、自分が魂の底から救はれる時は取りもなほさず、自分の書いたものを讀んで救はれる人もきつとあるであらう。

さうした事がたとへ一人であらうとも、自分は人類に對して貢獻したことだ。誇大な言葉を以つて言へば、人類を救ふことだ、釋迦のやうな偉大な聖者でさへも縁なき衆生は渡しがたしとなけられたやうに、自分のやうな弱い人間が怎うして人類全體を救はれやうぞ、人類全體を救はなくともたとへ一人なりとも救つたならば、それは人類を救つた意味だ、そこに眞の藝術家の任務がある。自分自心すら救ふことも出來ず甚だしいに至つては、純眞な人間性に害毒を流すやうな

藝術はそれこそ道樂息子のなれの果てと云はれても仕方がない。自分は早く家へ歸つて悠さんを骨子とした創作の續篇を急ごうと思つた。

「ねえ、貴男貴男は淺草の家へ行くと別人のやうに快活になるのね。」

「そんなに浮かれてゐたかい。」

「随分お面白い事ばかり云つて皆を笑はせるんですもの、たまには私と二人でゐる時もあのやうな快活なことをおつしやつてもいい、じやないの、いつもにが蟲をかみつぶしたやうな顔をしたり淋しさうな顔ばかりしてゐらつしやるんですもの、何んだか、私までが心細くなるわ、私ヒステリーになつたのきつと貴男のお影よ。」

「妻は恨めしさうに云つて涙ぐんだ其儘こともう云はずにくれ僕は切ないから。」

自分はずくづく妻にすまなく思つた。何ひとつ流行物も買つてくれず質屋へ這入つた妻の着物もその後一枚も出してくれず、毎月月末には並大抵の苦勞をさせてめつきり世帯じみた妻の俯向き勝ちな姿を眺めてゐると、自分も戀て悠さんのやうに離別の悲劇が自分達の上にも押し寄せて來るんではなからうかさう思ふと寒氣がするやうにぞつとした。さうして悠さんの言つた、「女は精神的ばかりじや駄目だ、物質も豊富にしてやらなければ駄目だ」と云つたことが今更乍ら切實

に、警笛のやうに貧しい自分の胸を脅やかした。

妻が現在の妻が、もしも自分から遠く去る時があつたならば、………そこまで考へてくると當抵堪へられなかつた。自分のやうな男は常抵孤獨に堪へられる男ではないと、云ふことを自分はよく知つてゐた。さうして四年以上も自分と共に苦勞して、自分の長所も又暗い方面もよく理解してくれた妻が、自分から去つたならば、自分には果たしてもう妻として自分と一生共に歩んで來そうな女は、もう此の世には無いやうな氣がした、自分は妻を愛してゐる。愛して居ればこそ時に妻の心を疑ふことがある又もどかしく思つたり、じれたりすることがある、けれどもさうした行爲は、單に邪見として、嫉妬として、多少なりとも妻にさうした不愉快な思ひをささと云ふ事は妻自身よりも自分の方がより一層苦痛であつた。「これも皆お前を愛すると言ふ一念だから悪く思はずにくれ」自分はよくさうした事を言つて泣いてゐる妻を慰めた事があつた。

築地の終點へおりの時二人は黙まつて星のない暗い河岸を歩んだ、十一月末の冷たい夜風が遠慮なく肌へ吹き着けた。

「寒いのね。」

妻はさう言つて自分に寄り添ふた。

「およし、お前にはいつも言ふ通り貧乏ばかりさせて氣の毒だけれどね僕はこうしてお前と一緒にゐればしみじみ幸福と思ふ。」

「有難う。」

妻はさう云つて涙ぐんだ。

「怎麼貧しい生活でもい、からこうしてお前と一緒に暮らせたらい、じやないか、子供なんか無かつたつて淋しいだらう。」

「え、子供なんか無かつたつて、貴男さへいつも親切にして下さればそれでい、わ、それを變んな事をおつしやつたり、淋しさうな顔をしてゐらつしやると、何んだか私まで心細くなるんですもの。」

「さうか悪るかつたね。」

「あやまらなかつたつてい、わよ。」

二人はその時冷たい手をだしてそつと握つた。盲人の吹き鳴らす銀笛が末枯の河岸に響いて人通りがまれであつた。

次ぎの次ぎの日曜の朝であつた悠さんから突然次ぎのやうな手紙が來た。

野村君！ 上京の節はいろくお世話になり深く感謝に堪へません。孤獨の私を心から慰めてくれた君達夫婦の事を思ふと何んと言つて目下の私の心持を現はしてよいのやら、その言葉に難する。私は只君達のことを思ふて合掌禮拜するより仕方がなかつた。實際私は今心から君達に感謝してゐる。

野村君！ 私は今くどくしく書きたくないけれども、只一言感謝に酬ゆる爲に君に書き送つて私は一先づ國へ歸つてくる。野村君！ 私はたつた一人でい、から人間の心と言ふものを信じたかつた。けれども、私には怎うしても人間を信じられなかつた。ことに女性は、私に取つては永久に信んず可からざる謎であつた。それが苦痛だ、女性を信ずることの出来ない性格に生れて來た私はせめては男でもい、人間の心と言ふものを信じたかつた。たつた一人でもい、自分が死ぬ時に人間の心を信じて死にたいと私は長い間それを求めた。

私は長い間、怎麼にさうした空しい努力を續けて来たことであらう。ある時は死ぬ程の思ひをし、  
ても怎うしても深く深く掘つて行けば暗いさうして開かれざる扉が冷然として私の前に横たは  
つてゐるのを怎うすることも來なかつた。その扉を怎麼に苦惱しても開かなかつたならば、私  
は相對的に友人として、あるひは夫婦として、あるひは親子として、永久に愛する權利が無いこ  
とだ愛することの出來ない事は愛される事の出來ない結果を生む、それ故に私は永久に孤獨であ  
る。

孤獨なる者よ！

寂寞は汝が只一の住家である

如何に痛苦に惱まざるとも

汝はその寂寞に衷心する勿れ

深く深く心ゆくまで、

その寂寞を掘り盡くせ

偉大なる歡喜はかならずや

その寂寞の中より生れ

汝が冷たき胸をうるほすであらう。

さらば孤獨なる者よ！

雄々しかれ！ 力強かれ！

野村君！ 苦しくなつて來ると私はかの僧院の裏山へよく獨り登つて、  
怎麼に心ゆくまで大空を仰いで、愛踊したことだらう永久に開かれざる扉に向かつて悶ゆる時、  
たしくカキーはいつもこの詩であつた。

深く深く人間の魂の底へ喰入つて行つた私の悩みは、もう私の血も涙も枯らして丁ふ程、  
苦惱と寂寞に満ちてゐた。私はあらん限りの聲を上げて叫んだ。山彦は木立に反響するけれど、  
心の山彦は悶ゆる私の胸へは、更に何の反響も無かつた。

思へば野村君、私は幾度かかく叫び乍らも衷心せんばかりの絶望と苦惱とを抱いては、  
たほれ抱いてはたほれ乍らも又雄々しく起き上がったことであらう。

纏がて、さうした私の胸にも歡喜に満ちた山彦のおとづれる時が來る。  
悲哀は永久の悲哀では

ない、苦惱は永久の苦惱ではなかつた。總てより深き生の驚異に導く唯一の洗禮であつた。ことに氣がついた時、私は今更乍ら生命の神祕と偉大さに驚嘆せずには居られなかつた。

さうした世界は、矢張り孤獨であつた。けれども今までの孤獨とは質に於いて雲泥の差であつた。あだかもあの雛鳥が卵の殻を破つてぬけいでた如く、私は自他の區劃を打ち破つて混然とした、大實在それはまことに偉大なそして深遠な孤獨であつた。さうして無限の歡喜と光明に満ちた孤獨であつた。

さうした心境に導びかれた私の魂は何にもものにもかへられない、生かひを見出した。

野村君！

さうした孤獨に生きる者にとつては、其塵相對的な友人だとか戀人だとか、夫婦だとか、親子だとかに向かつて信んずることの出来ないと嘆ずる事や所有出来がたきをなけくこと如何に愚かであり、空しき徒勞であつたかを切實に私は自覺した。

總て皆、彼のものであると同時に皆わがものであると同時に何もものも我はもたないのである。

誰のもの彼のものと區別する必要が無いではないか、誰の處へ心が走つたなどと嘆く必要がな

いではないか、皆我であり、皆我がものである。天地一枚の孤獨であり無である。

そこまで深く掘つて行つた、私の心は俄然として今までかつて覗ひ知らなかつた、偉大な孤獨の姿が本來の面目の中に躍如として、姿をあらはしたのである。草木國土是皆成佛と、おのづから叫びたくなつた。誇張でもなんでもない。さうした時の心持は言語を絶し只合掌禮拜するより外に仕方がなかつた。

思へば野村君！ 私はかうしたものを掘むまで怎麼に長い月日を苦惱と寂寞との中に日を送つた事であらう。

何ごとも無意味ではなかつた。總て皆善知識であつた。私は今でもあの詩に感謝する、寂寞と苦惱に禮拜する。さう思ふと野村君私は自分を捨て、行つた妻や友人やその他多くの知人に對して、感謝こそすれ毛頭も恨む情はなかつた。なぜなれば私は永久に妻なら妻に愛されてゐたなら私は果たして、孤獨の苦痛をなめづに終つたかも知れない、孤獨の苦痛を通じて更により一層偉大な孤獨の歡喜に觸れずに終つたかも知れない。

野村君！ それ故に私はもう妻なら妻戀人なら戀人として、今までのやうに相對的に愛することの出来ない事を知ると共に絶對な世界から彼等に接したいのである。たつた一人の人間でもい

、から信じたいと願ふ心も絶対の世界には愚かな願ひであつた事に気がついた。絶対の世界には信仰もなければ懷疑もない只如々である。

けれども野村君！ 凡夫であり、まだまだ修養のたりない多情多感な私は、時にそうした絶対な心に生きながら相對な世界にふみ迷ふ事のあるのを自分乍ら心苦しく感じてゐる。そんなことはもう自分にはないと思つてゐる。けれど人間の持つ感情と言ふものは割合に宛にならないものだからね。

この一言で野村君私が別れた妻と元々通り夫婦になりたくないと言つた意味がよく君に理解されること、信づる。

此處ことを云つたなら君は定めし私の悟りと云ふもの、力弱いことを笑ふであらう。笑はれても仕方がない事實なだから、私は悟道の第一歩をふんだに過ぎない一生精進努力である。それ故私はなる可くかうした世界にふみ迷ふことには遠ざかりたいのである、思へば弱い心ではあるが仕方がない。

野村君！ こと新たらしく此處ことをくり返すのは如何にも愚痴らしいけれど、私は實際別れた妻だけは、世界中の人間を信じなくとも信じてゐた。

その信じてゐた、妻に裏切られたのだから私の驚ろきと絶望とは、どんなに深か、つたかは只私自身身體験したのみであつた。それ故に私と妻とはもうどこまで行つても永久に交ることの出来ない平行線であり深かい谷を作つた。そうした二人の人間を今君は親切にも元々通り一緒にさせようとする君の志には感謝するが、行爲には感謝出来ないのである。なぜなればそれは永久に二人を不幸にすることだから。

勿論、こんな話も相對的な苦惱であつて絶対な世界から眺めたら愚な話である、前にも書いた通り誰れのものであらうと誰れに心が走らうと皆我であり、皆我のものである。

けれどもね、それが元々通り一緒になつたならば弱い弱い私はきつと又相對的な心が時々頭を上げること、豫期してゐる。それを私は恐れる。それ故に私は別れる。別れてゐて絶対の境地から妻を愛さう。妻としてでなく兄妹として隣人とし彼の女に接して行くなら私は喜んで彼の女を愛するであらう、けれどもそれが妻として接する時に時々相對な心になり勝ちである。人間はどこまで行つても人間である。けれども私はいつかはそれ等を一切平氣で所有し愛する時が來ることを幻けながら信じてゐる。

野村君！



私は今幸福である。この幸福を今私は破壊したくない。どうか私の心持を理解してくれ給へ。そうしてもう二度と元々通りなどと云ふ言葉を云つてくれるな。私は免に角として妻が第一不幸です。随分長くなつた歸國前は君と逢へないかも知れないが歸京の節は逢ふて、心ゆくまで語らう。私も今度はきつと何にかするそれでは妻君によろしく。

竹林の草庵にて

悠 一 郎

野村君！

二十一

悠さんの手紙を読み終わつて自分は、悠さんが何が故に奥さんと元々通り夫婦になることを否定されたかよく了解出来た。

悠さんは怎う見ても此の手紙では奥さんを愛してゐる。戀人として妻として悠さんは奥さんを思つてゐる。けれども事實はもう戀人でもなければ妻でもなかつた。この怎うすることも出来ない事實を、悠さんは怎うすることも出来ない事實として忘れ去らうとした處に、悠さんの長い間

の苦惱があつた。相對より絶對からと叫ぶ心の何んと云ふいたましさであらう。偉大なる歡喜であり、光明であると悠さんは言ふもの、そうした世界は又人間味から云つて何んと言ふ寂しい世界であらう。

悠さんは妻なら妻として、相對的な關係になると暗い影のある、奥さんが少くも悠さんの臟を通じての暗い影が奥さんに對する悠さんの愛を邪魔をして怎うしても嫉妬せざるを得ないと言ふそれが苦痛だと言ふ。それ故に絶對の世界から、妻を愛したいと言つた悠さんがたつた一人の人間すらも信んづる事の出来ない味氣ない心持がよくわかる。

絶對な世界には嫉妬は無い。所有もない。差別もない悠さんは、そうした心に生きたい爲に、長い間努力された。そうして現在そうした心に生きてゐられる。絶對な愛に生くることによつて相對的な愛を忘れようとした。

悠さんに、いや忘れて了つた悠さんに今又再び相對的な愛を持つて來て、悠さんと一緒にさせようとした、自分のうかつな行爲が悠さんに對して非常にすまなく思つた。けれども絶對な愛に徹底されたら其處ことは怎うでもい、ぢやないかとは思ふもの、悠さんは自分自身の弱いことをよく知つてゐられる。悠さんは常に絶對な心から奥さんを愛さうとするけれど、怎うしても相對

的な心が今までの關係上頭を上げそうであると言ふ事に氣がついてゐた。そこに又悠さんの人間らしい妻があると自分は思ふもの、悠さんは自分のような人間と異つてそうした人間味には耐へられない程眞撃であつた。

それ故奥さんとは一緒にならず、夏の他人のように傍觀してゐたいらしい。絶對な愛をもつて奥さんに接してゐられて、妻としての相對的な奥さんには接したくないと言ふのだらう。

自分は悠さんの苦しい心を想像すると何んとも名狀しがたい。寂しさが、息のつまるような淋しさが喰ひ入るように、自分の胸に押し寄せて來た。たとへ夫婦になつたとしても、相對的な愛から脱して常に絶對な愛に生られたらよいはづだけれど、人間の愛着はさう簡單にたち切れるものでな事をしみじみ感じた。それにしても、奥さんは果たして怎麼心でゐられるんだらう。「第一妻が不幸です」と言はれた悠さんの思ふ如く、果たしてさうした事は奥さん自身に取つて不幸な事かしら、自分はふと二年前に松葉町の某古寺の座敷に貧しい生活を送つてゐられた悠さん夫婦あの當時の有様が雲水の餘上から送られた。あの沈痛な悠さんの手紙を背影にして幻の如く浮かんで來た。

自分は手紙を読み終るや否突如として家し飛び出した。

「妻が朝湯から歸つて來たら一寸川事が出來て今戸の悠さんの處へ行つて來ますとおつしやつて下さい。」

自分は下のお内儀さんにさう言つて、淺草行き電車に飛び乗つた。

日曜の爲に相變らず公園行きの遊客で満員だつた。雷門で乗變る時銷松月と言ふ菓子屋で、悠さんの好きな菓子を買つて南千住行の電車に乗つた。

寺の門をくゞつた時、この開るた耳の遠い寺男が庭を掃いてゐた。朝の挨拶をかけようと思つたけれど何んともこの間の腹立た、しい、不愉快な第一印象が浮かんで來て、知らぬ顔をして通過ぎた。實に靜かである。東京の片隅に此麼靜かな寺があるとは思はれない程靜かである。本堂から讀經の聲にまじつて木魚の音がした。

自分はこの間住職の夫人から教へられた庫裡の裏木戸を開けた。それが悠さんの室へ通する裏庭であつた。

「今日は。」

自分はさういつたけれど誰れもこたへるものがなかつた。只本堂の屋根で小憎らしさうな鳥の啼く聲があたりの靜寂な空氣に氣味悪い感じをあたへた。

「今日はお留守ですか。」

再びさういつた時、悠さんは障子を明けずに中から、

「どなたです。」といふ聲がした。

「野村です。」

「何んだ、誰れかと思つたら君か遠慮なく上がつて来たまい。」

自分は上がつて障子を明けた。悠さんは机の前に坐禪をくんでゐた。スーと冷たい風がひとすじに立つてゐた香爐の煙を吹き散らした。

「すまなかつたね、實は小僧のゐない時に時々客が来て、迷惑だから、知らん顔をしてゐたのさ！」

「どこかへ今日は行かれたんですか。」

「朝のおつとめに本堂へ行つたのだ。」

「さうですか随分おそいおつとめですね。」

「そうだね。」

二人は一寸黙まつた。悠さんは膝をくつさなかつた。自分は天神机の横に座わつた。机の上に

は「普勸坐禪儀」が開かれてあつたけれど、小むづかしい漢字が羅列してあつて讀んで見る氣になれなかつた。

「今、小僧が來たら茶を出させますから。」

悠さんはさういつて始めて立ち上がつて戸棚をさがし出した。

「悠さん茶菓子なら僕が持つて來ました。」自分は始めて菓子に氣がついて其處へひろけた。

「や、それはすまなかつたね。」

悠さんはさういひ乍ら隣り座敷から鐵瓶を提げて來た。

「この頃私は寺で番茶を呑んでゐる方が、待合の美酒よりも好物だ。」

悠さんは其處ことをいひ乍ら白慢の茶器で茶をくんだ。

「これで鐵瓶さへ揃へばいゝがね。」

「そうですね。」

茶趣味にとぼしい自分はさういつて空返事をした。

「君！手紙はまだ着かなかつたかね。」

「え拜見しました。」

「そうですね、實はあのような譯ですから、例の問題はいはすに呉れたまへ、自分が元々通りになるといふ事が両方の幸福であると信じたなら、私は誰れが何んといはうともそうして世間から何んと罵倒されようとも私は一緒になるからどうか悪しからず思つてくれ給ひ。君の御厚意は感謝するよ。」

悠さんはそういつて苦しそうに語つた。自分はその一言を聞いてもうその問題に對しては一言もいへなかつた。

「そうですね。」

私はそういつて妙に行詰まつて黙まつた。

「悠さんはひとり澁茶をすゝり乍らもの思ひに耽けつてゐた。聽ておつとめがすんだと見えて小僧、隣座敷へ歸つたらしい音がした。」

「良海さん鐵瓶を拜借しましたよ。」

「そうですね、どうぞ。」

小僧の聲がした。

「悠さんいつお國へお歸へりですか。」

自分はもういふことが無くなつたので仕方なく其處ことをいつた。

「明後日は六日ですね、六日に行つて來ようと思ひます。」

「長くいらつしやるんですか。」

「いゝ、え十日ばかりで歸京したいと思ひます。」

「何にか御用でもおありなんですか。」

そういつた時悠さんはしばらく躊躇してゐたが、聽がておもむろに語りだした。

「何にをするにも家と和解して置かないと損であることをしみじみ感じたから和解しに歸るつもりだけれども、うまく行かないと思ふ。」

悠さんの顔は急に曇つて來た。

「其處に、悠んさの御兩親は悠さんを理解しないんですか。」

「そういはれると私は苦しいよ、ほんとに君に恥づかしい程私の兩親は、わからずやです、そう思ふと君なんか幸福だよ、兩親も兄弟も皆君を理解して君の仕業の爲に助けてゐられることを

思ふと、ほんとうに私は心から羨やましく思ふ。我々のするような事は實社會の人達からは輕視されてゐるんだからね、尤も全脚さへすれば人間は偉らしいものだと思つてゐる世の中へは、どこまで行つても我々は入れられることはないよ、又入れたくないね。」

悠さんはそういつて嘆息した。

「え、その點ではまあ、僕は幸福です。黄金萬能主義の父や兄も、よく僕の藝術的生活を理解してくれ、それは感謝してゐます。」

自分はそういつてふとかつて自分にいつてくれた涙の出るような兄の言葉を思ひ出した。

「ま！ 立派な作品を作つてよろこばして上げるんだ、それにしても私をモデルにした、君の最初の本は、意外に賣れたつてね、それは何よりだつた。私のような人間の生活がどうして現文壇に受けがよからうぞと思つてゐた。」

悠さんはそう云つて苦笑した。

「それにしても、悠さんは創作をなさらないんですか。」

自分はかつて悠さんの奥さんから悠さんが創作家にならうとして上京されたといふことを思ひ出した。

「私には駄目です。私は私の心持なり思想なりと、藝術といふ有形的なもので、表現出来ないことをしみじみ感じました。いか程巧みにか程眞實に描こうとも文字といふものを借りて表現する時は既に第二義にも三義にも降る。私は只黙まつて生きたい。沈黙こそ無限の雄辯であり、偉大なる藝術である。キリストは神を説いたが、聖書は只神への暗示に過ぎない、聖なる沈黙と祈りこそ彼が世に示した大なる説教ではなかつたらうか、又釋迦が幾萬卷の經典を世に示めされたとして只一つの拈華微笑こそ彼の全生涯を通じての無言大なる説法ではないだらうかまことに心の玉甫を説き得るものは、言語に絶した沈黙と祈りの境地にのみ宿る。私はもう永久に創作也ざる藝術家を以つて任ずる。」

悠さんはそういつて、しばらく自分の顔を見詰めてゐたがやがて又續けて語つた。

「そういつたから、とて君藝術は三文の價値もないといふ意味じゃないからね、只第一義の世界が、創作や詩や畫や音樂で、完全に表現出来ないといふことであつて、第二義第三義實在の假想であるから、藝術家はその假想に因はれてしまつては、その藝術は三文の價値もないことになる。それ故に眞の藝術はたとへ、第二義第三義の世界を表現するとも、そのいづこかに第一義を暗示する何にかひひそんでゐてこそ始めて藝術の貴さがあると思ふ、暗示こそ藝術の只一の

命生であると私は思ふ。宗教家が街頭に、眞理を説きつゝも偉大な暗示を聴衆にあたへてこそ初めて意義があると同時に藝術家は少なくとも藝術を通じて眞の生命を暗示する何にものかひそんでゐなくてはならないと思ふ。」

悠さんは、さういつてぐつと溢茶をのみほした。自分は總てに對して毛頭も遊戯分子のひそんでゐない生命に眞摯な悠さんの態度に少なからず教へられた。

## 二十三

自分は只感心して黙まつて、悠さんの藝術觀を聞いてゐた。それにしても悠さんは永久に創作せざる藝術家であり、黙つて生きたいといふものゝ、それでは何をする爲に上京されたんだらう、さうした疑問がたゞちに湧いて來た。

「それでは、悠さんは何にを爲さる爲に上京なされたんですか。」

自分はさういつて、沈黙して悠さんに追求した。

「私はやつと眞理を知りました。眞理を知つたからには眞理と共に生きたいのです。」  
その時悠さんの眸は異様にかゝやいた。

「それは、どういふ生活ですか。」

自分が問返へした時悠さんはたゞちに、

「労働です。」

と只一言答へた。自分はその時期待にはづれた異様な響きに觸れた。

「労働とおつしやつても莫然としてゐますが。」

自分はさう言つて悠さんの顔色を窺つた。

「わかつてゐるじやないかね、人間は働くことです。目的のない労働です。目的のない労働こそ労働それ自身が目的になります。」

「それはどういふ意味でせうか。」

自分は問返へさすには居られなかつた。

「世間で普通にいふ處の、金を儲ける爲に働らくとか、名をだす爲に働らくとか、觀樂を得たいが爲に働らくとか、衣食住を豊富にせんが爲に働らくとか、即ち労働それ以外に何にか目的を定めてその目的を貫徹せんが爲の労働は、神聖でも、何でもありません、實に無意味な徒勞です。私のいふ労働はそれ自身が目的であります。決して手段であつてはならないのです。さういふ

労働をする時人は始めて、最も生き甲斐を見出すこと、信じます。さうでない手段の爲の労働からは苦痛と不満とを永久に取り去ることは出来ません。」

悠さんの聲は眞實に満ちてゐた。

「この世から手段としての労働がとり去られない限り人類には永遠の幸福は来ません。」

「自分は、全く自分の考へてゐた世界と異つた切實な何にものかが背後より押しつけられるやうな苦しさに襲はれた。」

「目的としての、労働とはどういふ意味なのでせうか、さうしてなぜ労働のみが人生に對して貴いのでせうか。」

悠さんはさうした自分の問にたちち答へた。

「宇宙は大なるさうして無限な活物です。宇宙の一分子たる人間も又不斷の活物であり、創造者であらねばならないと思ふ即ち自分にあたへられた個性に最もかなつたことは忠實に働くことです藝術家は藝術に、美術家は美術に詩人は詩に商人は商人に農家は農業に總てその人自身にあたへられた、個性に向つて限りなく活動することです。さうした生活は、眞理であり、神への奉仕であり、佛との場合であると信じます。それには一點の手段もありません、人は目的に生

くる時幸福を感じ手段に生くる時苦痛を知るものです。私は目的に生きたいのです。」

「さうしたことは中々現代の社會では、ゆるませんね、幾人此の世の中で、自己の個性にかなつた生活を満足に送つてゐる人が、居るでせうか。」

自分はさう言つて益々悠さんに肉薄して行つた。

「さうです、その點でソシリアリズムも必要です。私はこれから時に依つてはソシリアリズムと手を握ることもあるでせう、けれども私は全然彼等の主張に満足出来ません。」

「それでは悠さんの労働とおつしやるのは何にをなさるんですか。」

「奉仕生活です。その方法は今考へてゐる處ですからいづれ君に詳しく語る時もあるだらう。」  
悠さんはさう言つて沈黙した。

奉仕生活……その言葉倦怠し切つてゐる、自分の胸を鋭利なる刃物をもつてえぐられるよやうな心持がしたと同時に、火のやうに燃えてゐる悠さん自身の人格が今度の上京を意義あらしめると同時に今度の悠さんの活動がすばらしい勢をもつて廻轉しやうとする意氣込みが、その瞳その唇その握つた手にあふれてゐた。

「しかし、野村君！ 奉仕生活と口には言ふもの、中々困難なものだと私は思ふ、なせならば

藝術家が衣食住の事を忘れて、藝術に専念して立派の作品を生めるやうに奉仕生活にたづさはる人々に衣食住の憂をさせる社會は酷だ。奉仕とか傳道とかいふことは、それ自身既に立派な生活であり労働である。農夫が畑を耕やすことの聖なる労働であるごとく商人は商人職人は職人學者は學者總て私慾を捨て、眞に労働それ自身に成り切つた人達の生活は立派な眞理に生くる人達であるやうに奉仕傳道にたづさはる人達の生活もそれ自身立派な眞理に生くる事である、なぜならば、形色が異ならうとも、その實質に於いて、既に大なる活動であると同時に私慾を去つて隣人への愛であり、救世であるから。總てが、私慾を去つた労働でありたい、さうした労働こそまことの意義ある隣人の爲であり、救世である。農夫が一粒の米を作るにもこれ自分を生かすと共に萬人の爲に作らんとする意志あつてこそ、その労働は始めて意義あるのである。商人もさうである職人もさうである學者も藝術家も宗教家も總て自他共に、よりよく生きんが爲の労働であつて毛頭のイゴイズムがあいはなれないのでこそ始めて意義があると思ふ。

けれども、さうした生活は總て眞理に直接な生活であるが故に、それ相當に衣食住は伴ふが奉仕傳道の生活になると、眞理と間接になるなぜならば、彼は直接に耕さない。商はない又作らない。それ故に直接眞理には生きないけれども彼は、未だ眞理を知らざる人の自己を忘れて、傳道

救世の志に燃へてゐる。それ故にたとへ間接とはいへ無限な活動であり、労働であり、隣人の愛である、立派な眞理そのものであると信ずる。しかし君！ さうした生活は、間接であるが故に相當の衣食住が伴はない。それは實に社會の罪だ。人は二君に仕へられない手段の爲の労働は、人生の不合理だ救世傳道にたづさはる者は、救世傳道になり切るがよい、決して農夫の眞似や、商人の眞似をせずともよろしいと私は確信してゐる。世の中は決して一色をもつて塗れない。無一物の中に花は紅、柳は綠である互ひの個性に忠實でありたい個性に忠實である事は個性を通じて絶對な世界を形作るから、けれども、其處ことを言つた處で人間は喰はずには生きられない、そこに精神的な事業にたづさはる者の悲哀がある。社會はさうした人達の爲に淨財淨米を捧げる責任があると思ふ。それで今度私が國へ歸ることは、かうした私の志を理解してもらい、少なくとも生活の安定だけ保たせてもらひたいが爲である、精神的な事業にたづさはるもの、受ける報酬はいつも精神的な感謝と愛であつて、衣食住の糧は得ない、それを私は生れた家からだしてもらひたいのだ、それは決して恥づかしくない事だと私は確信した。その變り不後悔の意志をもつて眞理に向かつて進すむ覺悟だ、さあ、……かうしたことを両親が了解してくれるや否や、これが君、私の疑問であり煩悶である。」



さう言つて悠さんは深かい空想に耽けつた。

## 二十四

寺で簡単な茶漬飯をすましてから、二人は又悠さんを骨子とした自分の最初の創作の話になつた。

「しかし、まあよくあれだけ書いたね、私は読んで驚いたよ、うつかりして言つたことを一句も洩らさず、書き表された君の熱心と洞察の鋭いのはいさ、か恐れ入つたよ、しかし、我はさうしてその本が出来て嬉こんでゐるだらうけれど、私は公衆の前に自分の缺點をはじきだされたやうな心持がしたよ。」

悠さんはさう言つて、苦笑した。自分は實は自分の最初の本の結末があうした結果に行くとは豫期してゐなかつた。急轉直下悠さん達の運命が變化したやうに、自分の創作も事業と共に急轉直下變化した。それ故に前後甚だ矛盾してゐるやうな處が自分にも感じられた。けれども事實がそこであつたから仕方がなかつた。もしもそれを矛盾した作品として、否定し去るならば、自分は少なくとも自分の見た悠さんを否定し去らねばならない。しかし自分には其塵大膽なことが出来な

かつた。いかに矛盾してゐるやうとも空虚な處があらうとも誇張やロジカルに流れやうとも、それがもし自分の見た悠さんであるならば自分は作家として正直に表現したに過ぎないことであつて、悠さん自身が矛盾してゐることであり空虚であり誇張であり論理的である。自分は只それを正直に表現したに過ぎない表現せずには居られなかつた。なぜならば、藝術は人生の半影であると思ふから、藝術よりも人生の方が主であつたから。

「あの創作があれだけで終はつたなら、主人公はあまりに弱い人間を以つて始終してゐる。」  
悠さんはさう言つて苦笑した。

「えそれですから此度の御上京から僕は再びあの續篇を書きつゝ、あるのです。」  
「續篇を。」

悠さんは驚ろいて自分の顔を見た。聽て何にを感じられたのか急に曇つてゐた顔が晴々しい表情になつて語つた。

「續篇！ そいつはお面白い、それでは君と別れてから随分様々なことを私はして來た。創作の材料に聞いてもらはう。」

悠さんは、前置きをしてから語り出した。

自分は悠さんが奥さんと別れ東京を捨て、から波瀾曲折に富んだ、常底自分の夢にでも想像のつかない恐ろしい暗い方面を悠さんは随分なめて来た。自分は一種不可思議とでもいふ心持をもつて悠さんの顔を眺め乍ら聞いてゐた。それは實に自分の期待にはづれた物悟りであつた。

次ぎは悠さんの悟つた話である、自分は今そのまゝ此に書くことにする。

さあ……どこから語り出そうか？

君、君定めし私が二年間の長い月日を僧房の中で苦しんでゐたと思つてくれるだらうが、事實は、それに反してゐた。東京を捨てた當時は、君にも手紙で書いて送つたように、兎に角三ヶ月ばかりは、胸の痛を慰やうとして、雲水にも出たし、僧侶達と共に熱心に參禪もした。けれども半年と過ぐる頃になると、私は、常底孤獨生活に耐へられなくなつて、山を逃げ出したことがあつた。しかし、どこへ行つた處で、私は救はれなかつた。それ故、私は歸へるまいと斷念した。山へ再び又もどつたのであつた。それでもこの四ヶ月前頃から、少しは落着いて来たし。そうした

僧房生活にも耐へられるようになり。自分の生きてゆく路も幻けながら體得出来てからは、私は日々これ好日といつたように樂しめるようになったけれど、それまでの長い間の苦惱は……私は矢張り弱い人間だつたよ。

寺を出る時の動機は此處ことを云ふのは實に恥づかしいけれど、私は性慾に惱まされて、耐へられなかつた。その當時私は別れた妻に對しての愛着はどうかこうにか絶ち切れた。そして絶へず個人的な愛の問題は強めて超越しようと努力した。けれどもその半面に於いて、妻は今頃怎うしてゐるだらう、そして怎麼心持で別れたんだらう、そうした謎のやうな離別の原因を私はいろ／＼に想像して來ると、惱まされるのはいつも孤獨の寂寞に性慾であつた。

こうして悩み苦しみ乍らもそうした悩みは只私自身が知るのみであつて、別れた妻へは一向知られないと考へたらたまらなかつた。誠に愚烈極まる煩悶であつたけれど私にとつては事實であつたから仕方がなかつた。考へると人間なんていふものは、惱へないでよい事をあまりに多く悩み過ぎるものだといふ考へた。そののみならず、別れた妻はもう自分のことを忘れて了ひ、今頃どこの男と怎麼ことをしてゐるやらと連想してくると、自分獨りがこうして悩んでゐるのが自分自心の爲とはいへあまりにくだらない事であるといふ事に氣がついた。君、君！ 人間果た

して、世間とか自分以外の人間を對照にせず生きてゐる人が幾人あるだらう。皆自分自心の爲に自分生活を豊富ならしめるようにと努力しつゝあるのに、いつか人間は、世間とか、自分以外の人間の對照に左右されてゐるのを、淺ましい徒勞と知りつゝ、も仕方がない事實である。

死んだ夏目さんが、晩年に支那のある坊さんの例を引いて來て俺も五十になつたから、此から修養しやう、さうして大悟の境地に進まうと努力した。その坊さんに習つて、夏目さんも五十になつたから、さてこれから俺も本當のものを書かう、これからが俺の本當の活動だといはれたさうである。

それは夏目さんは平凡な人ではなかつたかも知れない。けれどもあの人が名もなく何等の創作もせず送られた人であつたならば、果たしてさうした偉大な言葉をはかれたかどうか、それは甚だ疑問だと思ふ。

話が随分横道に折れたが、人間はまつたく悲しみとか、苦しみ、楽しみ喜びを、自分自身で味つて他に更にもらさないのでゐられないが、如く人間は自分以外を對照にせず生きられないやうに思ふ。

私はいつも、それを切に思ふ自分自身のことをしたり考へたりしてゐる中に、いつか世間とか

自分以外な人間對照になつてゐるのを、どうすることも出来ない事實である。

## 二十五

それだから、私はあまり世のいふ處の大家なるものや、流行兒の作品には、どうも人間の苦惱なり悦樂なりがピッタリと來ない、といふのは、その作家自身が作そのものに成り切れずに世間がその作品の中へ流れ込むからである。

君、同じ孤獨にしても名ある世間から尊敬されてゐる哲學者が、ある絶海の孤島に孤獨な生活を送つてゐるよりも、世の中から理解されずに一生佗しく暮してゐる、市井の平凡人により一層私は悲痛な孤獨感を味ふ。

それだから、何と思つた處で、仕方がない、よわいよわい私はさうした感じを一層深くもつてゐた。自分のすることが世間で世間といふ言葉が廣いならば、少くも、私を知つてくれる人達だけには私のしてゐる事を知られたかつた。まことに愚かな話であつた。

けれども、さうした事が、一向別れた妻に對して、何の印象もあたへないといふ事に氣がつくと同時に、さうしたことの實に空しい徒勞であることに氣がついた。苦惱も思索も徹頭徹尾自己

の爲にしてこそ意味があるのである。私はそれを知つてゐたけれどもいつか自己の中の妻といふ對照が這入つて私自身を價値つけてゐることに氣がついた時、私は私自身に對して腹立たしかつた、けれども仕方がなかつた。その時一面に於いて猛烈な性慾の衝動に悩まされた私は一時は悟道も何にもかも捨て、凡の凡獸の獸淺ましい淺ましいどん底へ落ちて、苦が笑ひしなくなつたのだ。世間とか自分を知らぬ人を對照にして生きることの愚を今切實に實感した私は、今迄と全々正反對に極單な性格が猛火のように全身にみなぎつて來た。私は今でも思ひ出すと身の毛がふるひ立つ、實際顔から火が出る程恥かしいけれども事實であつた、人間としての私には自分の力でそれが怎うすることも出来なかつた。

ほんとうに君！あの頃の私は實に弱い人間であつたよ。

一種の捨鉢な心を持つて私は大坂へ旅立つたのである。元より金なぞ一文もなかつた。私の友人が旅費だけ貸してくれた、私は金をもつて大坂へ行くことにした。元より大坂には私の友人知人が二三人ゐた。

寺を出て了つた、その時の私の心の中に悟道も人生も社會も夫婦も何にもなかつた。思へば何んといふ淺薄な者であつたらう悟つて了つたとてこのまゝ、捨鉢な一生を送るとも自分勝手だ誰を

も對照にする何ものもないのだと考へたら只燃ゆるがような性慾が生む姪蕩な戀、そうしたものにのみ飢へて來た。友人の家を三四晩位ひづ、居候をして歩いた。

始まりの内は皆心よく宿めてくれたけれど、長くなると段々不愉快な心持が人の顔にもあらはれて來た。

「君はいつたい怎うして生活してゆくつもりなんだ努めるなら努めるで、よい所を探がしてやらう。」

そうした、友人の心切な言葉もその裏面に於ても不純な分子がひそんでゐた。私は早く怎うにかしなくてはならないと思つた。實生活に對して君も知つてゐる通り、何等の經驗をも持つてゐない、私はたちまち生活の安定を保つてくれた、寺を出たことに對して、後悔した。けれども當時の私にはそうした生活をその儘長く續けてゆくことは苦痛だつた。

何にかしたら食つてゆかれるだらうその内に、よい所が見つかるとだらう。その當時こゝも自分は墮落したものか自分自分であき果てる程、私の心の中から金と性慾の文字以外に何にも残らなかつた。ほんとうにあの時だけは君と別れた二年間の内の最も迷つた時代であつた。

私は二三の友人知人から少しづつ、金を借りて、まず下宿住ひをしてそれより務め先きを探そう

と考へた。

私の借りた下宿屋はそう下宿屋といへない程きたならしい貧民屈の住家でした。

その變り、随分私はつらい思ひをした。私の室はその家でも、一番最下等なのである、四疊半の室で便所の近くであつた。北向きに小さい窓が一つあつた。その窓も隣りの家の庭が見えておけないといふので板で幣つてある。只二三寸窓ぎわの高い處から空を眺めたり、桐の梢が見えたりするのみで、白晝の日光の光線が這入つたにとがなない。それに私の借りた時は夏の盛りであつた。薄暗い私の室の片隅には白晝でも蚊が盛にゐた。障子をしめると蒸し暑くて苦しい、そうかといつて障子を明けると便所から来る臭氣が胸苦しい程、不快だつた。

そうした獄中のような薄暗い室に私は辛捧しなければならなかつた。朝から晩までそうしてそこに私は何んにもすることがなく只性慾に飢へた獸ものように生きてゐた。

人間は何にをせずとも生きて行かれるが、又何にもせずには食へなかつた。私はたちまち金にこまつた、友人の所へそう度々も行かれなかつた。

仕方がなく下宿屋のお神さんがすゝめる儘に内職をやりだした。それは娘の髪に用ふる「竹長」といふ細長い紙を染めるのであつた。免に角私はそれを一生懸命でやつた。けれどもそうした仕

事はいつまでも續かなかつた。何んの爲に自分は此麼ことをしてゐるんだらう、自分は人間のどん底へ落ちようとして來て此れが果たして人間のどん底なんだろうか？

そんな風に考へだすと私はもう一生懸命になれなかつた。それ故私は朝の内五時間ばかり仕事をして後は今後の生活のことに對して迷つてゐた。

たへず性慾の衝動は、おしよせて來る一層のこと旅役者の群へでも飛びこもうか、藝人の仲へ這入つてまゝ、よ行ける處まで行つて、のたれ死しやうか……あ……今考へても淺ましくなるほんとうに西に向いても東を向いても暗黒冷たい壁があつた。

光明などといふものが夢にもおとづれて來なかつた。

その頃から私はお神に掛合つて二食にした。その變り宿料を安くしてもらつた。私は少しばかりの金が手に這入ると、安價なバーや居酒屋で恐怖な濁酒や、ウィスキーを呑み乍ら路傍に盛つてゐる犬のように私はよく南區の芝居裏の薄暗い格子戸のある家の奥座敷に〇〇婦を相手に、殘ましい享樂に耽けつてゐた。自分の姿をよく見出した時涙の出ない悲しみが一種の苦が笑ひに變じて氣味の惡い冷笑を洩らしてゐた。

其麼ような生活をしてゐた爲に、緩かな宿料も拂へなくなつた。間もなくもう三月目だつたね

私はその下宿屋を飛び出してからこまり方といったら當抵君の想像にも及ばないよ、毎晩停車場の待合室や公園のベンチで幾度私は夜を明かしたことだつたらう。

## 二十六

其塵ような、淺ましい生活を、續けてゐたので、私の友人が、世話をして木綿問屋へ、帳簿係りに、入れてくれた。さ……あ……これから、君にぜひ聞いてもらいたい話だ、私は今まで、かつて、味ふつたここのない、恐ろしい、心の嵐に、出逢つたのだ。」

悠さんは、そこまで語つて来て、しばらく、苦しそうな表情をして、俯向いてしまつた。私は、あきれて悠さんの顔を、見詰めてゐた。二年間、寺に修養してゐたこまゝばかり、思つてゐたら、その間に、寺を出て惱んだ、悠さんの姿が、いたいたしい程、私の胸を刺戟した。

「それは、怎う云ふ、話なんですか」

「此塵こまを、云つたら君は驚くよ」

悠さんは、自分の顔色を覗ひ乍ら、しばらく躊躇してゐたが聽がて、思ひ切つて語つた。

「野村君、私は、恥かしい人間だ、君恐ろしい人間だよ、私位ひ、罪深かい男はないよ、思ふ。ほんまうに私のやうな、人間は、神を慕ふて、行つて、悪魔に出逢つたのだね」

自分は、益々、はがゆくなつて来た。

「怎うしたのですか」

悠さんは、自分の熱心な顔に、思はず心苦しそうな表情が、あらわれたが、思ひ切つて語り出した。

「君、君…… 私は、〇〇をしたよ、そうして又〇〇をした。」

その時の、悠さんの顔は、別人のように、異様に興奮して、その臍から、たうたうと、涙が流れ出た。

「恐ろしい」

悠さんは、そう云つて、身慄ひした。

「君は、さぞ、驚ろいたろうね」

自分は、何んとも云われなかつた。さりきて、返事をしない譯にも、行かなかつた。

「いゝえ、驚きやしません」

「ほんごうに、君、驚かないで、くれ給い、そうして、私のした、罪惡が、決つして私自身の罪惡であるよ、思つてくれるな、人間は皆、そうした罪惡を持つてゐるのだ、君だつて、いつ、その

罪性が頭を上げるか、知れない。只修養とその人の境遇によつて、頭を上げずに終るよ、終らぬ、ただだ、そう思ふと私は、この頃、人殺しや、泥棒や、強姦を笑へなくなつた。あゝ恐ろしい」

悠さんは、そう云つて、その話を、うち切ろうと、するらしかつた。

「その話を、せひ、して下さい」

「小説の材料になるのかね」

「其れこそは、兎に角として」

「じゃ、語ろう………さあ……私の通つた店は、南區でも、有名な、木綿問屋だつたよ、名だけは、まあ！ゆるしてくれ。その頃、私は友人の家の二階を、間借りしてゐた。月に纒かの月給で、店へ通つてゐた。ほんごうに喰ふだけであつた。性慾の満足は、當底得られなかつた。日々の小使にも、こまつた。

灯ももし頃、空腹を、かゝへて自分の住家へ、歸つた處で、何一つ暖いものが、喰べられるでなし、女氣のない二階の一室に、こじこもつて、下の友人夫婦のむつまじい、語らいを聞いてゐることは、當時の私には、つらかつた。こじに、夫婦生活を四五年して来た私に取つて、様々な妄想を畫がいては、獨り冷たい床の中で睡むられぬ夜を、怎麼にもがき苦しんだこじであらう。

二三枚の着變すらも、いつの間にか質屋へ入れ、身にまつわる、もので、金になるものは、全て賣さばして、安價な、肉をむさほつてゐた。

けれども、いつまでも、金は續かなかつた。その時ふらふらと、罪性の心が芽生ひて来て、思はず、高價な、絹ものを、かゝへて、何度、日暮頃、店を、飛び出したころであらう、中途まで、飛び出してから、良心の苛責に惱まされて、又ふらふらと、引返そうとしたが、喰わんとする、慾求、絶ちがたい、性慾の衝動の前には、道徳も、社會も、神も佛も、影薄くなつて、只罪性が、眞赤に、全身に燃へてゐた。

又その頃であつた。私は知人があつた。その知人夫婦は、理解ない、爲に、夫婦仲は、實に悪るかつた。知人は五十近い好人物であつて、若かい妻君の我儘を、一切赦してゐた。その妻君は、三十二三であつた。四人の子の親として家の、主婦として、一生を終る可く、あまりに、自由な、放從な女であつた。私はその、妻君に、始まりの内は、非常に、親切にされた。私はそれを、單なる、夫の知人に對しての好感情として、受け、別に氣を、止めもしなかつた。

それが、ある時であつた。私が、相變らず、日暮頃、店を、閉まつて知人の家へ立寄つたのでした。私とその知人と談話中知人が便所へ立つた時、あわたとしく奥から妻君が出て来て私に手

紙を渡した。

「さうぞ主人にわからないように見て下さい」さう云つて急に顔を、赤めて去つた。……その手紙には

「今晚少し、貴男に、話がありますから、貴男の、お宅まで、参ります。在宅してゐて下さい」さ、それは妻君の手であつた。私はそれを見て様々な想像に耽けつた。何んの用事で、來るんだろう。私は一種の不安と恐怖にふるへながら、妻君の來るのを、二階で待つてゐた。

聴がて、一時間も、たつた頃であつた。一見するに、二十八九にも見えそなた若化粧をして、妻君は、貧しい、私の住ひを、訪ねてくれた。

「お上り下さい」さ、私は何度、云つても、あだかも、戀知りそめた、初心な、處女のように、妻君は、「厭です」問へた。私は仕方がなく、妻君のすゝめるまゝに、二人つれそうて、夜の街を歩むことにした。

「河野はん」

「何んです」

妻君は、何にかしら、云ひたい事があつて黙まつてゐるような、表情を、歳に似合わない、瞞



に、あふるゝばかりに、たゞよわせて、私の心を魁した。私は、もう、妻君のその表情をみて、何んの爲に、自分をつれ、出したのか、その意味が常々の自分に對する、妻君の行ひを、背影にして、一種の眩惑をたゞへて、水取紙のように、かわき切つてゐる、私の胸へ反射した。私は、驚ろいて、妻君の顔を見た。

妻君は、その時、何にを思つたのか、涙ぐんでいた。

「奥さん、お察しします」

私は、何んの爲に、其處こゝを云つたのか、今考へても、見當が、つかなくかつた。只そう云ふより外、その場合、言葉が出なかつた。ほんごうに、私は自分で自分が淺ましくなる程自分の心の一部に一種の色魔的感情の流れてゐたこゝに氣がついた。

「ほんまに貴男はん、同情しなはるゝさかい。あたひね、東京へ歸へりごうおますわ」

妻君は、其時、強く、私の手を握りしめた。

野村君……こゝだよ、君に聞いて、もういたいのは私は今、人妻に戀に落ちようとしてゐる。私のような、男は、もう、永久に女性を戀ふる資格が無いと、思つてゐた、この私が、しかも、人妻に、完全に、ある人の所有となつてゐる人妻……戀に落ちようとしてゐる。

その時……私は、ほんごう五年振りで、戀ひする心が、燃えて來た。その時の私は、罪惡であるとか知人にすまないとか云ふ、道義上の感情は、毛頭、浮かんで、來なかつた。たゞへ盲目であらうと、何んでもあらう。

戀ひする者の、幸福を、私は心ゆくまで味ひたかつた。同時に、私は、自分にも、戀をする力があつた事に氣がついた時、たまたまなく、嬉れしかつた。戀は罪惡であると云つた、私の理性も長い間の孤獨生活にすさんだ、私の感情には、何人の力をも、あたへなかつた。

妻君はね、戀に云ふものを、一生味わなかつたのだ、學校を、卒へるにすぐ、今の知人の處へ、東京から嫁に來た、その知人は、歳も十五も異ひ、趣味も、思想も、皆異つてゐた。營利一方の知人に比して、妻君は、熱心な、文學好きでゐる、結婚してから、もの十二年、彼の女は只、そうした夫に、盲目的に、使われて來た。けれども、彼の女には一日でも、燃ゆるよくな心から、夫に接したこゝが、無かつた云ふ。それ故彼の女はいつも、自分の爲に、定められた、室で、文學を讀み、耽けては、戀を、戀ひしてゐるに、過ぎない實に、不幸な結婚者の一人であつた。

妻君はよく

二十七

「あたひは、一寸云ふに、女中だすね、又酌婦だす、そないな、生活に、何度、あたひは脱け出ようと思ひました、その内にややこが、出来ましたよつて。河野はん、あたひは、こうして、一生終わつて、しまうんですやろうか、あたひには戀なんぞを、する権利が、おまへんだつしやうか、ほんまにあたひに、そんな権利がおましたら、あたひは何んでも、犠牲にして悔やましまへんわ。」

そう云つた時の妻君の瞳は、十七八の、うら若かい女性の持つ、貴い一種の眩惑があふれてゐた、

野村君！

戀ひする、ものに取つては、此が最も、眞摯な、そうして最後の戀であるに、思ふものゝ、醒めての後になつて、又再び、新な戀に出逢ふ、時、それ程愛ふるにたらない程純な感情が、燃へ

あがるものだ。

妻君は、私の思想に、趣味に共鳴してくれた。そうして、私の獨身生活に、形に於いては異なる、ものゝ、孤獨な、妻君は、こゝに則せずして戀が成立つたのだ、今まで、かつて味わつたことのない、濃厚な、中年の戀！

私は、ほんまに、自分乍、恥かしく、なる、純真な心持に歸つて、妻君のすゝめるまゝに、二人で東京へ、出ように、考へた。

「ね、あんたはんわな、あたひが、一度、人の妻になりました、やゝこまで、おすこを、貴男は、勘忍してくれはりまつしやろうか」

「其處こ、私は何んも、思ひません」

そう自分は、云ひ切つたものゝ、此の妻君が、人妻でなく、人の親でなく、處女であつたなら、そうして、現在自分の前に魂の一切をなけ出してゐる、そこまで考へて來たら、私は、傷つた、而かも、公然と抱くこゝの出來た、寶玉を、人知れず、樂んでゐるような、底暗ひ、もごかしさを感じた。

「ほんまに、氣に止めずについて下だはる、うれしい、その代り、あたひかて何にもかも捨てま

すによつて」

その、決心に満ちた、妻君の言葉を、聞いた時、私は一種の恐怖におそわれた。

「何故あんたはんそなひに、黙まつて、なはるの……厭なんだつか」

妻君の聲は、興奮して、その瞳には、狂的に近かい、情熱が燃えてゐた。私は暗い、道頓堀河岸の、人家のまばらな處を、妻君に、より添ふて俯向いて歩んだ。

「な……河野はん、そないにだまつて、いなはつては」情熱に燃へた、妻君の、熱い吐息が突然冷たい、私の頬にふれた。

「私は感謝してゐます」

そう云ふや、否や、私達は抱き合つて、接吻した。

「河野はん、たごへ人妻で、小供の親でおましても、まだ誰れにも、赦さない、魂を貴男はんに、さゝけまつすわ。あたひ始めて、生ねかわつたような氣がしましたわ」

妻君は、そう云つて、又逢ふ云つて、別れた。

野村君、私達は、知人に、かくれて、幾晩も、人知れず、いろいろな、所で、逢つては、不義な〇〇に耽けつてゐた。「不義な〇〇」この言葉は、何ん云ふ、不愉快な言葉であらう。

社會は、自分達のした行爲を、不道漢さ、のゝしるであらう。けれども、私と妻君とは、良心に向かつて、問ふ時に、不道徳漢さして、葬り去る、前に、實質に於いて、忠實な、奉仕者である、ここに氣がついた。

「人生とは、瞬間の〇〇の爲に、全身を捧げて、暴險することだ」

妻君は、よく、其處を云つて、苦しい吐息を洩らした。私は又「いま」でかつて、誰れにも、捧げなかつた、魂を貴男はんに、捧げます」云つた、その言葉が私をして、一層大膽な男にした。

野村君！

君も知つての通り、私は女の肉體ばかり、抱いて満足出来ない人間である、肉體を、抱くと同時に、心まで所有しなかつたら、満足出来ない、私は、その爲に、随分、別れた妻に對しても苦しんだ事を、君は知つてくれるだろうね、一緒になつてから、別れるまで、私はついに私の、別れた妻の、心を握るこゝが出来なかつた。而して今も尙謎である。厭なら厭でいゝ。確とした彼の女の心が、今も尙知りた。それ故、私にも、書き送つたように、女性のたつた一人を信じんじたかつた。心を所有して、見たかつた。そうして惱みに、苦しめられてゐる、私に、妻君の言葉

は、幾萬の黄金よりも、深遠な哲理よりも、貴かつた。私は安心して、而かも、大膽に、妻君を、東京へ出ようぞ、決心した。

あ……しかし、野村君、私は果たして、永久に、妻君の心を所有出来たであらうか？

私達の間、生まれだせない、戀は、又惨なく破り去られた。知人はついに、私達の仲を、感ずいて、非常に妻君を、苦しめた、けれども、知人の留守などを、見計らつて、以前にも、益して、二人の心は一緒に結びついた。私の、妻君を、戀ひする、心は、日に益し、深くなつてゆくに、比して、一方に於いて、そうした、妻君を持つた、知人の、やるせない、心持を、私は自分の過去の経験に照らして、人より一層深く氣の毒に思つた。

ほんまうに、他事でないように、私は知人の、苦しい心持を察した。けれども、肉體だけなら縛つて置けるけれど、心の世界は、縛られなかつた。怎麼、制裁をもつて、支配しようぞ、した處で、心の世界は、自由であつた。

私は、そうした事を、怎うすることも、出来ない。事實として、知人の苦しい心を、傍観してゐるより外に路がなかつた。私は知人の心を思ふぞ、いつも寂しくなつた、苦しく悩まされた。私は、生れて始めて、たつた一人の女を信んずるここの出来た、嬉びに、益して、心の空虚な

妻君をもつた知人の心を、氣の毒に思つた。けれども、そうは思ふものゝ、私は、私の一生に於いて、始めて、女を信じ得た、満足の前には、道徳も、社會も、何にも、なかつた。私は、自分で、不可思議に、思ふ程、以前の私の性格を裏切つて、戀の甘酒に酔をうこした。

野村君！ 私の心持が、よく解かつて、くれるだうね！

悠さんは、そう云つて、煙草に火をつけた。

## 二十八

「それから、怎うしました。」

「それからですか、知人に感づかれてより、私達は思ひ切つて、東京へ二人で、出ようぞ、相談が一決しました。それまでも、實は、何度も、二人で大阪を捨て、いづこかへ、出ようぞ考へたのですけれど、それが女だね、いつも、子供の愛に、引かされて、妻君の、そうした考へは、いつも迷つてゐた。子に對する愛を、捨て、戀に生くるか戀を思ひ止まつて、子の愛に安心立命するか、妻君の迎る路は、この二つであつた。妻君は、尤も、妻君自身の一生に取つて、危険な

分れ路に立つて、迷つてゐる處へ、知人に感づかれたので、彼の女の、神経は妙に、夫に反感をもち、ついに子供の、愛をふり捨て、二人で出る事にした。

そうだね、夏から、秋へ、かゝる、寂しい、晩であつたよ、私は、幾年振りで、そうした、夢のような儚いやるせない、而し楽しい、夢にしばらく、私は自分を忘れてゐた。私は、寂しく俯向いてゐる、妻君の手を取り乍ら、人目を、恐れて、梅田驛を立ち去る時の心持は、今でも、ありあり浮かんでくる。東京へ、出て、何れをする、其處考へは、二人は無かつた。少なくとも、私は考へてゐなかつた。さ云ふのは、長い間の、貧乏生活を送つて來た、私に取つては、人間は働いてさへるれば、喰へない、事はないさ云ふ、自信を、私は人生に對して持つてゐた。貧によつて、得て、私の只一つの、貴い得物は、たゞこの自信であつた。

野村君！　こんな事を云つたら、君は、あたりまへださ思ふかは知れないが、事實、思ふだけでは、駄目だ身自から、その境地に立つて、しみじみさ、體感した、自信は、當底理屈で、想像した、世界よりも、一層豊富であつたよ。

お互ひに、相當な、家に生れたものは、金にこまれば最後には、怎うにかなるだらう、さ云ふような、一味の光明をみこめて、苦勞するなら、その苦勞の中に、さここなく、期待があるけ。

れども、もう、さここへ行つた處で、金なき、くれたり、貸す處がない、又行く處がない、金は一文もない、西を向いても、東を向いても、冷たい壁さ、未來を、思ふても、暗黒である時に、始めて、人は、生活の不安さ云ふものを感ずるさうにかせねばならない期待など、何んにもない、働くさここ、それ自身より期待する可き、何もものないさ思つた時に人は、始めて、その不安から根本的に超脱出来るさ私は思ふ。その時、始めて、人間は自分に頼る。さうして自分で生くる。さうにか、さうにか、世の中は、うまくやつてゆける。

そこに始めて不安が、取り去られるよ、なまじ、他人や親を、頼にするさ、もしも、はづれた時には、さ云ふ不安が人間の心を、おびやかす。

野村君！

それだから、私は、そうした心持でゐた爲に、其處ここは平氣でゐた。妻君は私のものさここに眞摯な質に、なり安い、性格を、早くも知つて、信賴してゐた。一年位ひ、二人が遊んで喰へる金を妻君は持参してゐた。その内に、私も、何にかしたら、二人は、喰へない事はない、行かうさ云つたさうな。考へれば、極めて淺薄な心から、出たのであつた。

それから、私達は、森ヶ崎に、當分、世から遁くれて、暮さうさ考へて、海岸に近い處へ、下

宿をした。

私達は、朝から晩まで、何んにもせず、淺ましい、享樂に耽けつてゐた。しかし、そうした、生活がいつまで、私達を救ふであらう、そんな事は不可能である、豫期したように、お互いの間にはすぐ、單調な生活が生む物たりなさ、倦怠が、おしよせて來た。私も又、自分で、自分云ふ、人間の、あまりに、極單な、變り方に、驚いた。けれども、私は自分で、幸福だ、思つた。

燃ゆるが、よくな、中年女の戀は、冷たく、かわいてゐる、私の心を溶かすに、充分であつた私は、別れた妻に對する、古傷は、忘れることなく、忘れて、現在の享樂に酔つてゐた。

妻君は、決つして、子供のこみや、知人のこみを一言も口に、出さなかつた、口に出さないだけ、人知れず思つてゐるらしかつた。それが何故か知らないけれど、私には毛頭も嫉妬心か起こらず、むしろ不憫に思へて仕方がなかつた。

「奥さん、今頃、子供さんは、怎うして、ゐるでしょうね、御主人は、何んぞ思つてゐられるだらう」

私はよく、そう云つて、妻君を苦しめた事があつた。

「もう、其塵いなこみや、云ひなはるの、よしてくれやす」

妻君は、そう云ふや、否や、極度のヒステリー、が生む、興奮に、思わす、齒ぎしりを、しながら、私に飛びついて泣いた。

その嘆けきが、深かければ、深かいだけ、妻君の、子供に對する、熱着か、深く、妻君の心を刺した。

「もう、それじゃ、其塵こみや、云ふのよしましよ」

「ほんまに、そなひなこみや、云ひなはらなくも、思ひ出して、こまるさかい、よしておくれやす貴男はんに、云われるこ、一層切なう、おますわ」

私達は、そうした時は氣嫌を、なをして、横濱まで、行て芝居や、活動を見て暮らした。

處がある、日である、妻君の、従妹から、妻君宛に、手紙が來たのであつた。

その手紙に依るこ、知人は、始めの内は、非常に、立腹したが、例の好人物の、性として、それを又、赦してゐた。今に、あの女も、歸つてくるだらう、一時の、ヒステリーが、起こつたのだ、位ひに、思つてゐるこみや、小供達四人が、毎日母親のこみを心配して、泣いてゐるこ云ふこみや、知人が子供の偽を、思ふて、後妻をせずに、暮らしてゐるこみや、小僧や店員の前へ、

妻は病氣の爲に、一先づ國へ歸へしたと云つて、置いたことや、すべて、妻君をして、豫期してゐたこと、全々、反對な、結果が、妻君の心をたちまち動かした、自分の罪を、怒らすに、かへつて、憐んでられる、夫の心を、思ひ出した時に、たゞへ、厭々ながら結婚したことは云へ、そうして、理解なかつた、半生は云へ、十餘年間の同棲生活は、一朝にして、洗ひ落す可く、あまりに、深く妻君の心に、染みてゐた。

妻君は、心の中で、すまないこと、思つた。そう思ふと、妻君の、性質として、ゐても立つてもゐられない、苦しさ、おそわれて、發作的に、興奮して、無闇に酒を呑んで、苦しさを、忘れようとした。

あの、奥座敷で、夫が四人の子供を相手に、寂しく、獨酌をしてゐる姿が、幻の如く、浮かんでゐる、妻君は、自分で、自分の、今更に、罪深いことを感づるに同時に、自分の前に、惱ましい、顔をしてゐる、私を、怎麼に、心憎く、感じたであらう。

夜など、うなされて、寢言を、云つてゐる妻君の顔を、見詰めた、時、私は、一種の恐怖に、おそはれた。

これは、怒うしても、別れた方がいい、そうして

妻君を、再び大坂へ、歸へそう、そうしなければ、私は今に、この女から殺されはしまいか、と云つたような、不安が、たへず、私をおびやかした。

## 二十九

二人の心は、お互いに、結びつけようとした、けれども、妻君の心の中から、子供と云ふ情が、永久に、取り去れなかつた。その内に、妻君は自分との戀に對して、疑惑を持つて來た。その上、單調な、自分達の生活が、只でさへ、倦れ安い、二人の神経を、ひきく倦怠させた。私達は、このまゝ、こゝろした生活を長く續くことは、思へなかつた。

さうしても、早晚、別れなくては、ならない、と云ふことを、お互ひでは豫期してゐた、けれども、今更ら、乍ら、其處を、さちからからも云ひ出せない、立場でゐた。

私自心の心持は、もう、別れたかつた。そうして、あくまで戀愛生活の中から、人の心を所有したと云ふ、ことはもう、問題でなかつた。

只、魂の底へ、染みわたつてくる、倦怠も、憔悴は私の魂を、底の底から、腐らせて、ゆ

く、やるせなさを、しみじみ感じた。私は、再び、又、僧房が、戀ひしくなつた。當底、こうした、生活には、一日も苦痛に、なつて来た、と同時に、妻君も、そうした生活に、耐へられなくなつて来た。そうして、一日も早くも脱したいと、思ふものゝ、自分から、私を、つれ出したこと、が、さうしても、そうした言葉を、彼の女の口から、出せない立場にゐた。のみならず、別れて、見た處で、再び大阪へは歸へられないと、云ふ、心苦しい立場が、一層、不愉快さは思ひ乍らも、現在の生活を、續けてゆくより外、仕方がなかつた。二人の心の中には、期せずして、懺悔と哀恨と……戀愛生活の生味も苦痛もを、一時に併せて、味わつた。

處が、今そうした、従妹からの手紙によること、知人は、今に彼の女の歸阪を待つてゐること云ふような事が書いて、あつたので、彼の女は、益々、別れて、元々通り、大阪へ、歸へりたい心になつた。

その、手紙が来て、もの一週間も、たゝない内に、再び従妹から、妻君宛に、手紙が来た。それは、彼の女が尤も、愛した長女が、流産で、危篤であること、熱に、うなされて、彼の女は家を出た、母親をたへず、呼んでゐることや、今歸つて来て下されば、従妹が仲に立つて、再び家へ這入られることを書いて来た。

その手紙を見てから、妻君は、別れる、と云ひ出した。

「ほんまに、貴男はんにも、すまんすが、さないにしても、あたいは、子供が、可愛ふて、おまへんによつて、その上今、この手紙に、おますように、長女が危篤と云ふだすによつて、あたゐ歸へります。さうか、あたゐが、貴男はん、が嫌ひになつたでは、おまへんによつて、さうぞ、お怒らずに、これまでの、縁を、あきらめて、おくんははれ。」

妻君はそう云つて、涙ぐんだ。

私も尤より、別れたい、心持で、ゐたので、即座に承諾した。話がきまる同時に、私達は二ヶ月住ひ習れた森ヶ崎の下宿を立ち去ることにした。

二人は最後の別れに、小田原や箱根を、金のある限り旅をした。二人とも、よく、酒に酔つて「ほんまに、短かい、夢を見て來ましたね」

と云ひ會つて、寂しい微笑を洩らした。

私達は、別れようとしてゐるのだ、そうしてもう、永久に逢へない二人なんだ、そう思つて見て、も、いざ別れる、矢先になつて、お互いに、何んの熱着もなく、寂しい微笑を洩して、別れ得ることの出来る中年者の、戀の侘しさを、私は、端歌に、まぎらせて、寂しく味わつてゐた。



「戀は、つらいもので、おますの」

妻君は、水のやうな寂しい、微笑を洩らした。

「奥さんは、一生の内に、一度味いたいさ、云つたんですもの、さぞ御満足でしたらう」  
皮肉さも、捨ゼリフさも、つかない、こころを云つて、私は苦笑した。

「又、そないな事、いゝなはつて……しかし私一生、貴男はんさ、こんな楽しい、浮いた生活をしたこころは忘れや、しまへんわ」

妻君は、そう云つて、私の手を取つた。私は妻君のなすまゝに、まかせて、私は私のこころを考へてゐた。

「あたへは、もう、蟬のぬけ殻だつせ」

「そうでしようかね、しかし奥さんには、子供があるじやありませんか、そうして、心切な良人もあるし、生活には、こまらないし、其處愚痴を云つては、罰があたりますよ、」

私は、そう云つて、妻君の顔色を覗つた。

妻君は俯向いて、涙ぐんでゐた。

「いや、いや、そないな、こころ、云てなはるのあたいたくないに、苦しんでおますか、貴男はんは」

わかりますか」

「よく、わかつて、ゐます」

「あほらしい、わかつて、ゐまへんわ」

「わかつて、ゐればこそ、こうして、お互いに、氣まずい思ひをせず、別れられるんじやありませんか、わからなかつたら、私は別れやしませんよ」

私は、いくらか彼の女が、いじらしくなつて来て多少の熱着心が、俯向き勝ちな、彼の女の襟元を見詰めてゐるさ、浮かんで来て、彼の女の手を、掴く握りしめた。

「そうだつか、あたへだつて、子供さへ、おまへんければ、大阪へ、なんぞ、歸へりやしません、さうか、敵しておくれやす。親子の愛で、河野はん、仲々、たち切れないもんで、おますの」  
「そうですかね」

私は、何氣なく、妻君の、言葉を、聞いて、ゐたが、「親子の愛」そうした、言葉が、今更に、何にか戀愛以上に、大きな力があつて、人の心を動かさしつゝあるさ云ふ、大きな、事實を見せつけられたのだ。

野村君！ 妻君は、慥かに、子の愛にの引かれて、別れたのだ、お互いに、子供を持つて見な

い君さ僕さは、そうした、経験は、知らないけれき、餘程深かいものさ、私は、しみじみ傍觀した。

静岡の驛で、私達は、西へ、東へ、別れた。

下りの列車が五分先きに、立つた。

私は妻君が、瞳を眞赤に、はらして、最後に私の顔を見ずに、俯向いて、ゐた、あの、憔悴した、人妻の佛は、あ……今でも、あり、ありさして浮かんてくるよ。

妻君を、乗せた列車が、發車してから、間もなくであつた。私は、上りの列車の片隅に、自分の淺ましい姿を、見出し時に、何んさも、名狀しがたい、やるせなさか、喰入るように、全身に、押し寄せて來た。これから又あの僧房へ歸へるのだ、今までのような、濃艶な、さうして華やかな、肉の世界に耽溺しきつてゐた、私の心には、僧房生活の、あの枯淡さ、靜寂さに果して耐へられるだらうか、私は、そうした不安を抱いて又再び鎌倉の寺へ歸つたのである、思へば、大阪へ立つてより、四五ヶ月間を私は只淺ましい、夢を見て來た。

野村君！

私の話さ云ふのは、これだけである、實に、恥かしい話であるけれき、私に取つては事實であつた。いや、私はこれを、私自身の體感さしたくない、これを廣く、人生さして、考へたいのだ、私自身の事實は、取りもなをさず、人生さしての、事實であるからね、君！

實際、君だつて、さうだよ、いたずらに、私自身の淺ましさを、思つてくれるな、境遇が、私のやうな、立場に、させたなら、君だつて、辿らないさも限らないから考へれば君さ別れてから二年間の間に、その時が一番、私の迷つた時であり、墮落した時であつた。矢張り人間は迷わなくて駄目だ、墮落しなかつたら浮び上がらない、私はその爲に、非常に前よりも、一層生命に對して眞摯になつたよ。

私は、ほんさうに、妻さ別れてから、無の中に住もうさした。悟り切ろうさした。けれきも、既成の宗教が教へる、處の悟りださか、無ださか、云ふ世界に、私は、怎うしても這入れなかつた。這入つた處で、私には、永久に耐へられなかつた。人間味を、人より以上持つてゐる、私は、人間さしての持つ性慾を怎うしも、絶ち切れなかつた。その上、前にも、君に語つた通り、さう

にかして、女性と云ふものゝ一人を信じて見たかつた。それを信づるまでは、私は人生を信じないことである。

私は、その一人を、人妻に見出した。そうして、その點は、安心した。けれども、それは、一睡の夢として葬り去られた。人の心を所有しようとすることの愚かな願ひであり、空しい従勞があることは、私は心の底から洗禮されて來た。

これが、私には、貴い經驗で、あつた。同時に、愛することは、信んずるに似て歸着する。私は思ふ。言葉を、變へたならば、他人が、怎麼心を持とうが、持つまいが、愛する心に、變りがない。云ふことだ、自分は只、愛すれば、それでよいのだ、それは信仰である。

信仰には、報酬がない、愛するが故に、それ相當に他人から愛されたいと云ふ、報酬のある愛は、それは眞の愛ではなくして、又愛の境地から、遠い私利我慾である、其愛からは、眞の意味の愛が湧かない、只嫉妬と苦惱ばかりで、あつて、人間は、終生救われないと思ふ。

私達は、只、愛すれば、それでよいのだ、愛の使命はそれにて、たれると思ふ。愛と云ふことは愛すること、それ自身が、大きな喜びであり、目的であると思ふ、その愛は絶対である。野村君、今度こそは、それをしむじみ、實感したよ。疑惑を、持出したら限りがない。只愛す

ばよいのだ、そこに愛が生める、幸福がわくよ」

まつたく、私は人妻と〇〇してゐた間、私は一時も妻君を信じてゐた。私の愛の中には、嫉妬と云ふ、不純な分子が、少しもなかつた。私はその點を、幸福と思つた。急に子供の愛に、引かれて、歸つた妻君の心變りを始めて、知つた時、妻君は私よりも、子供の愛を、強く味わつて、ゐた。云ふことを、後で氣がついたものゝ、その當時は、私は知らずゐた、そうして、それを疑わずに信じてゐた。云い變へれば、愛するが故に、愛してゐるに過ぎなかつた。

考へて見れば、野村君、人の心なぞと云ふものは、そうたやすく、完全に、所有出来るものじやない、いや私は絶対に不可能で、あると思ふよ、それは、少しの間は所有出来るかは知れないけれど、永久に、人の心を我ものに、しようとすることは、空しい従勞なんだ、お互いに、自分の心すらも、信んじられない、じやない、か、のみならず、自分の心すらも、しつかり、所有してゐる者が、此の世の中に、幾人あるだろう。

私はそう思ふよ、心細くなるよ、自分の心すらも、信じたり、所有することの出来ない、人間が、怎うして他人の心を信じ所有することが出来るものか……

それだから、もう信するだの、疑ふだの、所有だの、と云ふ、ことは問題じやないんだね、愛

するが故に愛するで、いゝんだね

それだから、君……人間なんて云ふものは、悲劇を起こさずに、すむものを、勝手に起こして、苦しんでゐるものださ、つくづく思ふ。ほんごうに、妻なら妻を愛するさ思つたら、愛するさ、それ自身で、いゝではない、此處ように考へるまでは、私は今云つたような淺ましい、生活を長く送つて來たお蔭でした。」

悠さんは、そう云つて、惱ましい、吐息を洩らした。

私は、黙まつて、悠さんの語るさことを、聞いてゐるが、何かしら淺ましい、しかも、大きな、否定し去るさことの出來ない、事實を、正直に、そうして、大膽に、語られた時、私は、戦慄に近い、恐怖さへ、感じた。

けれど、最後に、悠さんが、愛するさことは、愛するさ、それ自身であつて、決して、報酬を、宛にせざるさことであさ云つてゐられるな、なぜ、悠さんは、再び、又、奥さんさ、元々通りになられないんだらう。

自分は、たゞちに、悠さんの言葉を、もつて、悠さん、自身の生活にまで、立入つたならば、そうして、奥さんさ悠さんさこの、元々通りになる話にまで、考へ入つたならば、そこに、怎うし

でも、自分の胸に、落ちない、矛盾を感じた。悠さんは、それ程、愛さ云ふさことを、知つてゐられたなら、奥さんを妻にして、只愛したなら、それでよいでは、ないのだらうか、奥さんが、果たして、怎麼、考へを持つてゐられるかは、悠さんに取つて少なくとも、そうした事は、問題でないはずだ。

今悠さんの語つた言葉を通じて、思ふならば、

自分は、そう思つたら、もう一度さ、元々通り、一緒になるさ、云ふさことは、云わずにくれさ云われたさことを思ひ出した、けれど、そうした、悠さん自身の言葉さ、行ひの間に、少なからざる矛盾を、見出したので、自分は、思ひ切つて、問ふさことにした。

「悠さん、わかりました、それでは、僕は今一度、貴男に、お聞き、したい事があるのです」  
自分は、そう云つて、暗い悠さんに視線をむけた。

「何んです」

「別では、ありませんが、悠さんが、もう、その問題は二度さ、もう語つてくれるなさ云われたんですが、今のお話の中に、僕に合點のゆかない、處があるもんですから」

「それは何んです」

「實は、今も、おつしやつた通り、その愛の問題です。悠さんは、愛することは、愛すること、それ自身が愛の意味で、あること、おつしやりましたね、そうして、報酬のある、愛は、我利我慾であつて、眞の愛は、愛するが故に愛するで、たれりとするならば、私は、貴男が、別れた、奥さんを、愛してゐらつしやる、ならば、たごへ、奥さんが、怎麼、お考へを持つて、ゐられようとも、其處ごは、貴男、自身に取つて、問題じやないごに、なりはしませんでしようか！

## 三十一

自分の問ひに、悠さんは、しばらく、當惑したような、顔をして俯向いてゐるが、聽がて、苦しそうに語つた。

「さあ……………君に、そう云われるご、私は實際、心苦しいのだ、自分で、自分の感情が判断出来ない、程別れた妻に接する時は、私は、自分の心に、より多くの矛盾した、性を見出すのです。

君にそう、云われるまでもなく、私は、自分で、自分の心の、弱さを、つくづく、哀想を、盡

かして、ゐます、けれども、いつまでも弱かないつもりだ、そのごは、君に誓つてもいい、今でも、實は大丈夫のような、自信はある、しかし、まだくらくら不安もある、

相對の世界から、妻を、愛そうごすれば、怎うしても、妻の心を所有しなくては、満足出来ない、安心して愛されない、ご思つてゐる私には、ごこまで行つても、妻の心を所有し、信づることの出来ないごを、知つた私は、せめては、絕對の世界から、妻を、愛そうごした。

いや現に、私は今絕對な境地から彼の女を愛してゐる、私には、今毛頭も彼の女に對しての恨みはないのみならず、今の私の心の中には、彼の女に對して毛頭の所有慾は、ごもなふ、嫉妬や疑惑も、勿論ないけれど、その世界は、あまりに、寂しい、しかし自分は今その寂しさに生きてゐる又愛するが故に、愛する、それ自身に、成切つて、こそ、始めて、人は、眞に、愛の意味を貫徹することになるごは、自分でも、知つてゐる、しかし、君、なぜか、私は別れた、妻ご元々通り一緒にならうごするならば、そうしたごは、何んの力もなくなつて、私の感情は心までも所有しなかつたら堪へられなくなるのだらう、人間的ごでも云ふんだらうか、つくづく自分で自分の弱きに哀想をつかず、それ故に自分は怎麼に寂しくごも絕對な境地にゐる彼の女に接してゐたいよ。

野村君！

君に、云われるまでもなく、妻が、怎麼心でゐようか、其處こゝは、問題でなく、愛するが故に愛するこゝして、私は妻を、愛したいよ、たゞへ相對的な、つまり云へば、元々通りになつたこゝしても、絕對の境地から、妻を愛したいよ、それが、それが、この私に出來たなら、私は今でも、元々通り、夫婦になる、けれごも、それは、私のやうな、下根な、人間には、仲々、難事だ」

悠さんは、そう云つて、苦笑を洩らした。

自分は、そうした、悠さんの言葉の裏面に、流れてゐる、愛さんこゝして、愛し得ざる人間らしき心の苦惱が、生々しさが、今自分の力でも、悠さん、自身の力でも、怎うすることも、出來ない云ふこゝを、見出した時、自分は一切は、もう運命こゝ、時の流れこゝによつて、解決するより外に路がないこゝ、思つた。

「それにしても、悠さん、元々通り、御一緒に、なるこゝは、第一妻が不幸ですこゝ、云われたがそれは、怎うしてよしようか」

自分の問ひに、悠さんの妻は、異様に、曇つて來た。

「わかつて、ゐるじゃないかね、そうした心持の夫を持つ妻は、不幸ですよ、のみならず、妻が

もし、私に結婚するこゝが、妻に取つて、不幸であるこゝがあるよ」

それは、怎う云ふ意味でしようか」

「それはね、もし、妻なら、妻に、戀人があるこゝするならば、妻は、その人こゝ一緒になりたいとする、その時に、妻は私に結婚するこゝが、君、君は幸福こゝ思ふかね。

それは妻は、妻の愛人こゝ、一緒になるこゝが、眞當だこゝ思ふ。そうでないなら、妻は一生不幸であり、自分自心を憐るこゝだ、私は、そうした妻こゝ、元々通り一緒になるこゝは、私自身は、兎に角こゝして、妻の一生は無意味だこゝ思ふ。」

悠さんは、そう云つて、嘆息した。

「奥さんは、其處方では、ないこゝ思ひますよ、もしも、愛人が、あるならば、もう御病氣だつてよいのですもの、こゝに、結婚なさつて、ゐますよ、それを、生涯獨身で、身を立てようこゝなさるんです、ものその裏面には、きつこゝ悠さんに、對して、貞操を捧げてゐられるんでしよう」

自分は、少なくとも、そう信じて、ゐるので自分は、そう云つた。

「そうだね、私もそう思ひたいよ、そう信じたたいよ……しかし、こゝしても、そう思へないそう信んじられない……女は、つまり強いようで、割合に、弱いものだ、自己を憐るこゝを

平氣でしてゐるそこに女の罪深かい處がある。君は、君は女の言葉や、涙を信じてゐるかね、女はね、妙な處へ大膽なこころをするものだ、かりに云つたならば、自己の一生を犠牲にしても、平氣で虚偽をおしこすこころがある。女は、それで満足するだらうが、少くも、私のやうな人間はそうしたこころには堪へられないよ、しかし今にね君、私は其處こころは、さうでもないよ、思ふ時が來たら、きつこ來ると思ふ、來なくては、私の一生は惱死だ、きつこ來る、來させて見せる、その時、その時、妻がもし私を元々通りに、なるこ云ふならば、たごへ、それが虚偽であらうこ眞實であらうこ、そうしたこころによつて、妻が幸福になり得るならば、私は誰れが何んこ、云をうこも、さうして、誰れが反對しようこも、私は、私自身の思つたこころに、忠實に實行するからね、その問題は、野村君、後生だ云わずに、くれ給い。

「さうですか、それじゃ、よしませう、僕はその日の早く來るこころを、悠さん自身の爲のみならず、病身な、奥さんの爲に、祈つてゐます。實際可愛想な方ですよ」

自分は、さう云つて、話を打切つた。

いつの間にか、薄夕暗が、障子の外に、せまつて、机の上の、マダランプに、電燈がこもつて室内を薄青くした。

「もう、こんなになるんで、しようか、随分、話込んでしまつた」

自分は、さう云つて、立ち上がつて、障子を明けた。戸外には、灯がこもつて、人通が、せわしく聞えた。人家の相間から、遠く見える、向島が、薄夕暗の中に、幻けに浮んで、都會の黄昏は、生活の倦怠した、空氣と一緒に、あわただしく深く暮れて來た。

自分は、もう、悠さんこ、語つてゐるこ、何にが、何んだか、さつぱりわけがわからなくなつて來た。要するに、人間こ云ふものは、こつした、わけの、わからない、こころを勝手に、考へたり、悩んだりして、わけのわからない、内に、わけが、わかつたよなこころを云つて、死んで、行つて了ふ、のじやなからうか！

さう思つて、自分は、土塀の外の、往來の人通りを眺めてゐた。悠さんの考へてゐるよな、こころを、全く、正反對な、こころを考へしかも安心して、生きてゐる人間が、なぜか、急に、懐かしくなつて來た。

自働車が、騒々しい、音を立て、通り過ぎるこ、子供や、若かい青年達が、お面白、おかしく語り乍ら通り過ぎた。

自分は又、再び、悠さんの、大阪行きを、考へるこ、自分の傍に、世の中を捨てたよな、顔

をして、超然としてゐる悠さんが、一種の謎のかたまりのやうに思われた、と同時に、それが矢張り、眞當の人間なんだ、人間らしい、悠さんなんだ、自分は、そうしたことを肯定したり、苦笑したり、して、ひそり物思ひに、耽けつてゐた。

「ぶらぶら外を歩るいて、見ましようか」

悠さんは、そう云つて、縁側に立つてゐる、自分をすゝめた、

「そうですね、歩るいて、見ましよう」

自分達は、夕餐を、外で取ることにして、寺を出た。

## 三十二

薄暗い、室に、こじ込もつてゐた、自分達は、戸外の空気が、急に懐かしく肌にあふれた。

人家の灯が、涙ぐんでゐるやうに、しつこりこ、灯つて、河面を渡つてくる、肌寒い、風に、思わず、二人は、二重廻の襟を立てた。

「夏の海岸は、涼しくて、いゝが、冬は御免だね」

「そうですね、しかし、矢張り、大河端に住んでゐるこ、いかにも都會に住んでゐるらしい、気がしますね」

二人は、又例の、氣分の話になつた。

「さうも、私達の、生活からは氣分を取り去ることは出来ないね、ある時などは、その氣分本意で、生きてゐる事がある、理性では肯定出来ても、氣分で、否定する場合は、怎うも、あつて、私はこまる」

悠さんは、そんな事を云ひ乍ら、格子戸の、はまつた家から、三味線の爪弾きが、聞えるこ、立ち止まつて、聞き惚れてゐた。

—— さあさ、何んでも、よいわいなあ ——

「君、君。いゝねえー あの文句は、私はあれを聞くこ、世の中を、あきらめた、江戸人の、淡い哀愁が、人懐かしく、浮んでくるね」

その點に、なつたら、生粋な、江戸兒に生れた、自分は、悠さんに、敗けず、話せた。

「ほんさうに、そうですね、世の中は、何んこ思つた處で、なるやうにしか、ならないこ、あきらめて、人間に、愛想を盡かしてゐる、人達の心やりが、江戸の唄には、よく出てゐますね。何



んご、思つた處で仕方がない、生きてゐるから、生きてゐる、考へて見れば、何一つ心を引くものもなく、苦勞づくしの、世の中を冷笑しながら、さりきて、人間に癡業も、出來ず、寂しい、愛着に、すがつて、佯しく生きてゆく、世間ご、人間………ほんごうに、こつした露地を歩んでゐるご、たまらなく、懐かしく思われますね。何んだ、かんだご云つた處で、これが人生なんだ、ご僕は時に思ふごことがありますよ」

「そりや、そうだね、そうした、人達の日常の、會話に随分、意味深かい、ごがあるわ」

「ほんごうですよ、露地の奥に、住んでゐる、お神さんや、お妾さん、髮結さん、あるいは、女義太夫、後家さん、なんぞの、茶のみ話に、時に、大學の、しかつめらしい、講義よりも、深かい、人間味に、富んだ、言葉を時々、僕は、聞かされるごがありますよ。」

「死んで、了へば、それつきりじやないの」ごか

「ほんごうに、苦勞したわね」ごか

「人間は、何よりも、あきらめが、肝心ね」ごか、云ふありふれた、言葉の中に、いかに、あせても、怎うするごも出來ない、人生に、しかも、寂しい、愛着ご一味の温情ごをたゝへて、

「あきらめ」ご云ふ、安心立命の、宗教を持つて、ゐる、人間の生活も、矢張り一面の眞理だね」

「それは、そうだ、その點に、於いて、私は、寄席など、永久に、亡ろほしたくないね」

「ほんごうですよ、あの、くつろいだ、空氣は、當低、帝劇や、オペラ劇で味ふごの出來ない、いゝものですね、あわただしい、日常生活の、軽い疲れご、生活の單調から、くる、わびしさごを、昔の人達は錢湯の歸へりか、なごに、手拭を、ぶらさけた儘、立ちよつて、せめては、一時期たりごも、そうした、くつろいだ、席で世の中を、馬鹿にした、話家の、苦笑ひに、自分の生活の、寂しさを、まぎらして、ゐたんですね、それを今は、段々、進化ご云ふをうか進歩ご云をうか、そうした、無粋なものが、くつろいだ、寄席まで、しみ込んで來るんだから、たまらないです、ね、そうして、寄席の持つ、貴い、持長を、日に益し、目茶苦茶に、破られて、ゆくんだからね」

「自分は、つくづく、今の、寄席なるものが、亡びてゆくのを、おしむ一人であつた。」

「それは、そうごして、ほんごうに、人さんのようなあうした、しんみりした話家が、今の世に今少しあつてもいゝね」

「そうですね………悠さん、今度また、聞きよに、行きましようか」

「えゝ、さうぞ」

「悠さんは、そう云つて微笑した。

二人の間に、しばらく、沈黙が、續いた。せわしく働いてゐる、往來を、閑談、漫歩してゐる、二人の姿が、妙に、皮肉に、思われて、ならなかつた。

「しかし、野村君、これ程、氣分を、慕つて、ゐながらも、矢張り、それだけでは、満足出来な  
いんだね、私達はそれに、苦しみがあると共に、又よい處があるんだね」

悠さんは、何にを考へてゐられたのか、吾妻橋の、角まで來た時、突然口を開らいた。

「それは、そうですね、智情意が満足しなくては、矢張り耐へられんぞ、見えますね」

自分は、そうはいつた、ものゝ、今更乍ら、悠さん云ふ、人の人格の矛盾したことを、感ん  
ぜずには、居られなかつた。深刻な、思想家であり、熱烈な、參禪者であり乍ら、又、一面に、  
そうした、傳ない、情緒の世界を心のくまで、慕つてゐる、極單な兩面を持つてゐる、悠さん自  
身の、生活の、矛盾を、肯定する前に、その生活の内容の、豊富を羨やましく感じた。

二人の足は向島へ向かつた。

いかにも、下町らしい、黒襟の着物に、銀杏返しに、云つた娘さん達や、前垂を掛けた、世話  
女房に、云つたような、商家の、お神さんらしい、姿に、出逢ふと期せずして、二人の視線は女

の姿に、そゝいだ

「悠さん…… 矢張り、男の瞳には、女は美しく見えますね。これは、どこまで行つたつて、捨  
て去るここの、出来ない、事實だと思ふ、云ひ變へれば、世の中は、男と女の生活だと思つ  
て、いゝ位いだね、かりに、この世の中から、女を云ふものを取り去つたら、男の世界に、果た  
して、何が残るだらうか、心細いね。」

自分はそう云つて、悠さんをかへり見た。

「實際だよ、君、昔の禪坊主に、こゝう云ふ僧がゐた。京の五條の橋の上に立つて、道ゆく、美人  
を、見て、枯木のやうな、氣がしたさうである、私はそう云ふ、悟りなるものに、感心しないよ  
それよりも、美しいものは、美しいと、感んずる方が、事實なんだ、全て如々だ只因われさへし  
なければ、それでよいのだ」

悠さんは、そう云つて、しばらく、通過する、幾多の女の後姿を見送つてゐたが

美人だね……しかし君、あの女達は、皆私の所有だよ、ね君、あそこへ、行く女も、あの  
女も、皆私の所有だ、妻だ」

悠さんは、始めて、快活な微笑を洩らした。

自分は、妙なこゝを云ふ、悠さんだこゝ、再び思つた。  
 そうして、「語つて見れば、河は河にして、河にあらず」云われた、變んな文句を思い出した。  
 しかし、その内容を聞いて見る氣にも、なれなかつた。

## 三十三

「和尚、悟つて、俗人に、かへる」昔の、偉僧は、うまい事を云つた、ものだな」  
 悠さんは、ひそり言を云ひ乍ら、下腹に力を入れて、悠々こゝ、歩んでゐた。

「向島へ、行つた處で、何んにも、ありませんから、公園の方へ出ましよう」  
 自分達は、又元、來た道を引返へした。そうして雑踏してゐる、公園の、人波を分けて、歩んだ。

「淺草はいゝ、さうも、私は東京に、住むなら、淺草を離れて、生きられない程、淺草の、空氣は、私に合ふ」

「しかし、あまり、俗悪じやありませんか、そこが又僕達には、いゝ處かも知れないですね、ほんまに、僕は、自分の生れた、處は、云ひ乍ら、こゝへ來るこゝ人生の縮圖を見るような、氣がしますよ」

自分は、實際、そう思つた。淺草に、生れて、淺草に養つた、自分には、他に住むこゝ、いつも、物たりない、寂しさを、味つた。それ程、淺草の、空氣は、自分の心に、しみ込んでゐた。築地や、濱町、人形町、云ふ、粹な町は、さうも、自分には、あまりに、小粋な、若かい女に接するよゝな、すつきりした情味があるが、中年の女の、あくさいの中に、一味の哀愁でも云つたよゝな、氣分の流れてゐる、淺草の、空氣程、心引かれなくなつた。ましてや、山の手の、空氣は、ハイカラな、お嬢さんや、高慢らしい、奥さんに接するよゝな、きざな、氣分があつて、怎うしても、自分には親めなかつた。それ程、自分自身の生活からも、若々しさが、無くなつたのかも知れない。

「君！ 決つして、俗悪じやないよ、俗悪の中に、他に見出し得ない、貴いものが、ひそんでゐるからな」

二人は、空腹を感じたので、チンヤパーで夕餐をすました。

悠さんは、もう歸へるこゝ云つた。自分も又、歸へりたくなつたので、駒形河岸を歩いて、停留

場で、別れた。悠さんは、又、元来た路を引返へした。

冷たい月が、河に寫つてゐた。美しい感じを通り越し底寒い、冷氣を覺えた。

自分は又、電車の中で、悠さんのことを思つた。

何んぞ、云つた處で、悠さんは、悩んだ人だな、大阪行きなど、自分は夢にも、想像のつかなくつたことであつた。

けれども、そうした、幾多の、悩みの境地を、通り越して、始めて、今日の人間らしく、弱い乍らも、あの偉大な、そうして、働かない、信念が、燃えあがつたのだと思ふに、自分は、今までの、悠さんの通つて来た、半生を、背影にして、今後の悠さんの活動が、いろ／＼の意味に於いて、期待された。

自分の見た、處の悠さんの、悟り、なるものは。決して、昔の禪僧の云つたような、古木寒水の人間味から、遠ざかる、悟りでなく、より一層人間味を、豊富にして、全て、如々として、悟つてのこうにする。悠さんの、悟道感！ それは悠さん、自身のものにせよ、自分達には、相當に、共鳴出来た。

自分はふと、西哲の云つた、言葉を、思ひ出した。

「尤も、偉大な人間は、神性も、悪魔も、兩方持つてゐる人間だ」と云つたが、自分は、つくづく、首肯できた。

午後八時、一寸も、過ぎた頃、自分は、築地の家へ歸つた。

玄關に、見習れない、女の下駄があつた。

「あなたです、お客さんは」

自分はお神さんに、たづねた。

「先日、いらしやつた、奥さんです」

「あ……………そうですか、もう長く、ゐられるんですか」

「午後ゐらつしやいました」

二階は、森として、話聲ひびく、聞えなかつた。

自分は、急いで、二階へ、上がろうとするに、奥さんが、降りて来た。

「おや、お歸へり、なんですか、いゝじやありませんか。僕が、歸つて来たつて」

自分は、そう云つて、奥さんを止めた。

「いゝよ、野村さん、お留守に伺つて、長く、お邪魔しました。私、午後から、來てゐるのよ」

奥さんは、そう云つて、又上がった。

「まゝ、いゝじやありませんか」

「いゝゑ、又母が、心配して、おりますから」

怎うしても、奥さんは、歸へるゝ云つた。

「そうですか、それじや、また出直をして、来て下さい。」

「え、有難うございます。」

奥さんを、送り出してから、自分は、喰ひ散らかしの、壽司を、つまみ乍ら、臍を眞赤に、はらした、妻の顔を、眺めてゐた。

「私、ほんごうに、泣いちやつたわ、悠さんの、お奥さんは、可愛想な方ね」

妻は、そう云つて、心から、奥さんに、同情してゐるらしかつた。自分は、早く、妻から、奥さんの心を聞きたかつた。

「ごうして、早く、話を聞かせて、くれ。」

自分は、そう云つて、妻をせかせかせたけれども、まづ第一に、悠さんを、奥さんは、捨てたのだろうか、それが早く聞きたかつた。

「あああ……私、あんな可愛想な話、聞いたことないわ」

妻の臍にはもう、涙が、にじんでゐた。自分は、急に腹立たしくなつて来た

「莫迦、そんな事、云つたつて、わからんじや、ないか、早く、話してくれ」

「え、今お話しするわ、奥さんはね、悠さんを、捨てたんじやないのよ、誰れだつて、あんな境遇になれば、別れるのが、あたりまへよ」

妻は、そう云ひ乍ら、やがて、奥さん自身の告白を語り出した、自分は一言一句を聞き説がすまいとした。

### 三十四

悠さんが、商人の家に生れ乍ら、生れるより、商人としての素質が毛頭もなく、たへず、藝術家になろうとした、志を持つてゐられたこと、日々の悩みが、たへず、人生問題であつたこと、藝術家としての悠さん。思想家としての悠さんの、未來を、いつも悠さんの、境遇は、それを、邪魔してゐた、そうです。悠さんは、そうした境遇の、葛藤に、ある時は、自暴自棄に、流れ

たり、嘲笑的になつたり、惱死せんばかり、戦つたり、狂ふかき、思ふ程、絶望したりする中に、しかも尙、屈せず、いつかは、のびんこする。悠さん自身の、貴い、芽を、悠さんは、いつも捨てなかつたそうです。いや捨てようとしても、捨て去るここの出来ない、程、悠さんは、悠さん自身に、忠實であつたそうで、ある、

そうした、悩みや、寂しさに、始めて、氣がつき、そうして、心より理解し、愛して上げたのは、奥さんであつた。云ひかへれば、幾度、絶望の淵に、落ちんこした、悠さんを、たへず、力づけ、はけましたのは、奥さんであつた、そうです、

奥さんは、その頃、自分の一生を犠牲にしても、かまはないから、悠さん、自身を成長させた  
いと思つたそうです。

そうした、理解が、生める戀愛に、お二人は、因襲的な道德や、世間の嘲笑を一笑の裏に、葬り去つて、いさぎよく、結婚なさつたそうです。

實に、その時の、強い、強い、奥さんの心持、それが、今日まで、續いたなら、果たして、此  
麼、悲劇が、起こらなかつたかも、知れない、矢張り、奥さんは、弱い、女でしたの、御自分でも、  
そう云つて、ゐらつしやつたわ

「河野は、いつも、強く生う 俺は、世間の云ふここのや兩親の云ふここのを、はいはいこ、云つて  
心よく聞いてゐる男だつたら、お前こは、俺は結婚しなかつたぞ」

そうした、言葉の、中には、悠さん、自身の、力強い自己が、火のように燃えてゐた。

奥さんは、いつも、そうした言葉に、今更ら乍ら、自分の、弱い心を、なげかれたそうである。  
「俺が、今に、時期が来て、あらゆる一切を捨て去つて、自分、自身の、路に、生くる時は、ま  
ち子、お前は、あくまでも、俺について、怎麼、苦惱にも、打ち勝つて、くれるらう、な、  
俺は、お前を信んずる、お前さい、俺共、あつたならば、俺はかならず、俺自身を、完全に  
生かしかるから、まあ、少しの間、辛棒してくれ」

奥さんは、そうした、悠さんの言葉に。決心なさつたそうです。奥さんの全てを心から、皆、  
悠さんに、捧けて、悠さんの仕事を、助けようこ、なさつたそうです。

そうして、たへず、不如意な、境遇は、悠さんを、慰め乍ら、御兩親や、お店の爲に、一身を  
犠牲にして、よく、盡されたんだそうです。その爲に、御兩親にも愛され、一家は、圓滿な生活  
を、送られたんだ、そうですけれど、肺病になられてから、そうした、生活は、たちまち、破壊  
されたんです。

不治の病にかゝつた、奥さんは、もうその時、御自分はどう、遠からず、離縁される、運命であり、又御自分でも、獨身生活にかへて、静養しながら、靜かに悠さんの、成功を待ちたいと思われたのでした。

さ云ふのは、奥さんは、もう、そうした、大きな、お店の、主婦になられることが、元より、御自分の、望みでは、なかつたそうです。

よく奥さんは、そうした、生活に耐へられなくなつて何度、家を出ようか、なさつたか知れなけれぬ、いつも、不如意の境遇に、熱烈な、希望に、燃えてゐる、悠さんを、思ふに、さうしても、出られなかつた、そうです。さうして、怎麼、苦勞も、甘んじて、それはそれは、並大底でない程、働かれたそうです。

處が、今まで、樂をしてゐられた、悠さんは、急に大店の主婦として、氣をつかつたり、身にあまる、働きを、なさつたので、その爲に、病氣になられた事は、この前の、悠さんの、御手紙でも、詳しく書いて、ございましたでしょう。

處が、悠さんが、御實家へ、歸へられてから、間もなく、悠さんは、あゝした、希望を抱かれて、御上京なさつたそうです、その時に、お家の、貴い、寶を、賣り拂らつて、悠さん御自身の

借金を、立派に、すまして

東京で、創作、なさろうと、決心されたんです。妻が、それを、悠さんの、御實家では、悠さんが、御上京になつたさ、云ふことも、單に、奥さんの後を、追われて行かれたさのみ、取つて非常に、奥さんを、恨らんでゐられたそうです。その上、貴い、寶物を賣り拂らつた、莫大な金を、持参されて、奥さんの爲に、東京で、暮らして、ゐられるさ、思はれ、尙一層、奥さんや、奥さんの御兩親を、悠さんの、御實家では恨んだそうです。

田舎でも、相當の、素封家に生れた、悠さんが、家を、捨て、御兩親を、捨て、何にも、かも一切捨て、御上京の時は、金が只、四、五圓に、下駄の、新しいのが一足で、着變一枚も持たずに突然、奥さんの御實家をたづねられたんだそうです。

随分、變つてゐますわね、いくら無慾だつて、いくら、無頓着さは云へ、これから、東京へ出て、活動しようさ、する人が、何一つ、これさ云ふ、道具もなく、金さへ、持たない、悠さんの心持を、今も、奥さんさ、語つて、あきれたんです。

處が悠さんの、田舎からは、寶物を、賣り拂つた莫大な、金を持つて、暮らして、ゐられるさ、思われ。毎月送つて下さつた、奥さんの藥代さ、悠さんが、御上京になる時生活費だけは、送つ

て、下さる、約束でしたのが、全々一文の金も、送つて来なく、なつたそうです。

只でさへ、生活に、こまつて、ゐられる、貧しい、奥さんは、その上、病氣を持つて、何に一つ、生活の爲に働けず、その上、悠さんと共に、喰つて行かなくてはならないので、奥さんは、怎麼に、奥さんの實家の御両親や。妹さんとの仲に、立つて、心を傷められたかは、それは、それは、お話にならない程でしたそうです。

その上、御承知の通り、お坊ちゃん、そだちの、悠さんの、ここですから、それは思想は、深かい、考へを、お持ちでしょう。けれど、世の中の苦勞を、知らない、悠さんは、毎日、何にもせず、奥さんの二階で、原稿紙に向かつて、惱へて、ばかり、ゐられるので、奥さんの切なさ、並大底では、なかつたそうです。それは、そうですわね。世間的に、何んの智識もない、悠さんは、月に、この位ひであつたら、生活出来るか、さいふことなぞ、一向知らず、奥さんの家の二階に、創作をしてゐられたんだそうです。それも、豊かな、お家に、居候してゐるならまだしも、今も云つた通り、貧しい暮の上に、奥さんが御病氣を、きてゐるんですから、奥さんの御両親の、御苦勞は、實に、私お聞きしてお察したわ。

## 三十五

それでもね、感心ですわ、お奥さんの、御両親は、一度、娘の夫として、お世話になつた云ふ、御恩があるので、厭な顔、ひみつ、せずに、よく、我儘な悠さんをお世話したそうです。何んぞ、悠さんの、御實家から、悪く、思われても、今に誤解が、晴れたら、わかることだから、決つして、悠さんに、對して、厭な顔ひみつ、してはならないぞ、御両親は、常に家内の人達に、影になつて、云われたそうです。

今の世に、しかも、貧しい人達としては、感心な方ですわね。

その變り、奥さんの、着物や、羽織は、大概、質屋の中へ、運ばれて、わづかな、金で、寂しい時は、お酒を買つて、悠さん、御自身の、不遇な心を、慰めて、上げたそうです。

けれども、其處こは、いつまでも、續きせん、兎角、悠さんの、爲に、奥さんは、藥を買ふ金にさへ、こまられた事も、あつたそうです。

その頃、から、悠さんは、奥さんのお家に對して、お氣の毒だ、云ふので、生れて、始めて



悠さんに、務めに、某、煙草會社の。會計課へ、出られた、そうです。けれども元來、そうした素質を、毛頭も持つてゐない、悠さんは、そうした生活には、當底、耐へられなかつた、そうです。

その頃でした。悠さんが、あの頃住んでゐられた、松葉町の、寺の住職は、悠さんの、知人であり、かつ、悠さんを、よく理解して居られた、爲に、そうした、苦しい立場にゐる、悠さんを半年位ひなら、お世話を、するに云ふので、奥さんご、お二人は、あの寺へ、越されたのです。そうして、悠さんは、會社を、廢められ、毎日、讀書や、耽想をしながら、創作に、筆を取つてゐられたのです。

しかしお金など、一文も、這入る處がなかつた。悠さんは、その頃、東京に、居る、友人や、知人の處へ、行かれ、その事情を語られ、少しばかりの金を借りて、その日、その日を、奥さんご、貧しい生活をしてゐられたのです。けれども、そうして、苦勞してゐる、矢先に、奥さんの、藝術的生涯に、一大變化が來たのだそうです。

「藝術家になる前に人として俺は、生きなくてはならない」そうした、眞摯な懷疑に、出合つた悠さんは、一時、創作を、なげ捨て、毎日、思案にばかり、耽けてゐられたそうです。

奥さんも、ね、今になつて、考へて見れば、あの時の河野は、當底、人の想像もつかない程、思想的な苦惱な生活を送つてゐたのでした。處がそれを、奥さんは理解することが出来なかつたんだ、そうです。そうして、それを、單に悠さんが、もう藝術を捨て、只、毎日、ぶらぶら、遊んでゐるやうに、取れたので、奥さんは、非常に、絶望されたのでした。のみならず御両親に對しても、奥さんは、顔を合せられない程、苦しかつた、そうです。

そうした、味氣ない、生活を、お二人が、送つて、ゐられる矢先に、悠さんの、御實家から、家の寶物を賣拂つたのは、お前の爲であり、尙、それを知りつゝ賣拂つたのだご、云ふ、恐ろしい、しかも、人の名譽を、毀損するやうな、手紙が、奥さんの、御両親、宛に、來たのだ、そうです。その上尙、そうして、貧しい處を、御自分の、着物を、全部質屋へ、入れて、悠さんを、お世話をして上げてゐるのを、御實家ではわからず、只、悠さんを、田舎から、つれ出したご取つて、非常に、恨らんだ、手紙を、奥さん宛に、二通、來たのでした。

奥さんの、御両親は、非常に、立腹されたそうです。

そうして、たへず悠さんに、歸省を、すゝめられたそうです。けれども、あの通りの悠さんですから、怎うしても、お歸へりになりませんでした。

奥さんの、御病氣は、日に益々、悪く、なつて来て、もう妻ごしての、役目も、果たされず日々のお世話も出来ない、處へ、醫者から、當分、夫ご、別居して、靜養しなくてはならないと云われたり、その上こうして、お世話しても、悠さんの、御實家からは益々、悪く、取られるので、奥さんは、このさい、もう別れるより、外に路が、無かつたそうです。それも、身體さへ、丈夫なら、何んご思われようごも、今に、理解出来るごごとして、怎麼に、苦勞しても、悠さんには生活の不安を、あたへないで、創作させて、上げたいご、は心に思ふものご、長い病氣を持つて、その上働けない、奥さんごしては、怎麼に、あせても、怎うするごごも、出来ず、そうかご云つて、二人で、いつまでも、貧しい御両親に、世話になつて、ゐるごごが、非常に、奥さんごして、心苦くなつて、來たのです。そうした、苦惱の爲に、奥さんは、いくらか、ヒステリーになられ、よく、夫婦喧嘩を、なさつた、そうです。

その頃から、奥さんは、毎日、薄暗い、家に、苦惱に満ちた、悠さんの顔を眺め乍ら、貧しい家計の話を、聞いてゐられるのは、一時も、苦痛だつた、そうです。

それで、よく、奥さんは、家を外にしては、お友達の家を、遊んで歩くかされたそうです。ある時は奥さんの幼なじみの男の方の處へ遊びに行つては、そうした不愉快なごごを一時忘れようご

なさつたんだそうです。家を出づるご、奥さんは、始めて、ほつご息をつく位ひ、奥さんには、家の空氣が、感じ安い、奥さんの胸には、重荷だつたそうです。

家を出るご、もう家へ、歸へるのが、たまたまなく、不愉快だつた、そうです。二階に、悠さんが、苦惱してるのを、氣の毒ごは思ひ乍らも、なぜか、家へ早く歸へるのが、奥さんには、命を縮められるように切なかつたそうです。

奥さんにはね、その時ばかりは、「貧病」程つらいものは、無いご、しみじみ嘆かれたそうです。

一度なご、ほんごうに、死んで了をうご、思われたごごがあつた、そうですわ、可愛想にね。悠さんの留守に書置きをして、鎌倉まで、飛んで行かれたが、鎌倉警察で止められ、實行出来なかつたんだそうです。

自分さへ、この世から死んで、了つたら、全く悠さんの御實家に対しての誤解は晴れるごごだろうご、思われ、その上悠さんが、只奥さんの後を追われたものなら、もう歸へられるご思ふて、死のうご、覺悟なさつたんだそうです。

## 三十六

それから、離別の原因を云ふのわね、奥さんは、決つして、悠さんを、愛想盡かしたのでは、無いのです。

それこそ云ふのは、今になつて、考へれば、奥さんは、ほんまうに、悠さんこそ云ふ方を、知らなかつたのです。云ふのは、悠さんが、作家になろうとして、御上京になり、筆を取つてゐられたが、思ふようには行かない内に、思想上の、一大變化が来て、藝術も、何にもかも、捨て去つて、苦惱してゐる、悠さんの心を、その時は、奥さんには、理解出来なかつたのだ、そうです。

それを單に、怠惰から出て、毎日、遊んでゐられると取れたのです。して見れば、創作をなさる、氣もなく、只こうして、東京に遊んでゐる處を見るに、これは、只奥さん、自身の爲にのみ上京されたと思われ。

愛想盡かしを、したなら、悠さんは、田舎へ、歸へられるだろう。

それこそ、あくまでも、藝術家になられるならば、きつと奮發されるだろうと思つたのでした。それ故に別れることは、悠さんの爲に、何により眞の意味に於いて愛することであると思ひました、奥さんは、ことに薄情のような、態度を持つて、長年つれ添ふた、不憫な悠さんをふり捨てたのである。

何んの爲に、こうして、ふり捨てたのか、今に、悠さんにも、悠さんの、御實家にも了解される日がくるであろうと、奥さんは、心の中で思つてゐました。

その時、悠さんは、

「まち子、俺は、お前に、捨てられることは、夢にも、思ひなかつた。お前は、お前は、ここまで、俺についてくる女だ、俺は信じてゐた。今そのお前に、捨てられたのだ、そうして、もう永久に他人になつて、了ふこと云ふ事が、俺には、俺には、怎うして、ある可からざる事が、あつた時のやうな、氣がしてならない。しかしもう、駄目だ、有難う、俺はお前に感謝する。俺はお前によつて、人生を云ふものを、よく深く教へられた。」

悠さんは、そう云つて、奥さんに頭を下けた、そうである。その時の奥さんの、胸の中には、はりさける、ように、つらかつたそうです。

「長い間、お前にも、苦勞ばかり、させて、すまなかつたね、こうして、別れても、病氣が氣になる、精々、養生して、早く元々の身體に、なつてくれ。俺もこうして、貧乏してゐるからには金が無いので、藥代はやれないのが残念だ、田舎へ、離縁したことが、解かつたなら、手切れ金として、お前の藥代位ひ、いくらか、送るだろう」

悠さんは、そう云つて、泣いてゐる、奥さんを慰め乍ら、着る着物一枚で、奥さんの家から出られたそうである、その後姿を、眺めた奥さんは、思わず、聲を立て、泣いたそうである。

奥さんは、只、いつまでも、悠さんの胸に、自分の姿が、薄情なそうして、多情な女として、寫つてゐるのが、つらいさ常に嘆けられたそうです。

このまゝ、薄情な女としての、印象を残した、奥さんは、又この嫉妬されたことも、永久に謎として、悠さんの胸に残つたのです。

別れてから、さ云ふものは、一日でも、悠さんのことを忘れてゐた日は、無かつた、そうです。今頃は、果たして、さごに、暮らして、居られることであろうと、いつも寢苦しい、晩なぞ、思い出しては、悠さんの身を、案じて、居られたそうである。

しかし、いつまで、たつても悠さんは、ついに、田舎へ歸へられず、あくまでも、自分を生か

し切らんが爲に、思い悩んで、ゐられると、聞いた時、しかも二年過ぎたの、今日、あらゆる、苦勞をして、しかも、尙、屈せず、自分の路に、生きよう、なさる、悠さんの精神を今度始めて、知つた、しかも、貴男を通じて、始めて、了解出来た、奥さんは、あの時、自分が、悠さんを見る、腫の浅かつたことを非常に、悠さんに對して、すまなく、思つてゐられたわ。

その上、いくら、悠さんの身を思ひ、田舎の家の爲に義理を立つて見た處で、一向田舎の家では、それを、何んとも、取らないので、奥さんが、悠さんの、田舎の家へ對しての、反感は一層深くつてゐた。

それ程、自分を犠牲にして、悠さんの爲に、一切を捨て、田舎の家では、それをかへつてよい事にとつてゐるので

奥さんは、自分で、自分の爲にした、行爲を愚かしく、思い出したそうです、もう、何んと思つた處で、こちらから、善意に、出た處で、悪意に取るんだから、もう、奥さんは、悠さんが、東京にゐられる間は、さごまでも、お世話しなくては、ならないと、確く決心なされた。そうです。

何んぞ云つた處で、もう田舎へ歸へる、悠さんではないと、信じてゐる、奥さんは、今度、もう妻としてとなくとも、あくまで、悠さんに、つかへよう、覺悟を定められた。